

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

堂 園 遺 跡
原 田 遺 跡
岩 塚 古 墳
玖珠SA地区遺跡群
谷ノ瀬遺跡

1995

大分県教育委員会



原田遺跡全景

序

大分県教育委員会は昭和58年度以来、日本道路公団の委託を受け、九州横断自動車道（大分自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。この間重要な遺跡が数多く発見されましたが、このような発掘調査の成果につきましては、今年度から順次報告書としてまとめ刊行していく予定であります。今回は昭和63年度から平成5年度にかけて実施した日田～玖珠間34遺跡の調査の一部である日田市の堂園遺跡、玖珠町の原因田遺跡・岩塚古墳・玖珠S A地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡の5遺跡について収録いたしましたが、本書を通して埋蔵文化財に対するご理解をいただくとともに、学術的な貢献ができれば幸いです。

最後に、調査のご指導をいただきました諸先生方をはじめご協力いただきました関係各位および地元の方々に対し、深く感謝を表しますとともに厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月

大分県教育委員会 教育長

帯 刀 将 人

例 言

1. 本書は九州横断自動車道建設に伴う事前調査のうち、平成2年度から平成3年度に調査した日田市の堂園遺跡、玖珠町の原田遺跡・岩塚古墳・玖珠SA地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、日田市教育委員会・玖珠町教育委員会、並びに地元の方々のご助力を得た。
4. 出土遺物及び関係資料は大分県教育委員会文化課に保管している。
5. 本書の執筆には各遺跡調査担当者があたり、縄文時代遺物については坂本嘉弘が、石器については山田尚志が執筆した。
6. 岩塚古墳の人骨の取上げ及び分析については、田中良之が行った。なお今回掲載した田中の報告は出土状況を中心としたもので、形質学的な詳細は、後日刊行予定の報告書に掲載する。
7. 遺構の実測は調査員があたり、遺物の実測・製図は調査員の他に坂本嘉弘・牧尾義則・綿貫俊一・西村しのぶ・阿部みゆき・末政圭子の協力を得た。

本文目次

序

例言

I. 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
II. 日田地区の遺跡	3
1. 遺跡の立地と環境	3
2. 各遺跡の調査	7
堂園遺跡	7
III. 玖珠地区の遺跡	13
1. 遺跡の立地と環境	13
2. 各遺跡の調査	17
1) 原田遺跡	17
2) 岩塚古墳	67
3) 玖珠S A地区遺跡群	77
4) 谷ノ瀬遺跡	81

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	1
第2図	日田市主要遺跡分布図	5～6
第3図	堂園遺跡周辺地形図	8
第4図	堂園遺跡遺構配置図	9
第5図	堂園遺跡溝状遺構実測図	9
第6図	堂園遺跡1号竪穴実測図	10
第7図	堂園遺跡1号竪穴出土遺物実測図	11
第8図	玖珠町主要遺跡分布図	15～16
第9図	原田遺跡周辺地形図	18
第10図	原田遺跡遺構配置図	19
第11図	カマド模式図縦断面図	20
第12図	原田遺跡1号住居跡実測図	20
第13図	原田遺跡1号住居跡出土遺物実測図	21
第14図	原田遺跡2号住居跡実測図	22
第15図	原田遺跡2号住居跡出土遺物実測図	22
第16図	原田遺跡3号住居跡実測図	23
第17図	原田遺跡3号住居跡カマド実測図	24
第18図	原田遺跡3号住居跡出土遺物実測図	25
第19図	原田遺跡4号住居跡実測図	26
第20図	原田遺跡4号住居跡カマド実測図	27
第21図	原田遺跡4号住居跡カマド周辺遺物出土状況実測図	28
第22図	原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図 (1)	29
第23図	原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図 (2)	30
第24図	原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図 (3)	31
第25図	原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図 (4)	32
第26図	原田遺跡4号住居跡出土鉄器実測図	32
第27図	原田遺跡5号住居跡実測図	33
第28図	原田遺跡5号住居跡カマド実測図	34
第29図	原田遺跡5号住居跡出土遺物実測図	35
第30図	原田遺跡5号住居跡出土石製品実測図	35
第31図	原田遺跡6号住居跡実測図	36
第32図	原田遺跡6号住居跡カマドA実測図	37
第33図	原田遺跡6号住居跡カマドB実測図	38
第34図	原田遺跡6号住居跡出土遺物実測図	38
第35図	原田遺跡7号住居跡実測図	38
第36図	原田遺跡7号住居跡カマド実測図	39
第37図	原田遺跡7号住居跡出土遺物実測図	39
第38図	原田遺跡8号住居跡実測図	40

第39図	原田遺跡 8 号住居跡カマド実測図	41
第40図	原田遺跡 8 号住居跡出土遺物実測図	42
第41図	原田遺跡 9 号住居跡実測図	43
第42図	原田遺跡 9 号住居跡出土遺物実測図	44
第43図	原田遺跡 9 号住居跡カマド実測図	44
第44図	原田遺跡10号住居跡実測図	45
第45図	原田遺跡10号住居跡カマド実測図	46
第46図	原田遺跡10号住居跡出土遺物実測図	47
第47図	原田遺跡11号住居跡実測図	48
第48図	原田遺跡11号住居跡カマド実測図	49
第49図	原田遺跡11号住居跡使用土器実測図	50
第50図	原田遺跡住居跡間接合遺物実測図	51
第51図	原田遺跡埋甕遺構実測図	52
第52図	原田遺跡埋甕遺構使用土器実測図	53
第53図	原田遺跡 1 号土坑出土遺物実測図	54
第54図	原田遺跡 1 号土坑実測図	54
第55図	原田遺跡 2 号土坑実測図	54
第56図	原田遺跡 3 号土坑実測図	54
第57図	原田遺跡 4 号土坑実測図	55
第58図	原田遺跡 5 号土坑実測図	55
第59図	原田遺跡 6 号土坑実測図	56
第60図	原田遺跡 7 号土坑実測図	56
第61図	原田遺跡包含層出土縄文時代晩期土器実測図	57
第62図	原田遺跡包含層出土紡錘車実測図	58
第63図	原田遺跡包含層出土石帯実測図	58
第64図	原田遺跡出土旧石器時代石器実測図	60
第65図	原田遺跡出土縄文時代石器実測図 (1)	61
第66図	原田遺跡出土縄文時代石器実測図 (2)	62
第67図	原田遺跡出土縄文時代石器実測図 (3)	63
第68図	岩塚古墳周辺地形図	67
第69図	岩塚古墳主体部周辺地形図	68
第70図	岩塚古墳墳丘実測図	69
第71図	岩塚古墳主体部実測図	70
第72図	岩塚古墳出土遺物実測図	72
第73図	岩塚古墳人骨出土状況	74
第74図	玖珠 S A 地区遺跡群周辺地形図	77
第75図	玖珠 S A 地区遺跡群 1 号石棺周辺地形図	78
第76図	玖珠 S A 地区遺跡群 1 号石棺実測図	79
第77図	玖珠 S A 地区遺跡群 1 号石棺出土遺物実測図	80
第78図	谷ノ瀬遺跡周辺地形図	81
第79図	谷ノ瀬遺跡遺構配置図	82
第80図	谷ノ瀬遺跡 1 号竪穴住居跡実測図	83

第81図	谷ノ瀬遺跡出土遺物実測図	83
第82図	谷ノ瀬遺跡2号竪穴住居跡実測図	84
第83図	谷ノ瀬遺跡1号火葬墓実測図	84
第84図	谷ノ瀬遺跡2号火葬墓実測図	85
第85図	谷ノ瀬遺跡1号井戸状遺構実測図	85
第86図	谷ノ瀬遺跡1号炭窯跡実測図	86
第87図	谷ノ瀬遺跡1号土坑実測図	87
第88図	谷ノ瀬遺跡2号土坑実測図	87
第89図	谷ノ瀬遺跡3号土坑実測図	87
第90図	谷ノ瀬遺跡4号土坑実測図	88
第91図	谷ノ瀬遺跡5号土坑実測図	88
第92図	谷ノ瀬遺跡6号土坑実測図	88
第93図	谷ノ瀬遺跡7号土坑実測図	89
第94図	谷ノ瀬遺跡8号土坑実測図	89
第95図	谷ノ瀬遺跡9号土坑実測図	90
第96図	谷ノ瀬遺跡溝状遺構実測図	91
第97図	谷ノ瀬遺跡1号ピット実測図	92
第98図	谷ノ瀬遺跡包含層出土遺物実測図	92
第99図	玖珠盆地西部の古墳時代集落跡分布図	93

表 目 次

第1表	原田遺跡住居跡一覧表	17
第2表	原田遺跡出土石器計測表	64
第3表	岩塚古墳被葬者の歯冠計測値を用いたQ相関係数	76

写真図版目次

- 巻頭図版 原田遺跡全景
- 図版1 原田遺跡出土石帯・3号住居跡カマド
- 図版2 原田遺跡4号住居跡カマド
- 図版3 岩塚古墳
- 図版4 堂園遺跡全景・溝状遺構
- 図版5 堂園遺跡1号竪穴
- 図版6 原田遺跡1号住居跡
- 図版7 原田遺跡2・3号住居跡
- 図版8 原田遺跡4号住居跡
- 図版9 原田遺跡4号住居跡
- 図版10 原田遺跡5号住居跡
- 図版11 原田遺跡6号住居跡
- 図版12 原田遺跡7号住居跡
- 図版13 原田遺跡8号住居跡
- 図版14 原田遺跡9号住居跡
- 図版15 原田遺跡10号住居跡
- 図版16 原田遺跡10号住居跡
- 図版17 原田遺跡11号住居跡
- 図版18 原田遺跡4・5号土坑
- 図版19 原田遺跡6・7号土坑
- 図版20 原田遺跡縄文埋甕遺構
- 図版21 岩塚古墳主体部 (1)
- 図版22 岩塚古墳主体部 (2)
- 図版23 玖珠S A地区遺跡群1号石棺 (1)
- 図版24 玖珠S A地区遺跡群1号石棺 (2)
- 図版25 谷ノ瀬遺跡1・2号住居跡
- 図版26 谷ノ瀬遺跡井戸状遺構・炭窯
- 図版27 谷ノ瀬遺跡火葬墓・土坑
- 図版28 谷ノ瀬遺跡土坑・弥生ピット
- 図版29 堂園遺跡1号竪穴出土遺物
- 図版30 原田遺跡1・2・3号住居跡出土遺物
- 図版31 原田遺跡4号住居跡出土遺物 (1)
- 図版32 原田遺跡4号住居跡出土遺物 (2)
- 図版33 原田遺跡5号住居跡出土遺物
- 図版34 原田遺跡6・7・8号住居跡出土遺物
- 図版35 原田遺跡9・10号住居跡出土遺物
- 図版36 原田遺跡11号住居跡出土遺物
- 図版37 原田遺跡包含層出土縄文土器

- 図版38 原田遺跡出土旧石器時代石器
図版39 原田遺跡出土縄文時代石器
図版40 原田遺跡出土須恵器 ヘラ記号・当具痕
図版41 谷ノ瀬遺跡出土土器

I 調査の概要

1. 調査に至る経過

九州横断自動車道は、長崎市を起点とし大分市に至る約252kmの高速自動車道であり、途中既に共用中の九州縦貫自動車道と鳥栖ジャンクションで十字型に直結する。このうち、大分県関係の基本計画は、県境～日田間が昭和44年1月22日、日田～大分間が昭和47年9月30日に計画決定された。このうち、日田～玖珠間の整備計画決定及び国の施行命令は昭和53年11月21日に出された。大分県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の依頼を受け、日田～玖珠間の道路建設予定地の分布調査を昭和58年から開始し、昭和61年7月で終了した。その結果、遺跡及び遺跡推定地は28ヶ所にのぼった。

発掘調査は、昭和63年度から用地買収の終了した場所を中心に開始した。昭和63年度は日田市草場第1遺跡、玖珠町小麦河野遺跡の試掘調査を実施。後世の開発もあり、遺構、遺物の顕著な検出は見られなかったため、試掘調査で終了した。平成元年度は平成2年3月に原田遺跡の試掘調査を実施。竪穴住居跡等を検出したため、平成2年度に本調査を行うこととした。平成2年度は14ヶ所の試掘調査と、5ヶ所の本調査を行った。この間工事関係者から道路建設工事中に古墳の主体部と思われる石棺を発見したとの通報があり、急遽本調査を行った。今回報告の岩塚古墳は、この時発見されたものである。平成3年度は6ヶ所の試掘調査と、8ヶ所の本調査を実施した。今回報告の堂園遺跡、原田遺跡、岩塚古墳、玖珠SA地区遺跡群、谷ノ瀬遺跡は、平成2・3年度に本調査を行った遺跡である。

九州横断自動車道

分布調査

昭和63年度調査

平成元年度調査

平成2年度調査

平成3年度調査



第1図 調査位置図

2. 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

平成2年度

調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）
後藤 宗俊（別府大学教授）
田中 良之（九州大学助教授）
時枝 克安（島根大学助教授）
後藤 正二（大分県教育庁参事兼管理部文化課長）
調査主任 渋谷 忠章（県文化課埋蔵文化財第2係長）
調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主任）、江田 豊（同主任）
友岡 信彦（同主事）、松本 康弘（同主事）、永松みゆき（同嘱託）
姫野 和子（同嘱託）、山本健太郎（同嘱託）、染矢 和徳（同嘱託）
橋本 一彦（同嘱託）

平成3年度

調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）
都出比呂志（大阪大学教授）
後藤 宗俊（別府大学教授）
下條 信行（愛媛大学教授）
伊藤 晴明（島根大学教授）
時枝 克安（島根大学助教授）
武末 純一（北九州考古博物館副館長）
秋葉 正嗣（大分県教育庁管理部文化課長）
調査主任 渋谷 忠章（県文化課埋蔵文化財第2係長）
調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主査）、江田 豊（同主任）
友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）、永松 みゆき（同嘱託）
山本健太郎（同嘱託）、橋本 一彦（同嘱託）、須原 緑（同嘱託）
調査補助員 松本 直子、金 宰賢、Lise, Hotdgkinson（以上九州大学）、伊 英明（専修大学）、
岡 崇、柏木 善治（以上別府大学）

II 日田地区の遺跡

1. 遺跡の立地と環境

堂園遺跡が立地する日田市は、大分県の最西部に位置し、筑後川の上流部の三隈川周囲に開けた日田盆地を中心としている。一見山間の小平野のように見えるが、水系的に北部九州との関係が深い。盆地中央の沖積地の標高は75～90mで、その周辺の標高100～200mに河岸段丘や「原（はる）」と呼ばれる台地が広がっている。遺跡の多くはこの段丘や台地上に立地している。堂園遺跡も同様に、この日田盆地の北東部、盆地に注ぐ花月川の支流である有田川を望む中尾原台地上に位置する。標高150m前後を測り、有田地区の沖積平野との比高差は40mほどである。

日田盆地の歴史を東部地域を中心にながめていくと、旧石器・縄文時代の遺跡としては、葛原遺跡・松野遺跡があり、西有田地区葛原遺跡では黒曜石の石器が採集されている。弥生時代になると遺跡は数を増す。盆地を挟んで対峙する山田原の台地上には前期後半から吹上遺跡・小迫辻原遺跡などが分布しているが、当地域では中期以降分布するようになる。その大半が沖積地を見下ろす台地上に立地する。小寒水遺跡・葛原遺跡・池辺原遺跡・須ノ原遺跡・王陵原遺跡・城内遺跡・佐寺原遺跡などがそうである。九州横断自動車道関係では、平成2年度佐寺原遺跡の発掘調査が行われた。ここでは中期初頭から古墳時代初頭まで途絶えることなく営まれた集落跡が検出されている。一方沖積地の微高地上にも平原遺跡などの集落が立地する。古墳時代では、日田盆地にある4基の前方後円墳のうち城山古墳が有田川右岸の須ノ原台地にあり、全長31mを測る。前方部が後円部より低く古式の様相を帯びている。同様に古式の円墳もこの地域には多くあり、中尾古墳Ⅰ・Ⅱ号、縫が迫古墳、葛原古墳がそれである。後期は後の律令時代に成立する日田5郷（鞆編・石井・在田・亘理・夜開）の前身となる政治的単位が成立する時代であり、この在田郷にも日田盆地最古の横穴式石室古墳として知られる有田古墳が築かれる。この石室からは仿製六獣鏡のほか玉類が出土している。また水目や佐寺原では丘陵の崖面を使い横穴墓が築かれており、佐寺横穴墓群は平成5年度に九州横断自動車道関係で調査されている。

遺跡の立地

旧石器・縄文時代

弥生時代

古墳時代

日田5郷



大迫遺跡より 佐寺原遺跡・堂園遺跡を望む

日田地区遺跡一覧

1	君迫遺跡	55	京田遺跡	109	亀ノ甲遺跡
2	荻尾遺跡	56	夕田古墳	110	町野原遺跡
3	二串西原遺跡	57	夕田横穴群	111	奥ノ迫遺跡
4	穴原遺跡	58	佐寺原遺跡	112	柳ノ本遺跡
5	大見取遺跡	59	堂園遺跡	113	鬼塚古墳
6	中ノ前遺跡	60	大迫遺跡	114	法恩寺1号墳
7	朝日宮ノ原遺跡	61	宮ノ下遺跡	115	法恩寺2号墳
8	天満1号墳	62	中尾1号墳	116	法恩寺3号墳
9	天満2号墳	63	中尾2号墳	117	法恩寺4号墳
10	天神山横穴群	64	ゴス園遺跡	118	法恩寺5号墳
11	尾部田遺跡	65	須ノ原遺跡	119	法恩寺6号墳
12	山ノ神(二串)遺跡	66	世尊寺遺跡	120	法恩寺7号墳
13	小迫古墳	67	城山遺跡	121	上井手遺跡
14	小迫横穴群	68	城山古墳	122	平松遺跡
15	森本遺跡	69	ハル遺跡	123	東寺横穴群
16	岩崎遺跡	70	平島古墳	124	日高遺跡
17	山田原遺跡	71	平島遺跡	125	千人塚1号墳
18	谷ノ久保遺跡	72	クエト1号墳	126	千人塚2号墳
19	用松原遺跡	73	クエト2号墳	127	大部遺跡
20	用松中村古墳	74	尾漕遺跡	128	小ヶ瀬遺跡
21	草場第1遺跡	75	尾漕古墳	129	徳瀬遺跡
22	草場第2遺跡	76	狐迫遺跡	130	日隈古墳
23	小迫辻原遺跡	77	有田塚ヶ原1号墳	131	日隈城跡
24	本村古墳	78	有田塚ヶ原2号墳	132	落久保遺跡
25	後迫遺跡	79	平島横穴群	133	津辻1号墳
26	羽野横穴群	80	片山原遺跡	134	津辻2号墳
27	日田条里遺跡群	81	慈眼山瀬戸口遺跡	135	隈山遺跡
28	友田坂本遺跡	82	大蔵古城跡	136	グランドヤ1号墳
29	三郎丸遺跡	83	丸山古墳	137	グランドヤ2号墳
30	三郎丸古墳	84	水目横穴群	138	グランドヤ3号墳
31	大内田遺跡	85	中尾原遺跡	139	尾園遺跡
32	鳥越古墳	86	塚原遺跡	140	穴観音古墳
33	片山石棺	87	湯尻遺跡	141	倉園古墳
34	向原遺跡	88	赤迫遺跡	142	長者原遺跡
35	荻鶴遺跡	89	大波羅遺跡	143	平野遺跡
36	今泉遺跡	90	薬師堂山古墳	144	尾坪遺跡
37	岳林寺遺跡	91	丸尾神社古墳	145	上野赤塚遺跡
38	北友田・吹上横穴群	92	丸尾古墳	146	護願寺1号墳
39	吹上遺跡	93	会所宮遺跡	147	護願寺2号墳
40	鍛冶屋廻り遺跡	94	田島(後山)古墳	148	護願寺3号墳
41	月隈城跡	95	元宮遺跡	149	寺内(護願寺)遺跡
42	月隈横穴群	96	鳥羽塚古墳	150	上野姥塚古墳
43	柴尾遺跡	97	会所山遺跡	151	上野カグネ塚古墳
44	縫ノ迫1号墳	98	会所山古墳	152	上野遺跡
45	縫ノ迫2号墳	99	馬形遺跡	153	上野横穴群
46	葛原古墳	100	倉迫遺跡	154	姫塚古墳
47	有田葛原遺跡	101	ガニタ1号墳	155	銭淵遺跡
48	寺坂古墳	102	ガニタ2号墳	156	陣が原辻原遺跡
49	峰崎遺跡	103	ガニタ3号墳	157	条里跡
50	大行寺遺跡	104	東寺原遺跡	158	高瀬遺跡
51	西有田赤ハゲ遺跡	105	古金遺跡	159	惣田塚古墳
52	有田1号墳	106	秣手遺跡	160	惣田遺跡
53	有田古墳	107	着来遺跡	161	大宮遺跡
54	上柳遺跡	108	求来里平島遺跡	162	手崎遺跡



第2図 日田市主要遺跡分布図

2. 各遺跡の調査

堂園遺跡

遺跡の立地は、日田市大字有田字堂園に所在する。遺跡の立地する中尾原台地は三隈川の支流有田川南岸に東西に連なる台地群の1つである。標高150m前後を測り、有田地区の沖積平野との比高差は40mほどである。台地の西側は谷を挟んでもうひとつの台地があり、弥生時代の集落跡の佐寺原遺跡として周知されている。この遺跡はこれらの台地から川に向かう北側斜面上に位置する。

調査は、まず重機で東西方向に8本のトレンチをいれた。そして遺構の検出された北地区と比較的平坦面を残した南地区を拡幅して再度遺構検出作業を行った。その結果、北地区から竪穴1基、溝状遺構1条、土坑3基を検出した。

本遺跡は台地上をさげ立地条件の悪い北側斜面を選んでいることから、この時期の当地域の文化をさぐる上で興味深く、類似した資料の増加を待ちたい。

以下時代順に検出遺構と出土遺物を記述していく。

古墳時代

古墳時代については、溝状遺構1条のみが後期に属する遺構である。調査区の中央部を地形にあわせて同じ高さに溝が掘られている。溝の上半は後世の削平をかなり受けているため、現状では長さ13.2mを残すのみである。溝の時期は遺物が少なくいずれも図示できない細片であるが7世紀後半と考えられる。

奈良時代

奈良時代の竪穴1基を検出したが、後世に多少の削平をうけている。竪穴は調査区の北側に位置し、北東に向かって低くなる斜面に建てられている。竪穴はほぼ方形を呈しており、南北約4.2m以上、東西約7.3mで竪穴下部の底面積は30㎡以上と考えられる。竪穴内部の設置としては、カマドはないが、炉が中央部やや西よりに設けられている。支柱穴は4本で、ほぼ長方形に配置している。柱間の距離は2.0~4.2mで、柱穴は径20~30cm、深さは30~60cmに掘りこまれている。柱痕は検出できなかった。床面は貼り床をおこなわず、基盤層をそのまま床にしてふみしめられている。

出土遺物 (第7図) 出土遺物は200点ほどで、須恵器の短頸壺・坏身・土師器の壺・小皿などである。1は須恵器坏蓋で、復元口径14.2cm、復元器高2.5cm。2・3・4は須恵器坏身で、2は復元口径12.0cm、復元器高4.2cm。3は復元口径12.4cm、復元器高3.6cm。4は復元口径13.0cm、復元器高3.5cm。回転ヘラケズリで仕上げている。5は土師器坏身で、復元口径12.6cm、復元器高4.9cm。精製粘土を用い淡茶褐色を呈する。6は須恵器甕片で復元口径18.8cm。ヨコナデで仕上げている。7・8は土師器甕片で、7は復元口径17.2cm。8は復元口径18.0cm。9は須恵器長頸壺で、口縁部・底部を欠いている。復元体部最大径は上半にあり21.0cm、残存器高16.5cm。ヨコナデで仕上げている。10は須恵器短頸壺で、口縁部を欠いている。復元体部最大径は上半にあり25.6cm、短い高台をもつ。

竪穴の時期は、上記の出土遺物からみて8世紀前半と考えられる。

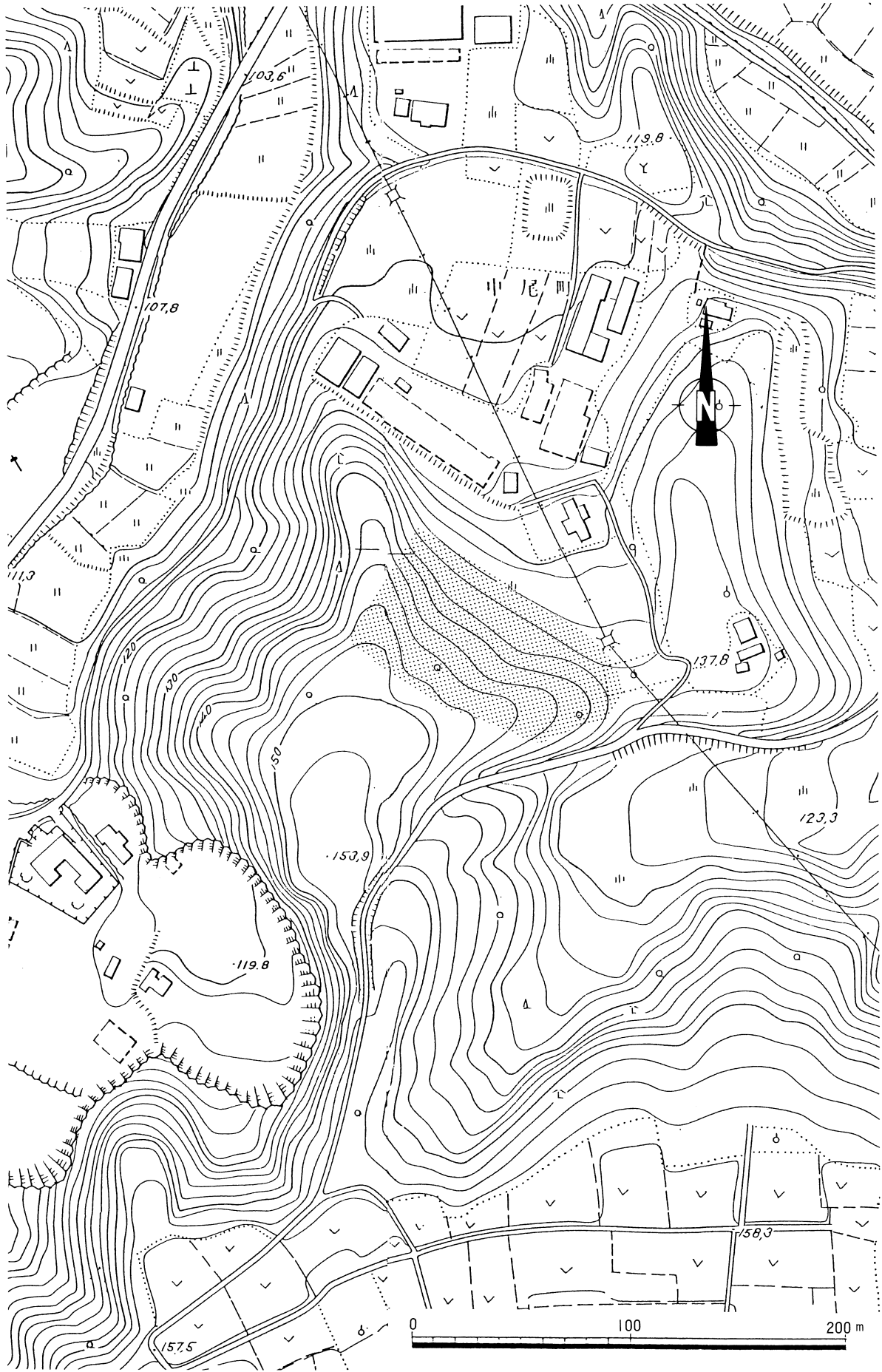
遺跡の所在

試掘調査

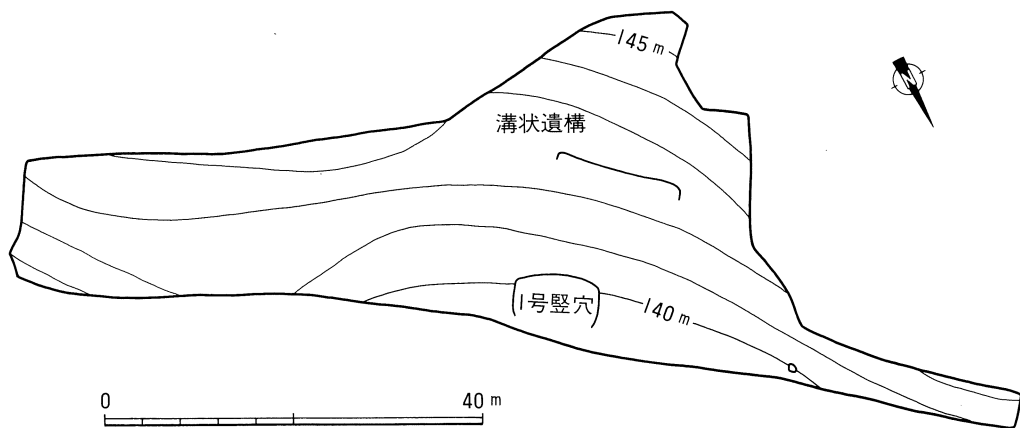
溝状遺構

竪穴

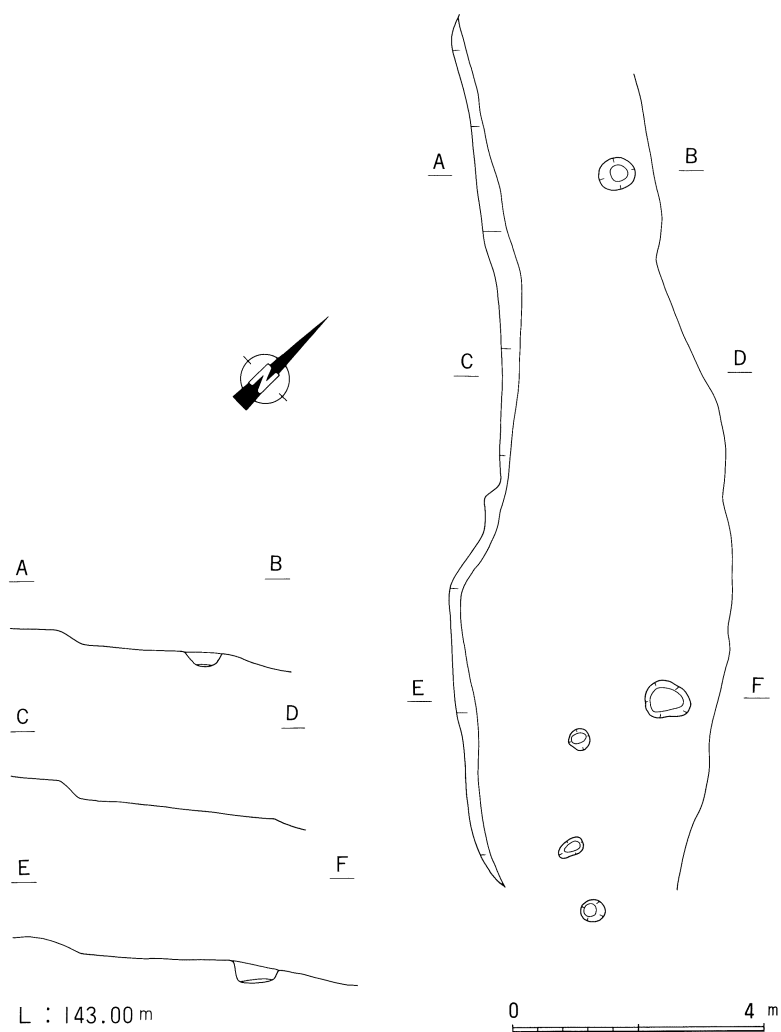
出土遺物



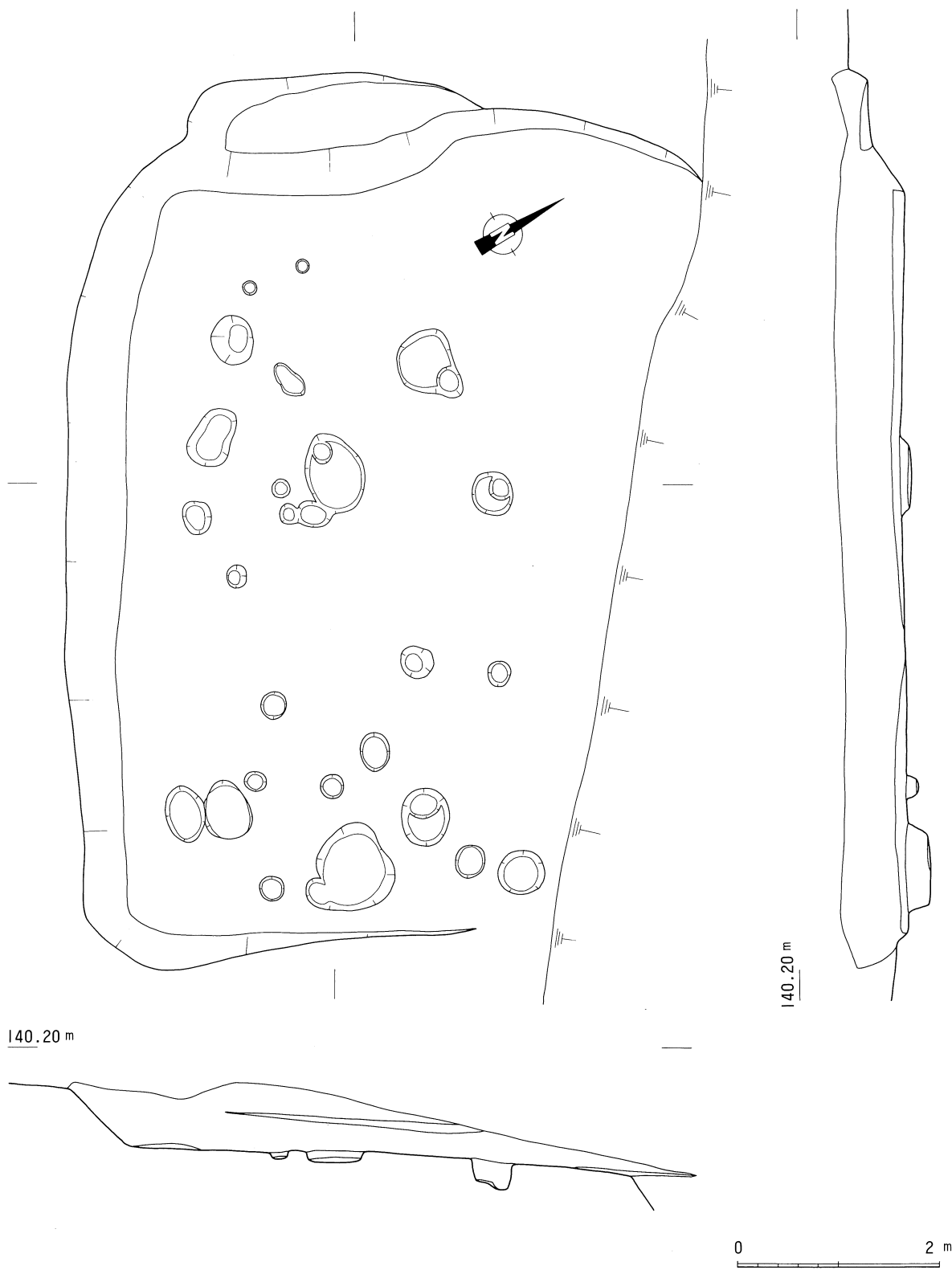
第3図 堂園遺跡周辺地形図（1；2,500 日田市都市計画図 豆田・有田地区より転載）



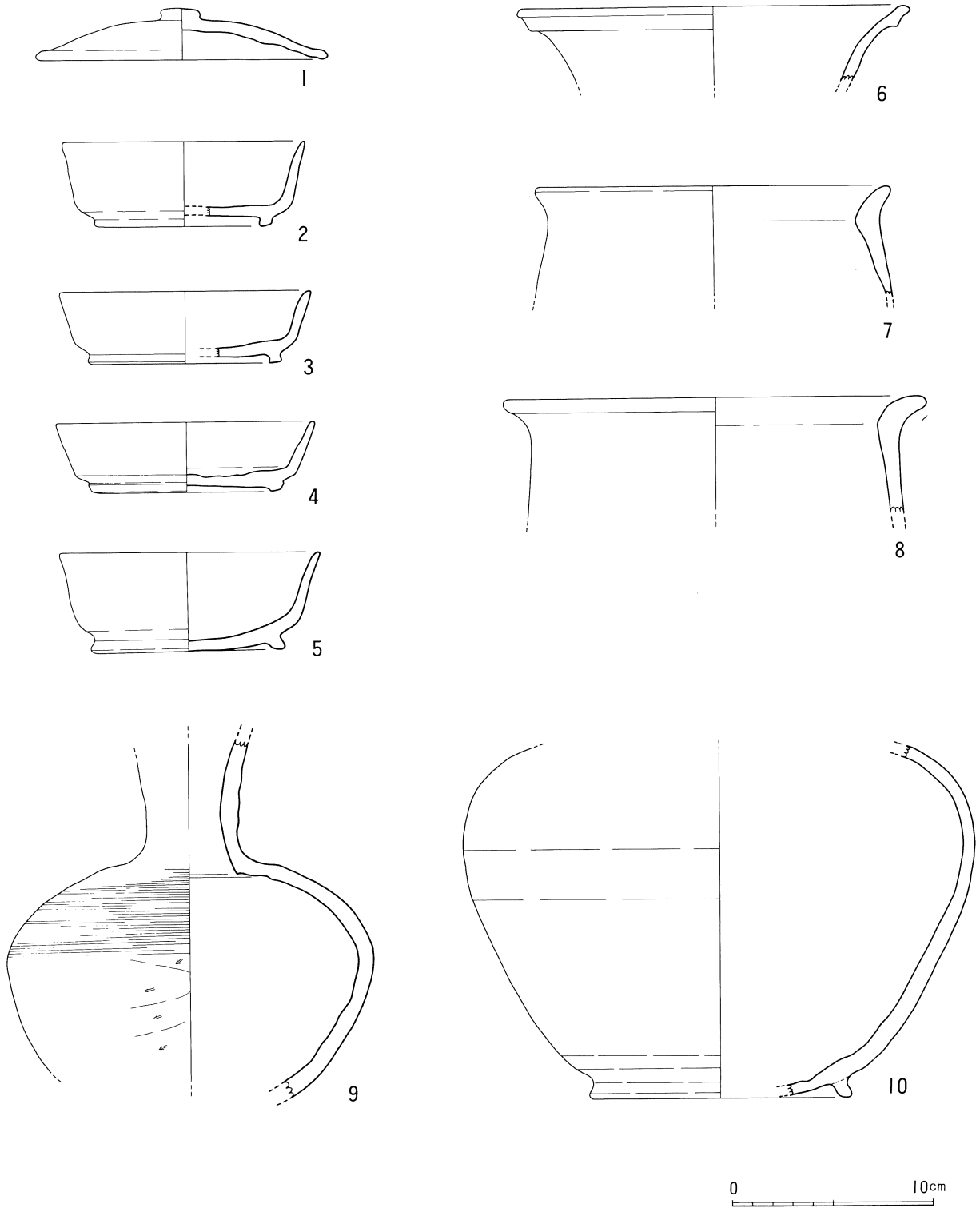
第4图 堂園遺跡遺構配置図



第5图 堂園遺跡溝状遺構実測図



第6図 堂園遺跡1号竪穴実測図



第7図 堂園遺跡1号竪穴出土遺物実測図

Ⅲ 玖珠地区の遺跡

1. 遺跡の立地と環境

遺跡の立地

原田遺跡、岩塚古墳、玖珠S A地区遺跡群、谷ノ瀬遺跡が立地する玖珠町は、大分県の西部に位置し、九州最大の河川である筑後川上流、玖珠川の周囲に開けた盆地を中心としている。東は大分郡湯布院町、南は玖珠郡九重町、熊本県阿蘇郡小国町、西は日田市・日田郡天瀬町、北は宇佐郡安心院町・院内町、下毛郡耶馬溪町・山国町に接し、周囲は九重町境に万年山、小国町境に吉武山、湯布院町境にカルト山・福万山などがそびえ、玖珠盆地とは山や峠をもって境とする。

遺跡の環境

玖珠盆地周辺は、第4紀の万年山溶岩や耶馬溪溶結岩により形成された万年山をはじめ、大岩扇山、小岩扇山、青野山、伐株山、角埋山等のメサ（卓状台地）の山々に囲まれており、特に大岩扇山はメサ地形として天然記念物に指定され、万年山はペディオニーテ型メサと呼ばれ上下二段となっている。盆地はこれらの山々に囲まれた東西に長い三日月形を呈している。

盆地の中央を流れる玖珠川は、九重連山に源を発し、玖珠盆地を西流し、日田市で大山川と合流、三隈川となる。この間大小の川と合流しながら、福岡県に入り筑後川となって有明海にそそがれている。この玖珠川を中心に玖珠盆地は開けており、南側は伐株山の山麓から派生する扇状地と沖積地であり、北側は玖珠川に流れこむ小河川によって形成された南北に細長い小支谷が入り込んでいる。

原田遺跡 岩塚古墳

今回、本報告する4遺跡は、この玖珠盆地の西端部、玖珠川右岸の舌状台地先端部に位置する。遺跡は、西から原田遺跡、岩塚古墳、玖珠S A地区遺跡群、谷ノ瀬遺跡と連なっている。最も西に位置する原田遺跡（玖珠町大字戸畑字原田）は標高360m前後で、南側眼下に玖珠盆地が望める。盆地との比高差は約50mである。岩塚古墳（同戸畑字半組）は、原田遺跡から500m程東へいった舌状台地の先端に位置し、道路建設工事中に発見された古墳である。明確な墳丘は認められず、当初は存在が明らかでなかった。標高は373m前後で、この丘陵には先端部に6世紀後半～7世紀前半に築造されたと考えられる駅東横穴墓群が知られているだけである。

玖珠S A地区 遺跡群

玖珠S A地区遺跡群（同戸畑字竹ノ中）は、岩塚古墳からさらに700m程東へいった位置にあり、岩塚古墳の発見により、急遽試掘・本調査を行った地点である。遺跡群は大小5つの尾根から成り、南西に位置する尾根上から石棺が検出された。標高は360m前後で、南側眼下には小田遺跡群が望める。谷ノ瀬遺跡（同戸畑字谷ノ瀬）は、玖珠S A地区遺跡群から500m程東へいった位置にあり、野田山丘陵の北側斜面の谷部に位置し、浅い谷を挟んで南北にある。この野田山は山頂に中世の山城が、中腹には古墳や石棺等が存在する。

谷ノ瀬遺跡

遺跡の分布 状況

玖珠地域は、日田地域とともに筑後川上流域に位置し、北部九州と東九州を結ぶ、文化・交通の要衝地として重要な位置を占めている。さらに当地域には遺跡の立地としては良好な台地や河岸段丘が発達しており、旧石器時代から近世に至るまで数多くの遺跡が存在する。玖珠町内の遺跡の分布も、この盆地を中心とした地域に集中しており、主に扇状地・沖積地上に集落跡が、周囲の台地上に古墳や石棺群など墳墓が確認されている。また、玖珠盆地周辺ではナイフ形石器など後期旧石器時代の遺物が採集されているが、主に確認される遺跡の多くは弥生時代から古墳時代、中世の山城等の時期に集中している。

玖珠川左岸

玖珠川左岸の西側の扇状地では、昭和60・61年度にかけて小田遺跡群の発掘調査が行われた。ここでは縄文～中世に至る多くの貴重な遺跡が確認され、弥生時代後期末～奈良時代までの集落の変遷が明らかにされた。西田遺跡では7世紀後半～8世紀初めの大型土坑内から円面硯が

出土し、太宰府跡出土の木簡にみる「久須評」との関係語る貴重な資料といえよう。小田遺跡群の一角には横穴式石室を持つ鬼塚古墳が位置し、石室内には彩色の壁画を施している。装飾を持つ古墳ということで、日田など筑後川沿いの古墳との影響が指摘される。

盆地のほぼ中央には玖珠城（伐株山城）跡がある。元来は高勝寺という寺であったが、文献資料によると、南北朝時代に戦が本格化するにつれ、寺としての性格を持ちながらも次第に山城へと様相を変えていったと思われる。玖珠城跡は天正14年（1586）薩摩島津軍の豊後侵攻により落城し、山城の幕を閉じた。この伐株山の北西の微高地には將軍塚古墳、陣ヶ台彦塚・姫塚古墳、扇状地には多くの石棺群が確認された小竿遺跡等が、北東の扇状地には2基の石棺が確認された寺山古墳、山王古墳が位置する。

盆地の南東部に位置するおごもり遺跡では、弥生時代終末期の集落の一部が確認され、土壇内から中国後漢の鏡片が発見されている。さらに当遺跡では5世紀前半の方形周溝墓も調査され、主体部の4基の箱式石棺内から多量の副葬品が出土した。当地域の支配者クラスの墳墓であろう。その北方には玖珠郡内唯一の前方後円墳である亀都起古墳が所在する。やはり当時の当地域の支配者クラスの墳墓であろう。この周囲は石棺群・横穴墓群・円墳を持つ船岡山遺跡など墳墓群が集中する地域である。

玖珠川右岸の地域では、森川の周辺に遺跡の多くが集中している。中世では織豊系の城郭である角牟礼城跡や瀬戸遺跡・帆足城跡などの重要な遺跡がある。また石室内に鳥や木の葉を線刻している鬼ヶ城古墳や瀬戸古墳、玄室内に装飾を施した鷹巣横穴墓群や四日市上ノ原横穴墓群等、古墳時代の遺跡も多くみられる。森川右岸の台地上には後漢時代の獣帯鏡片の出土した名草台遺跡や千人塚古墳、十ノ釣古墳、十ノ釣遺跡等が位置する。

森川周辺以外では、注目する遺跡として白岩遺跡がある。この遺跡は標高390mの丘陵頂部に位置する弥生時代後期の高地性集落である。遺構のあり方から考えると狼煙をあげる役割を持つ遺跡とみられる。

玖珠盆地での遺跡の在り方からみて、今回報告の4遺跡は比較的遺跡密度の低い地域での調査であったと言える。地形的には谷ノ瀬遺跡を除く3遺跡は、南方向に玖珠川とその周囲に開けている扇状地を見渡せる場所に位置する。特に原田遺跡は古墳時代の集落跡としては比高差のある台地上に位置している。しかし県内では5世紀後半以降の集落跡は、玖珠川周辺の扇状地をはじめ、そのほとんどが河岸段丘上や沖積地付近の微高地で検出されている。今回、原田遺跡で検出された集落跡は、周囲の集落跡との関係や社会状況を考えるうえでは注目する遺跡であろう。

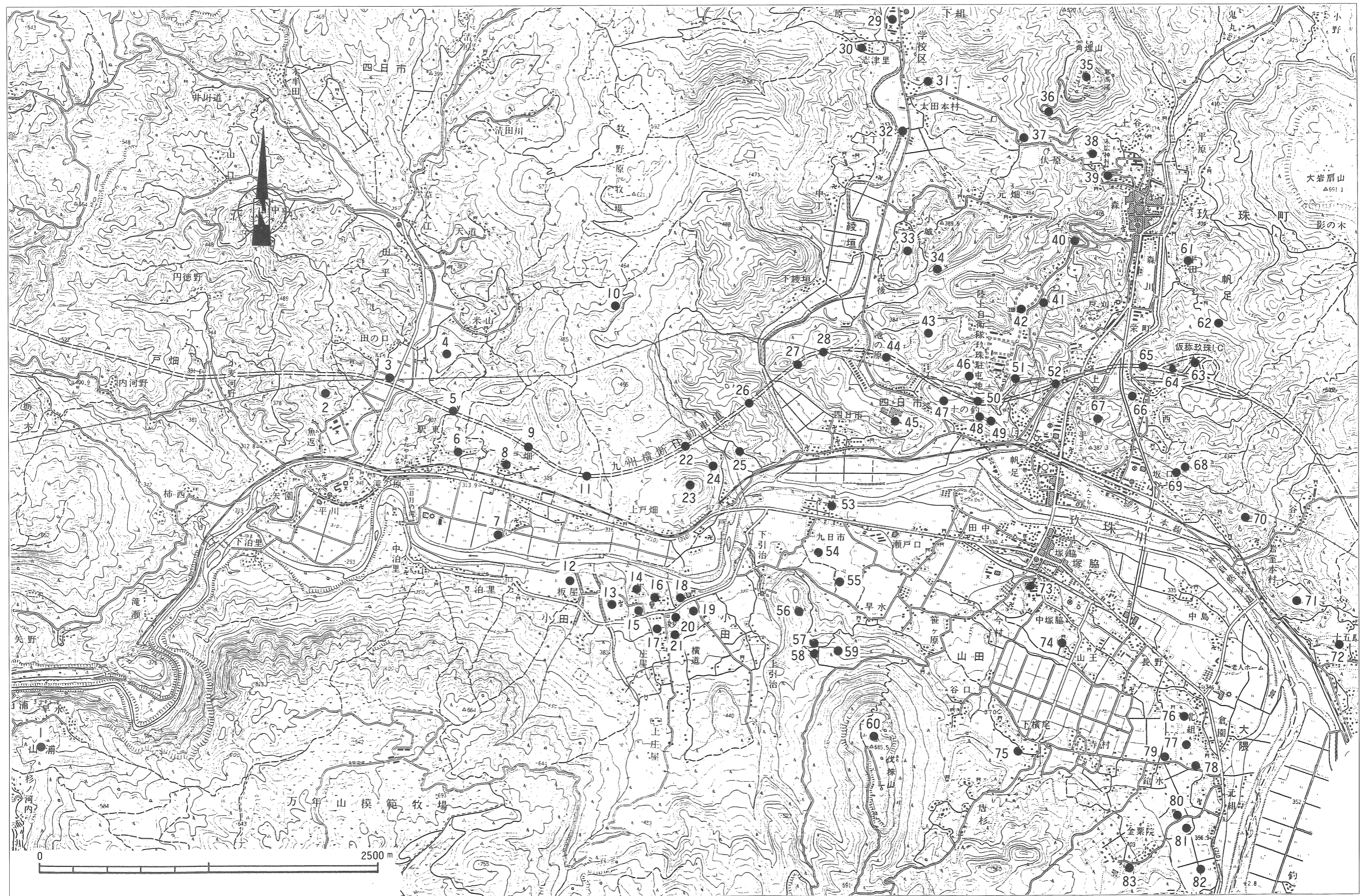
玖珠盆地
中 央

玖珠盆地
南 東 部

玖珠川右岸

玖珠地区遺跡名一覧

番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	杉河内遺跡	縄文時代		41	千人塚古墳	古墳時代	昭和28年度調査
2	魚返砦跡	中世		42	名草台遺跡	弥生・古墳時代	昭和28年度調査
3	魚返遺跡	弥生時代		43	池ノ原遺跡	弥生時代	
4	米山遺跡	弥生時代		44	池ノ原B遺跡	弥生・古墳時代	平成3年度調査
5	原田遺跡	古墳時代	本報告 平成2年度調査	45	四日市遺跡	弥生時代	
6	駅東横穴群	古墳時代		46	井ノ尻古墳	古墳時代	
7	傾城山古墳	古墳時代		47	井ノ尻遺跡	弥生時代	
8	戸畑遺跡	弥生・古墳時代		48	十ノ釣古墳	古墳時代	
9	岩塚古墳	古墳時代	本報告 平成2年度調査	49	十ノ釣遺跡	古墳時代	
10	白石北遺跡	縄文時代		50	四日市上ノ原横穴群	古墳時代	平成4～5年度調査
11	玖珠SA地区遺跡群	古墳時代	本報告 平成2年度調査	51	鷹巣横穴群	古墳時代	平成4年度調査
12	板屋遺跡	古墳時代	昭和61年度調査	52	治別当遺跡	縄文～中世	平成2～5年度調査
13	西田遺跡	縄文時代他	昭和60～61年度調査	53	中山田遺跡	古墳時代	
14	冷酒庵A遺跡	弥生・古墳時代		54	小竿遺跡	古墳・江戸時代	昭和59年度調査
15	冷酒庵B遺跡	古墳時代他	昭和60年度調査	55	早水野中遺跡	古墳・江戸時代	
16	冷酒庵C遺跡	縄文時代他	昭和61年度調査	56	將軍塚古墳	古墳時代	
17	中西遺跡	縄文時代他	昭和61年度調査	57	陣ヶ台姫塚古墳	古墳時代	
18	妙大寺A遺跡	縄文時代他		58	陣ヶ台遺跡	古墳時代	
19	妙大寺B遺跡	縄文・弥生時代		59	陣ヶ台彦塚古墳	古墳時代	
20	鬼塚古墳	古墳時代	県指定文化財	60	伐株山城跡	南北朝他	昭和53～58年度調査
21	鬼塚周辺石棺群	古墳時代		61	平原横穴墓	古墳時代	
22	谷ノ瀬遺跡	古墳時代	本報告	62	鬼ヶ城古墳	古墳時代	県指定史跡
23	野田城跡	中世	平成3年度調査	63	帆足城跡	中世	平成3～4年度調査
24	野田遺跡	古墳時代		64	瀬戸遺跡	中世	平成3～4年度調査
25	野田古墳	古墳時代		65	瀬戸古墳	古墳時代	平成3～4年度調査
26	白岩遺跡	弥生時代	平成3・4年度調査	66	西遺跡	弥生・古墳時代	
27	下綾垣横穴群	古墳時代	平成3年度調査	67	平台遺跡	古墳時代	
28	下綾垣遺跡	古墳時代・中世	平成3年度調査	68	般若寺1号墳	古墳時代	
29	八幡中学校遺跡	古墳時代	平成6年度調査	69	般若寺2号墳	古墳時代	
30	志津里横穴墓	古墳時代		70	岩屋砦跡	中世	
31	太田本村遺跡	古墳時代		71	旦ノ原遺跡	弥生時代	
32	太田遺跡	弥生時代		72	五行塚古墳	古墳時代	
33	古後遺跡	中世		73	寺山(古墳)遺跡	古墳時代	
34	中原古墳	古墳時代	平成5年度調査	74	山王古墳	古墳時代	
35	角牟礼城跡	中世	～調査中	75	下横尾遺跡	古墳時代・中世	
36	太田巨石遺跡	旧石器時代他		76	船山台古墳	古墳時代	
37	太田中学校遺跡	旧石器時代他		77	船山台石棺群	古墳時代	
38	伏原立石	中世		78	船山台横穴群	古墳時代	
39	本村遺跡	弥生・古墳時代		79	鎗水遺跡	古墳時代	
40	上ノ原遺跡	弥生・古墳時代		80	亀都起古墳	古墳時代	
				81	祇園遺跡	弥生時代他	
				82	おごもり遺跡	弥生時代他	昭和51年度調査
				83	金粟院遺跡	弥生時代他	
				84			



第8図 玖珠町主要遺跡分布図

2. 各遺跡の調査

1) 原田遺跡

遺跡の立地 原田遺跡は玖珠郡玖珠町大字戸畑字原田に所在する。遺跡は玖珠盆地の北西端、玖珠盆地を西流する玖珠川右岸の山岳裾部の舌状丘陵先端部に立地する。

遺跡の立地する丘陵は、東西約120m、南北160mの平坦地で、北から南へ向け、ごくわずかであるが緩斜面となる。標高は360m前後である。調査地区はこの平坦地の北端で、丘陵全体の約3分の1である。丘陵の南側は急峻な斜面となり、眼下に玖珠盆地を望む。盆地との比高差は約50mである。この崖面には6世紀後半～7世紀前半に築造された駅東横穴墓群がある。西側は斜面となり、浦河内川によって形成された南北に細長い沖積地に向かって下降していく。この沖積地には魚返遺跡が、さらに西の丘陵には魚返砦跡がある。北～北東へかけては小高い山が幾重にもそびえている。東側は南へ向かってなだらかな傾斜地となり玖珠川沿いの沖積地へと下降していく。東側の丘陵には岩塚古墳が位置する。

遺跡の概要 原田遺跡は平成2年3月に試掘調査を行い、竪穴住居7軒を確認した。平成2年度は試掘調査の結果を受け、平成2年4月～9月まで本調査を実施した。この結果、古墳時代後期の竪穴住居跡、土坑、柱穴群、縄文時代晩期の埋甕、縄文～平安時代の遺物包含層を検出した。

竪穴住居跡は11軒を検出したが、それぞれ重複することなく整然と確認された。住居跡は一辺4.5～6.5mでほぼ方形を呈している。残りは比較的良好であった。未完掘の住居跡1軒を除く全ての住居跡にはカマドが付随していた。特に4号住居跡は残りが非常に良く、カマドの周囲からは甑や甕などの遺物が多量に出土した。カマドの残りも良く、焚口部分に袖石と天井石が現存していた。また支脚は高坏を逆転して使用していた。この4号住居跡以外にも、カマドに袖石や支脚として壺や石を使用している住居跡が数軒検出された。カマドの説明については別途模式図に示す統一名称を使用して説明する。

土坑は合計7基検出した。遺物の出土した土坑は1基である。

縄文時代晩期の埋甕は、調査区南東端で単独で検出された。扁平の安山岩板石が蓋の役割を行い、甕の上部を覆っていた。

遺物包含層は調査区北端で確認された。層厚は最深で約40cmである。縄文時代晩期の浅鉢や打製石斧、弥生土器等であるが、出土量はさほど多くない。またこの包含層からは9世紀代の石帯が出土した。

今回の調査区は全体の一部にすぎず、住居跡群は条件の良い南側丘陵に展開するものと考えられる。

遺跡の所在

遺跡の立地

試掘調査
本調査

竪穴住居跡

カマド

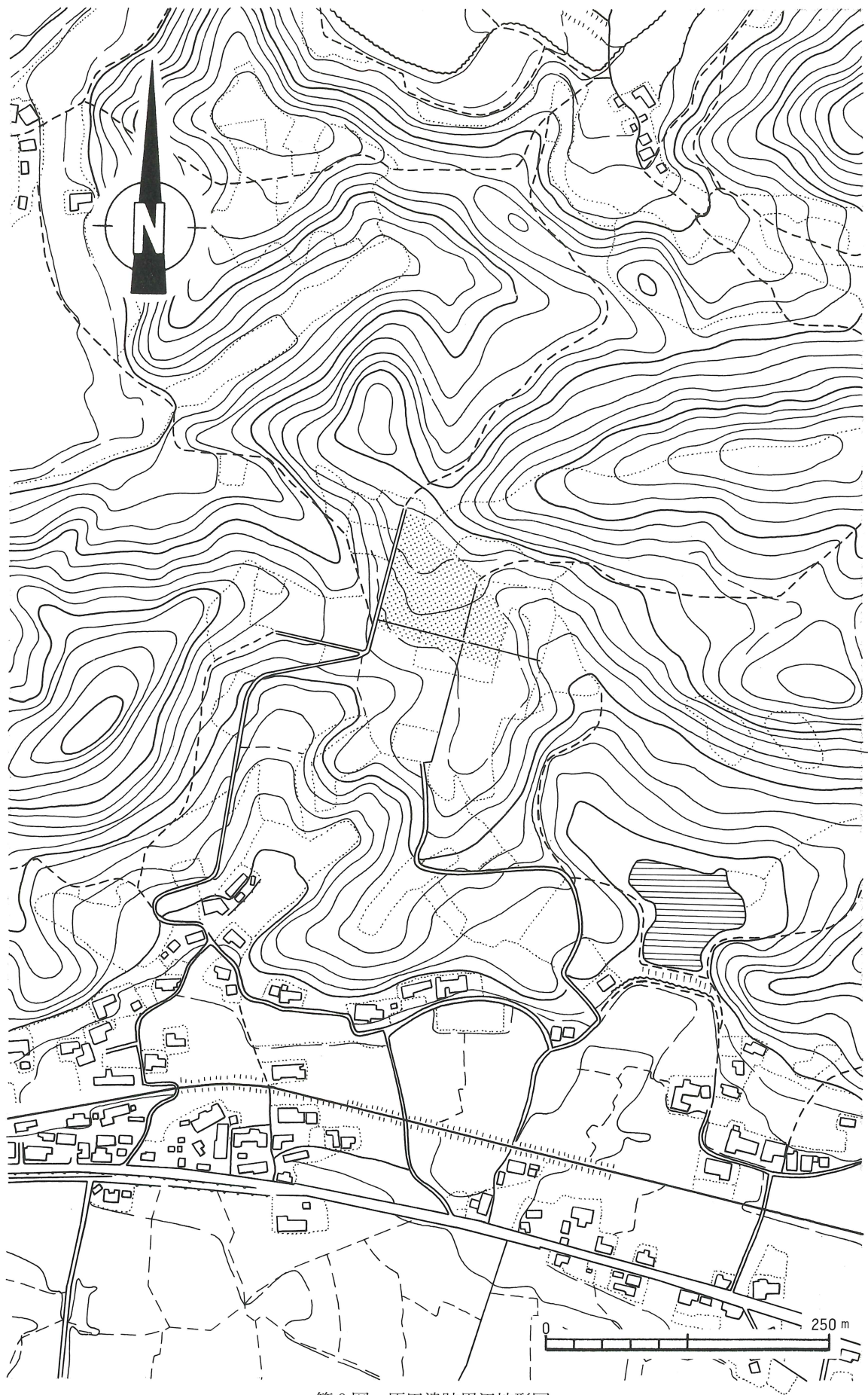
土坑

縄文時代の
遺構

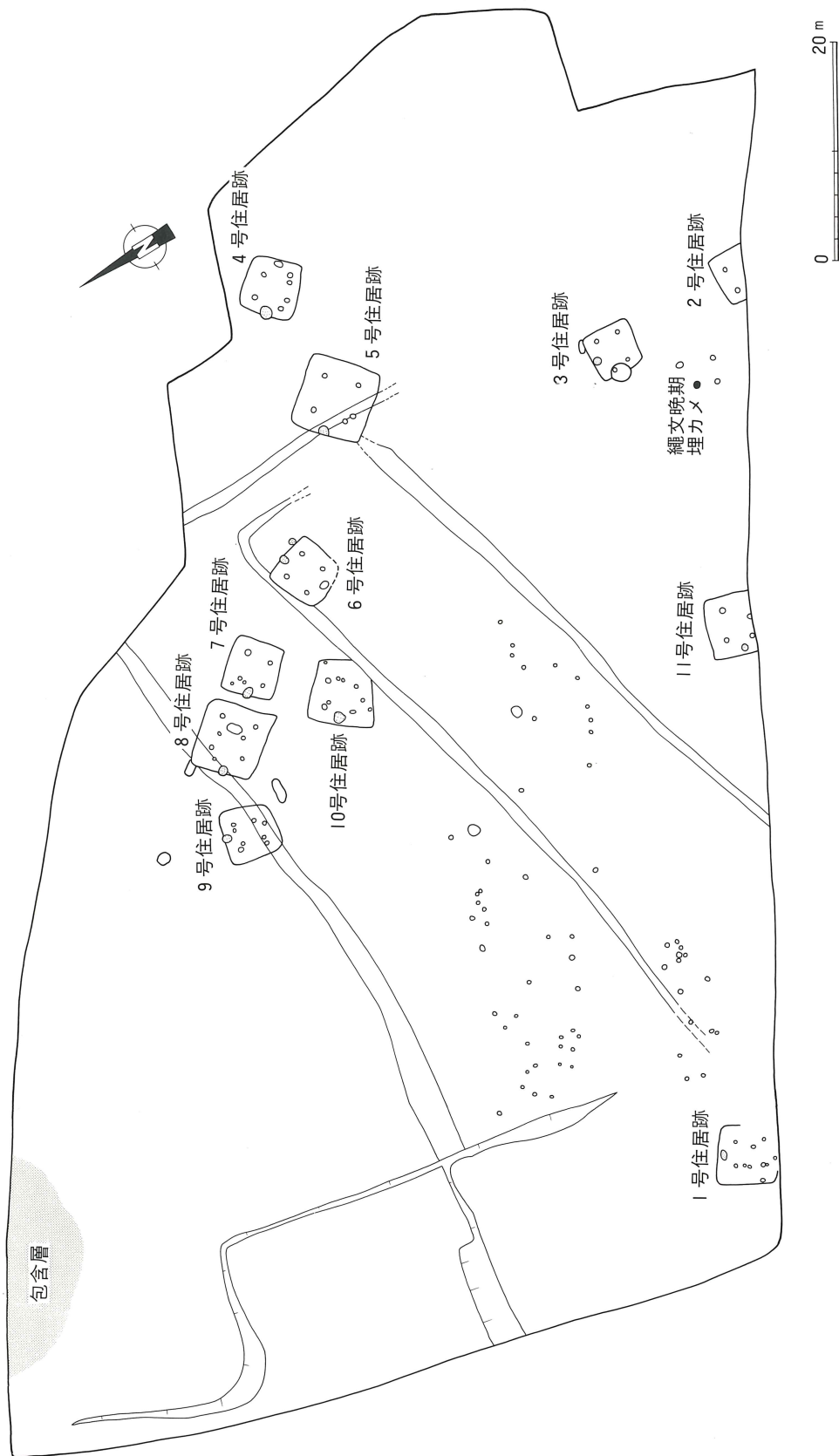
包含層

遺構名	形態	主軸方向	規模(m)	出土遺物	カマド施設	備考
1号住居跡	方形	N-30° -E	5.6×5.3	須恵器・土師器		焼失住居
2号住居跡	方形	?	4.9×?	須恵器・土師器・鉄器		
3号住居跡	方形	N-11° -E	4.5×4.7	須恵器・土師器	袖石	
4号住居跡	方形	N-41° -W	5.1×4.9	須恵器・土師器・鉄器	袖石・支脚(高坏)	
5号住居跡	方形	N-38° -W	6.5×6.5	須恵器・土師器・紡錘車		
6号住居跡	方形	N-72° -E	4.9×4.8	須恵器・土師器・鉄器	支脚(石)	
7号住居跡	方形	N-36° -W	4.8×5.0	須恵器・土師器		
8号住居跡	方形	N-35° -W	6.5×6.0	須恵器・土師器	支脚(壺)	
9号住居跡	方形	N-18° -E	4.9×4.8	須恵器・土師器・鉄器	袖石・支脚(石)	
10号住居跡	方形	N-41° -W	5.7×5.5	須恵器・土師器	支脚(壺)	
11号住居跡	方形	N-67° -W	5.5×?	須恵器・土師器		

第1表 原田遺跡住居跡一覧表



第9図 原田遺跡周辺地形図



第10図 原田遺跡遺構配置図

カマド用語

カマド カマドについては模式図に示す統一名称を使用して説明する。なおこの模式図及び統一名称は福岡県教育委員会発行の“浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告”「塚堂遺跡Ⅰ～Ⅳ」の用語を使用させていただいた。

カマド基盤床 カマド構築部の貼床。

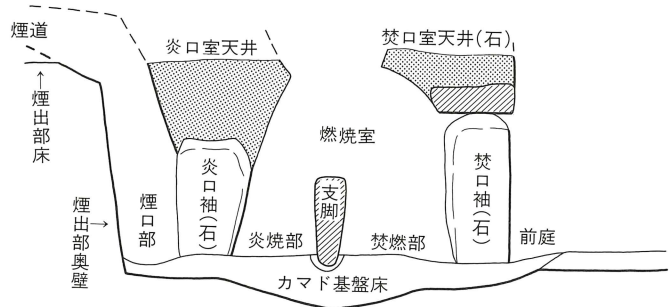
前庭 カマド前方（手前）の窪み。薪・炭・灰などの出し入れによって生じた窪み。

焚口室（部） カマド前室。

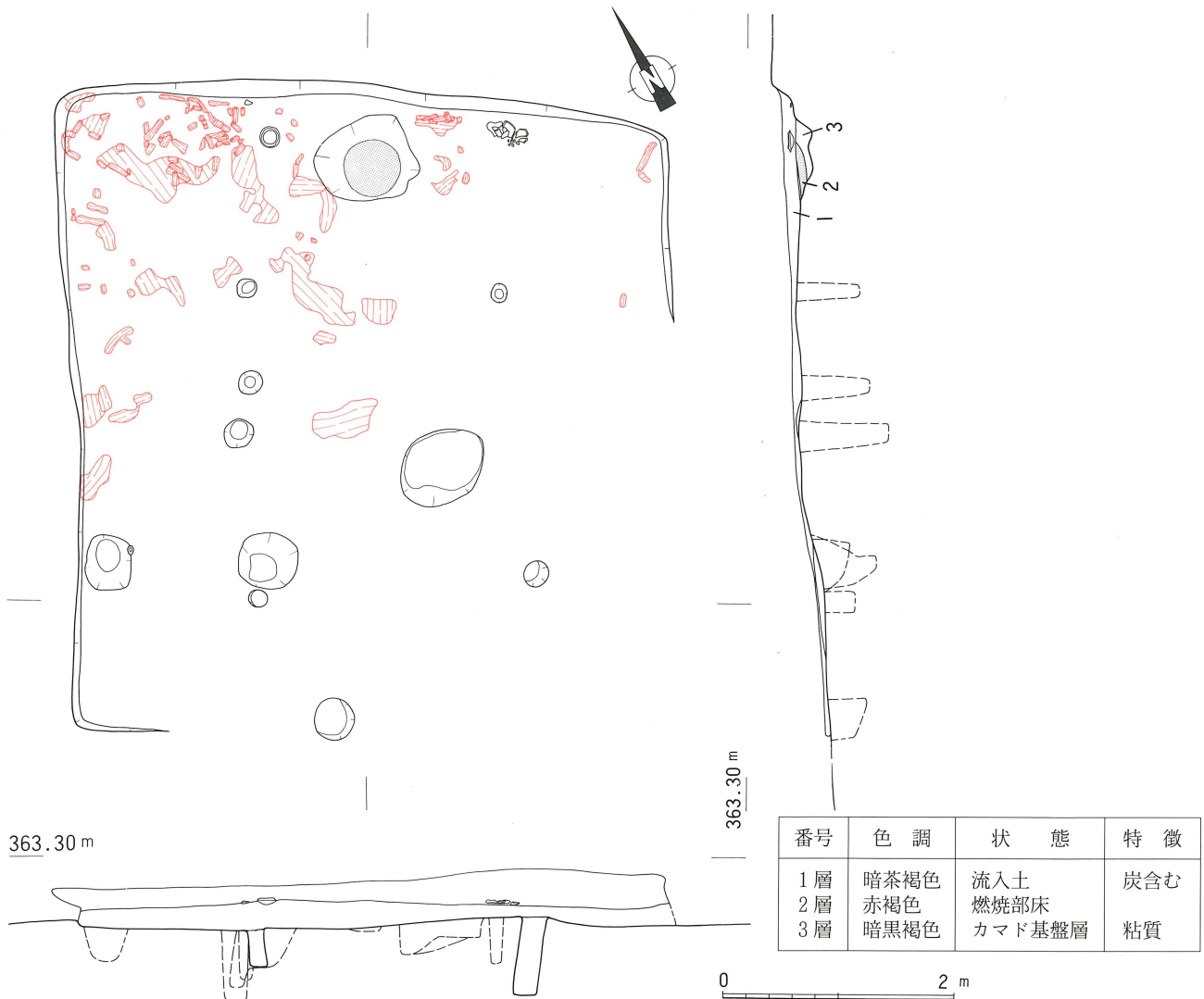
燃焼室（焚燃・支脚・炎焼・天窗部） カマド中室。支脚前方で薪などを焚く焚燃部、同側方の支脚部、同後方で薪などほとんど焚かない炎焼部、支脚上方の天窗部に分ける。

炎口部 カマド後室。

煙口室（煙口・煙出・煙道部） カマド奥室。奥壁下端までを煙口部、奥壁上端までを煙出部、住居外に長く緩傾斜する部分を煙道部に分ける。



第11図 カマド模式図縦断面図



第12図 原田遺跡1号住居跡実測図

1号住居跡

調査区の西端に単独で位置する。平面形は方形を呈しているが残りは悪く、南側は3分の1が削平を受け消滅している。規模は東西5.6m、南北5.3m、検出面から床までの深さは北壁側で約20cmである。主軸方位はN-30°-Eを示す。住居内には北壁にカマドを付設している。支柱穴は4カ所で、直径15~20cmと小型、深さはいずれも50cm前後と比較的深く掘り込まれている。支柱穴間は2.4m前後ではほぼ方形の配置をしている。

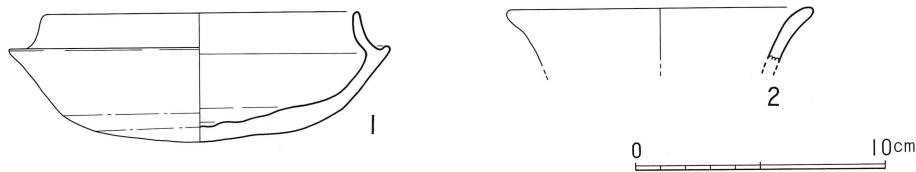
床面は平坦であったと考えるが、南側は削平を受け現存しない。北側部分の床は、ほぼ全域で炭化した木材が検出された。焼失住居跡と考えられる。

カマド 北壁の中央に位置する。住居廃棄後の削平が激しく、上部施設は現存しないため、カマド破棄に伴う祭祀行為の有無は、確認できなかった。床面には径80cm程のカマド基盤床と、その上部に直径50cm程の焼土層がレンズ状に堆積していた。支脚や袖石等の痕跡や掘り込み跡等は確認できなかった。

出土遺物 (第13図) カマドの左側から完形の坏身1と甕の胴部破片1、右側からは甕の口縁から胴部が土圧で潰れたような状態で一括して出土した。床の直上である。埋土からはこの甕の一部である土器片が出土した。

1は須恵器坏身である。口径12.6cm、器高5.2cmで底部は右回りの回転ヘラ削り、他はナデで仕上げている。底部にはススが付着している。焼成は良好で、色調は黄橙色である。

2は甕の口縁部で、内外面ともナデで仕上げている。口縁と胴部は同一個体であるが接合しない。



第13図 原田遺跡1号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡

調査区の南端に位置する。南壁を含め約3分の1が調査対象地区外になる。調査部分から全体の規模を推測すると東西4.9m、南北5m前後の方形を呈していると考えられる。検出面から床までの深さは30~40cmである。調査範囲内からはカマドは検出されなかった。東壁を軸にすると主軸方位はほぼ真南と推測できる。支柱穴は4本と思われるが確認できたのは2本である。径は36cm前後で、深さは20cmと40cm、支柱穴間は2.2mである。

埋土は北方向から流れ込んでおり、遺物を含んでいる。床面は平坦であったが西側方向に向かって僅かに傾斜している。貼床等の施設は見られなかった。

出土遺物 (第15図) 床の直上から数カ所程度まとまって出土する部分があり、埋土中からは土師器甕、壺以外に縄文式土器・石器、丹塗り高坏の脚の一部が出土した。

1は甕の底部破片でナデ調整の小さな底面を有し、ススが付着している。胴部外面はナデ調整を施している。内面はハケ調整のあと部分的にナデ調整を施している。色調は黄褐色。

2はほぼ完形の甕で口径13.2cm、胴部最大径17.6cm、器口24.2cmを測る。底部は小さいが凸レンズ状に残っている。体部外面はハケ目の痕跡が残り、胴下半にはヘラ削りを加えている。内面はハケ目調整されている。口縁は内外面とも横方向のナデ調整を行っている。

3は鉞で茎の部分に欠損している。刃部の断面は三日月状を呈している。

カマド付設
4本柱

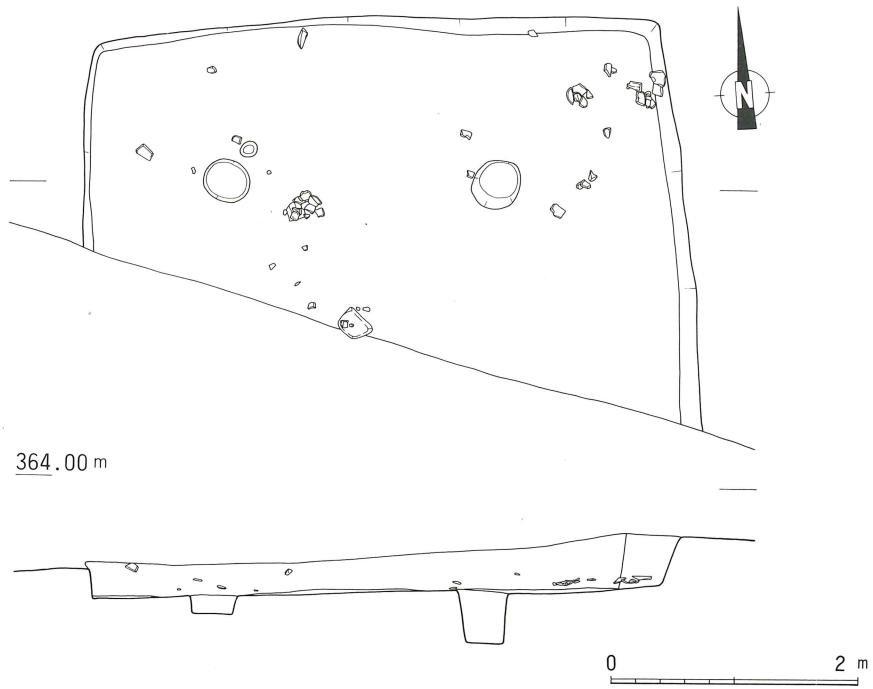
焼失住居跡

カマド基盤床
焼土層

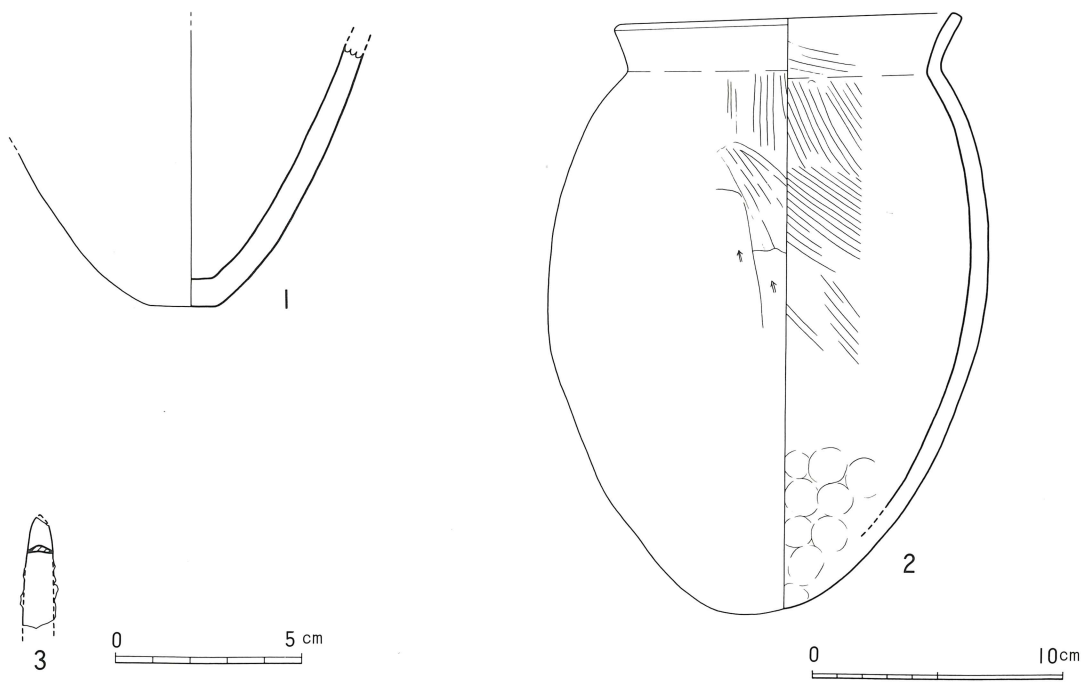
出土遺物

4本柱

出土遺物



第14図 原田遺跡 2号住居跡実測図



第15図 原田遺跡 2号住居跡出土遺物実測図

3号住居跡

2号住居跡の北側9mに位置し、平面形は方形を呈している。北東のコーナーと西壁の中央部は土坑によって切られている。規模は南北4.1~4.7m、東西4.7mで検出面から床までの深さは30~40cmである。主軸方位はN-11°-Eを示す。住居跡内には北壁にカマドが付けられているほか、中央部に上面径1×1.3m、底面径0.9×0.5m、深さ約20cmの土坑がある。住居跡西壁の中央部分には1号土坑が、北東角には2号土坑がそれぞれ位置する。支柱穴は4本で径40cm前後、深さは20~40cmである。支柱穴間はP1~2間は3m、P3~4間は2.7m、P1~3間は1.7m、P2~4間は2mを測る。

床面には、ほぼ全面に厚さ5~10cm程度貼床を行っている。黄褐色粘質土を使用し、堅固に仕上げている。

カマド 北壁の中央に位置する。カマドは住居跡外にはみ出すことなく、焚口から壁までの長さは約80cm、幅は約170cmである。

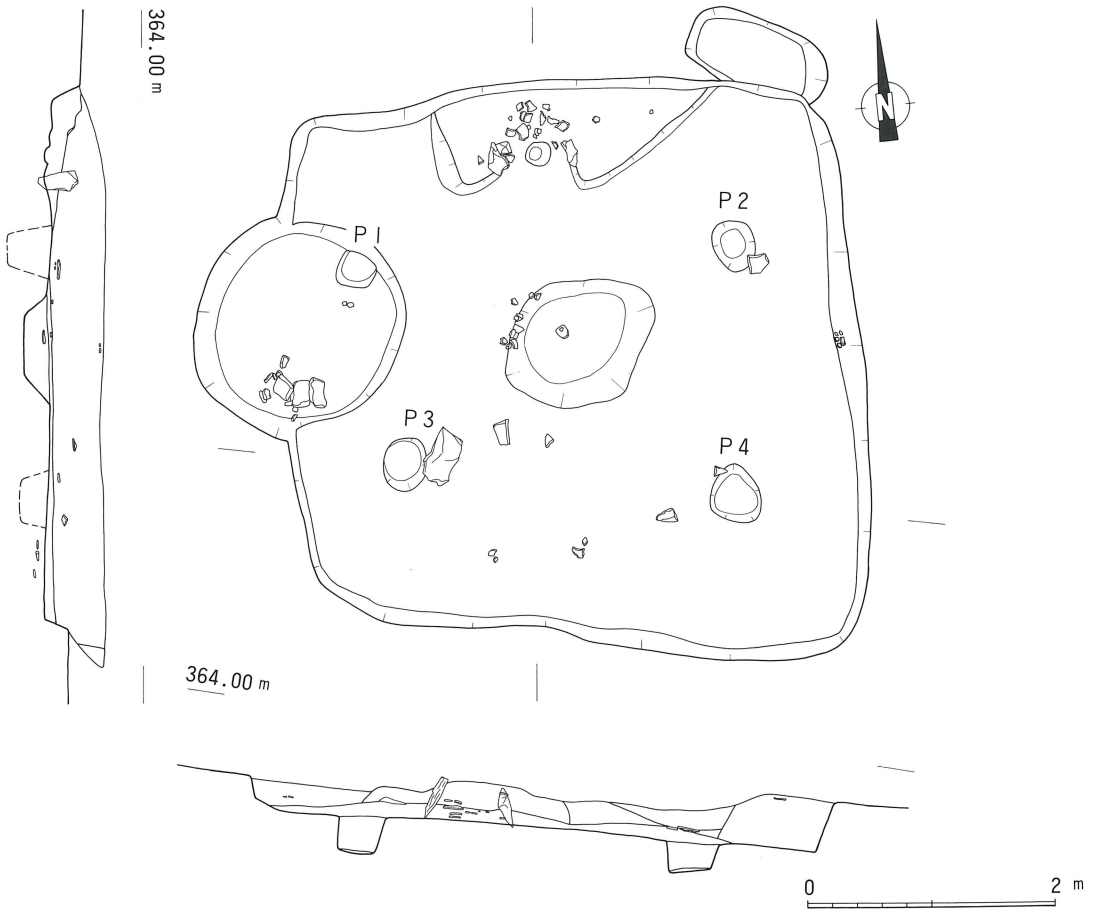
カマド基盤床 径80cm、深さ10cm程レンズ状に掘り下げカマド構築部基盤床としている。

焚口部 左右袖石が残っていた。石材は玄武岩で、両袖石間は天井部で45cm、床面で55cmである。内方向へ傾斜している。天井(石)は残っていない。

燃烧室 支脚は存在しなかったが、径15cm程の掘り込みを検出した。支脚据え付け用の掘り込みの可能性も考えられる。焚燃部には炭混じりの焼土が堆積している。燃烧室の床面は被熱していて、赤褐色に変色している。天窗部は崩落している。燃烧室内からは甕の破片が出土した。

煙出部 崩落しているが炭混じりの暗赤褐色土が約40°の登り勾配で住居壁に向かって堆積している。煙道部は住居外では確認されなかった。

3号住居跡のカマドは、燃烧室の焼土下に炭混じりの焼土が検出されたり、袖石の右外側から焼土の二次堆積土が認められることから一度改築されたと考えられる。



第16図 原田遺跡3号住居跡実測図

出土遺物

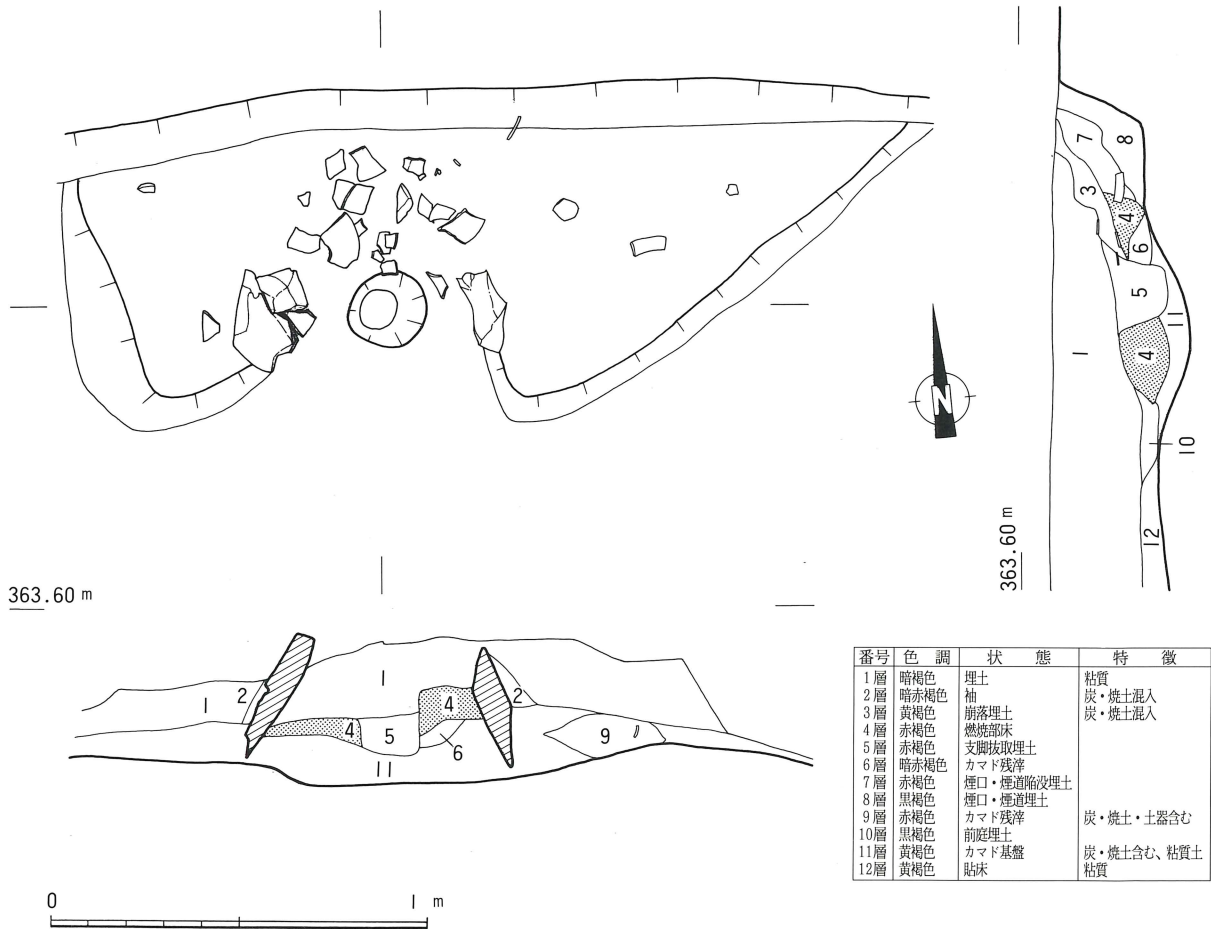
出土遺物（第18図） 埋土中から土師器甕、須恵器坏、鉄製品等が出土した。カマド内からは、甕の口縁～胴部にかけての破片が出土した。

1は須恵器坏蓋で図示した部分の2分の1が残る。復元口径は14.2cm、器高4.6cmを測る。天井部分は回転ヘラ削りを施し、口縁から内面にかけては横ナデ調整を行っている。

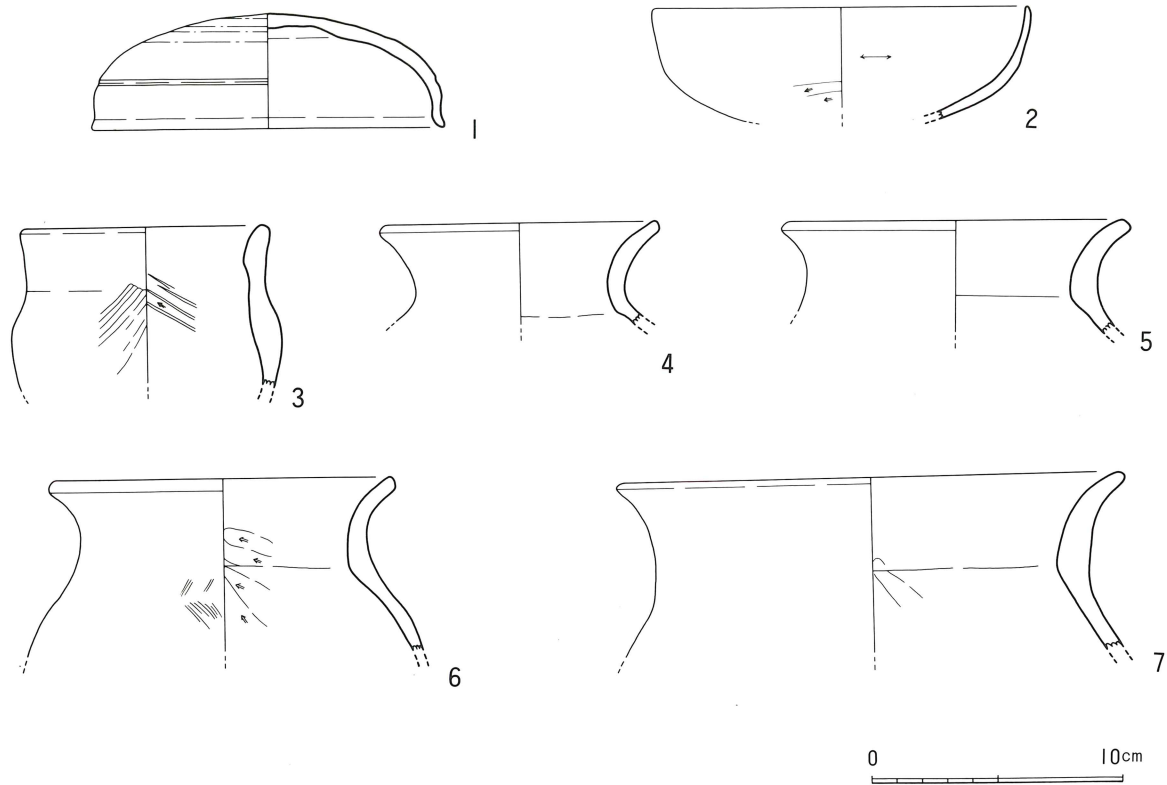
2は土師器碗で全体の5分の1が残る。復元口径は14.8cmで、底部外面はヘラ削り、内面はミガキが施されている。色調は赤褐色を呈する。

3は小型丸底壺の破片で全体の5分の1が残る。復元口径は9.2cmで器高は不明。口縁部はハケ目のあと横ナデで仕上げ、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りを行っている。色調は淡黄褐色を呈する。

4～7は甕の口縁部であり、器面調整は胴部内面以外はいずれもハケ目である。4は全体の4分の1が残る。復元口径10.6cmで、口縁の内外面ともハケ目のあと横ナデを施している。5はカマドから出土した甕の口縁部分で、胴部とは接合しなかった。口径は13.2cmで、口縁部分は内外面ともハケ目のあと横ナデを施している。胴部内面は横方向のヘラ削りである。6は復元口径13.4cmで、口縁部は内外面ともハケ目のあと横ナデ、胴部内面は斜め方向のヘラ削りである。7は復元口径19.6cmで、口縁部は内外面ともハケ目のあと横ナデ、胴部内面は斜め方向のヘラ削りである。色調は4・5は黄褐色で6・7は淡赤褐色を呈する。



第17図 原田遺跡3号住居跡カマド実測図



第18図 原田遺跡3号住居跡出土土遺物実測図

4号住居跡

調査区の東端に位置する。3号住居跡からは北東に約30m離れている。平面形は方形を呈している。東西4.9m、南北5.1m、住居跡検出面から床までの深さは約30cmである。主軸方位はN-41°-Wを示す。住居跡内には北壁中央にカマドが付随している。また、南壁側の中央部分には上面径約40cm、深さ15cm、底面径約30cmのやや楕円形の土坑が検出された。主柱穴は4本で径40cm前後、深さは30~40cmである。主柱穴間はP1~2間は2.7m、P3~4間は2.5m、P1~3間は2.5m、P2~4間は2.4mを測る。

カマド 北壁の中央に位置する。残りは非常に良く、煙道部は住居跡外に張り出していた。カマドの大きさは幅約80cm、長さ130cm、高さ約40cmで、黄灰色の粘質土を使用して構築している。

カマド基盤床 幅70cm、長さ80cm、深さ5cm前後でレンズ状に掘り込み、黄灰色の粘質土で貼床をしている。

焚口部 左右袖石及び天井石が良好な状態で残っていた。左袖石は自然石を、右袖石は河原石を使用している。両袖石とも良く旧状を残しており、内傾した状態で検出された。傾斜角は左袖石が75°、右袖石で82°を測る。袖石間は床面で53cm、天井付近で45cmを測る。袖石は床面を約15cm程掘り下げ、床面下に埋めて安定させている。天井石は自然石の4面を面取りして使用しており、中央部分で半折している。長さは54cmで両袖石間より若干短い。

燃焼室 上部は崩落していたが、中~下部付近はほぼ現状のまま残存していた。燃焼室中央から高坏が逆転した状態で出土した。高坏はカマド破棄後に再埋置した状態ではなく、床に口縁部が接しており、カマド使用時に支脚としての役割を果たしていたと考える。高坏は被熱していた。この高坏の脚部に甕が乗った状態で出土した。焚口部から焚焼部にかけては径30cm、厚さ3cm程が被熱を受け、赤褐色に変色していた。

煙口室 煙口から煙出部にかけてはほぼ平坦で焼土残滓が堆積している。煙出部から煙道部

4本柱

カマド

袖石

天井石

支脚

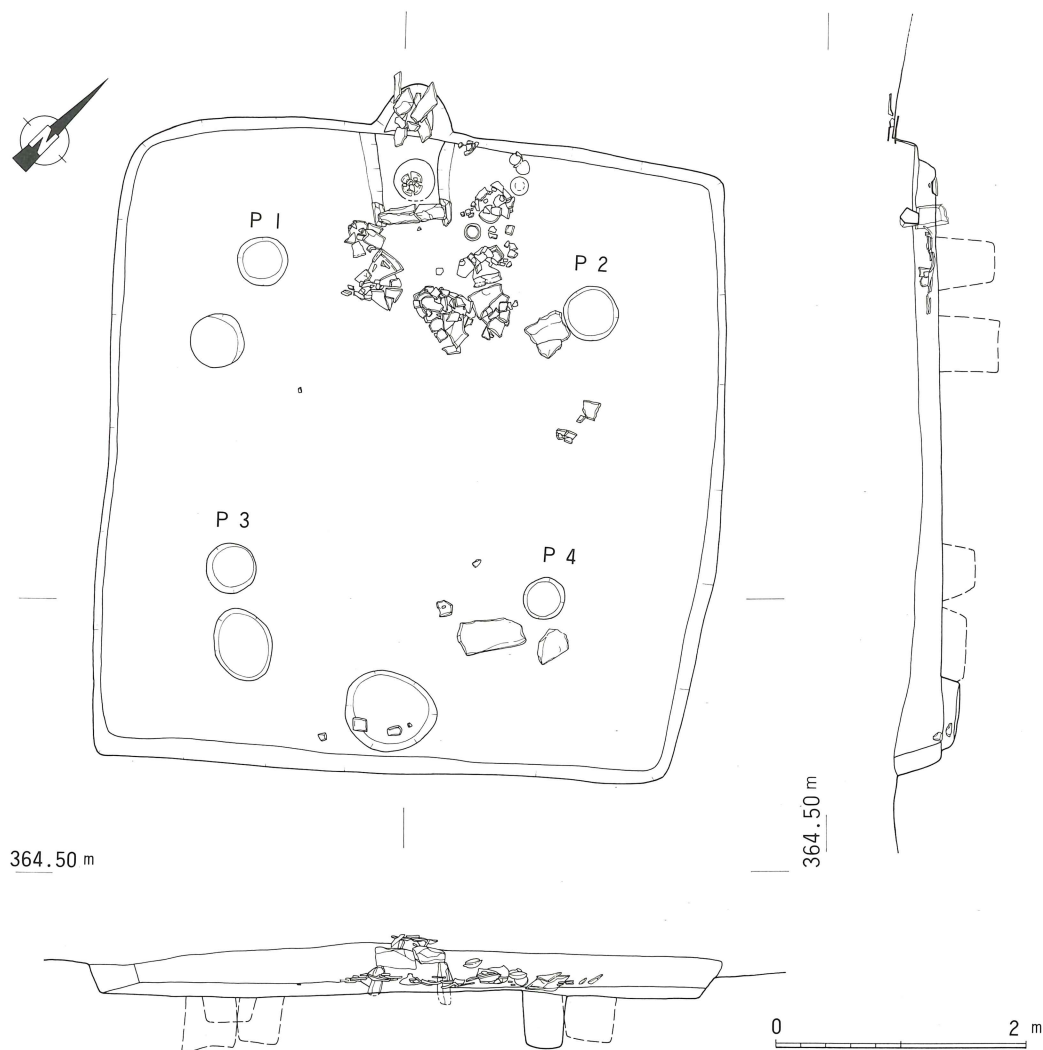
は境を明確にし得ない。煙道部の傾斜角は25°前後で、約40cmほど住居跡外へ張り出している。煙道両側面は、10cm前後の扁平の安山岩板石10数枚を使用して構築している。板石は天井を覆っていたと思われるが、検出段階では確認できなかった。内部は崩落・埋没していて、形状は留めていない。

出土遺物

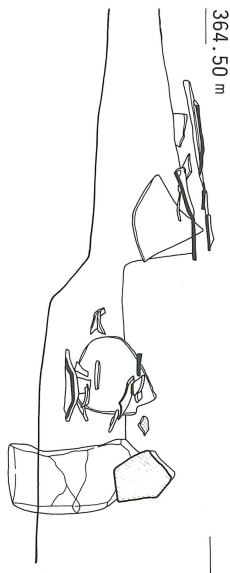
出土遺物（第22～26図） 遺物は第21図に示すようにカマドを中心に出土した。カマド周辺からは第22～25図の4・5の坏、6・7の小型丸底壺、11・16・18の甕、13～15の甑が出土した。カマド内からは1の土師器碗、12の支脚として使用された高坏、17の甕が出土した。また鉄滓が数点出土した。覆土からは鉄鎌の破片も出土している。

1は土師器碗で、焚口部の天井石の下から出土した。口径14.6cm、器高5.5cmで、外面はへら削りのあとナデ仕上げを行っている。内面はナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈す。

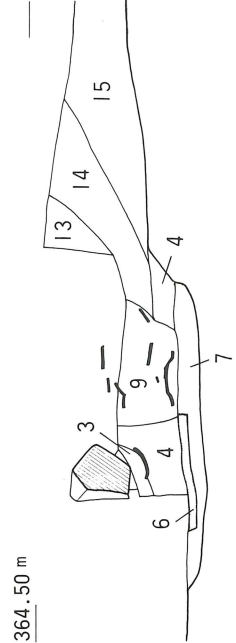
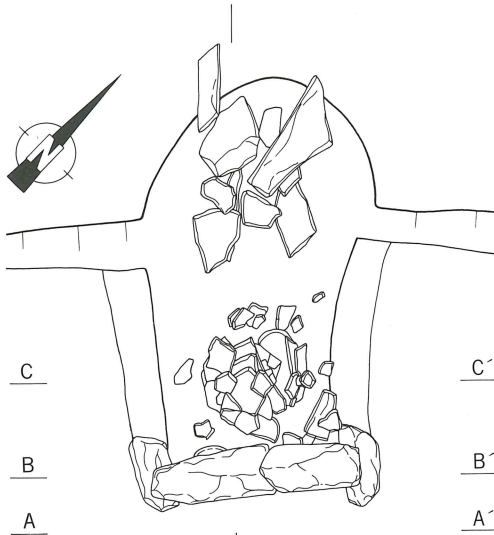
2～5は須恵器坏で2・3は覆土中、4・5はカマド周辺からの出土である。器面は天井部、或いは底部を回転へら削り、内面には不定方向のナデを施している。2は図示した部分の5分の1が残る。復元口径は11.8cm、器高4.3cmを測る。3は坏身で全体の3分の1が残る。口径11.4cm、器高3.9cmを測る。4は坏身で口径13.8cm、器高3.7cmを測る。天井部にはへら記号が認められる。



第19図 原田遺跡4号住居跡実測図



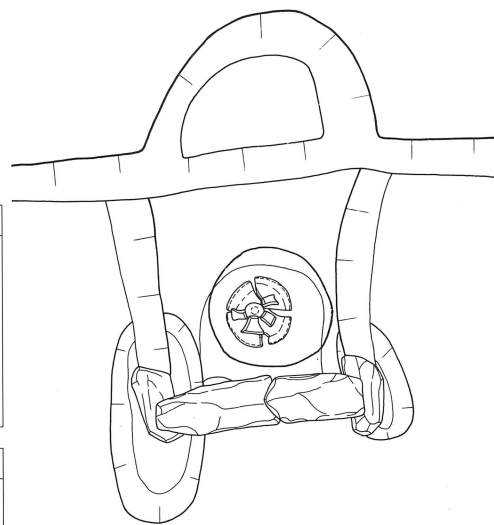
364.50 m



364.50 m

番号	色調	状態	特徴
1層	暗黄褐色	崩落埋土	粘質
2層	黄色ブロック		
3層	黄褐色	崩落埋土	炭含む 灰色粘土混入、粘質
4層	黄灰色+焼土	焼土残滓	
5層	茶褐色	袖	粘質
6層	赤褐色	燃烧部床	
7層	黄灰色	カマド基盤層	
8層	黒褐色	袖石埋土	

番号	色調	状態	特徴
9層	暗茶褐色	崩落埋土	炭・焼土含む
10層	黄褐色	袖	
11層	黒褐色	燃烧室残滓	灰層
12層	黄灰色	袖	
13層	暗黄褐色	埋土	炭・焼土含む
14層	黒褐色	煙口・煙道陥没埋土	
15層	茶褐色	地山土	



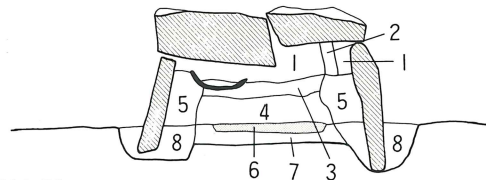
364.50 m

A



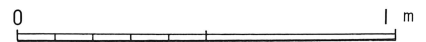
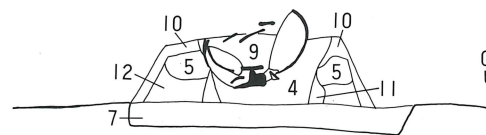
364.50 m

B



364.50 m

C

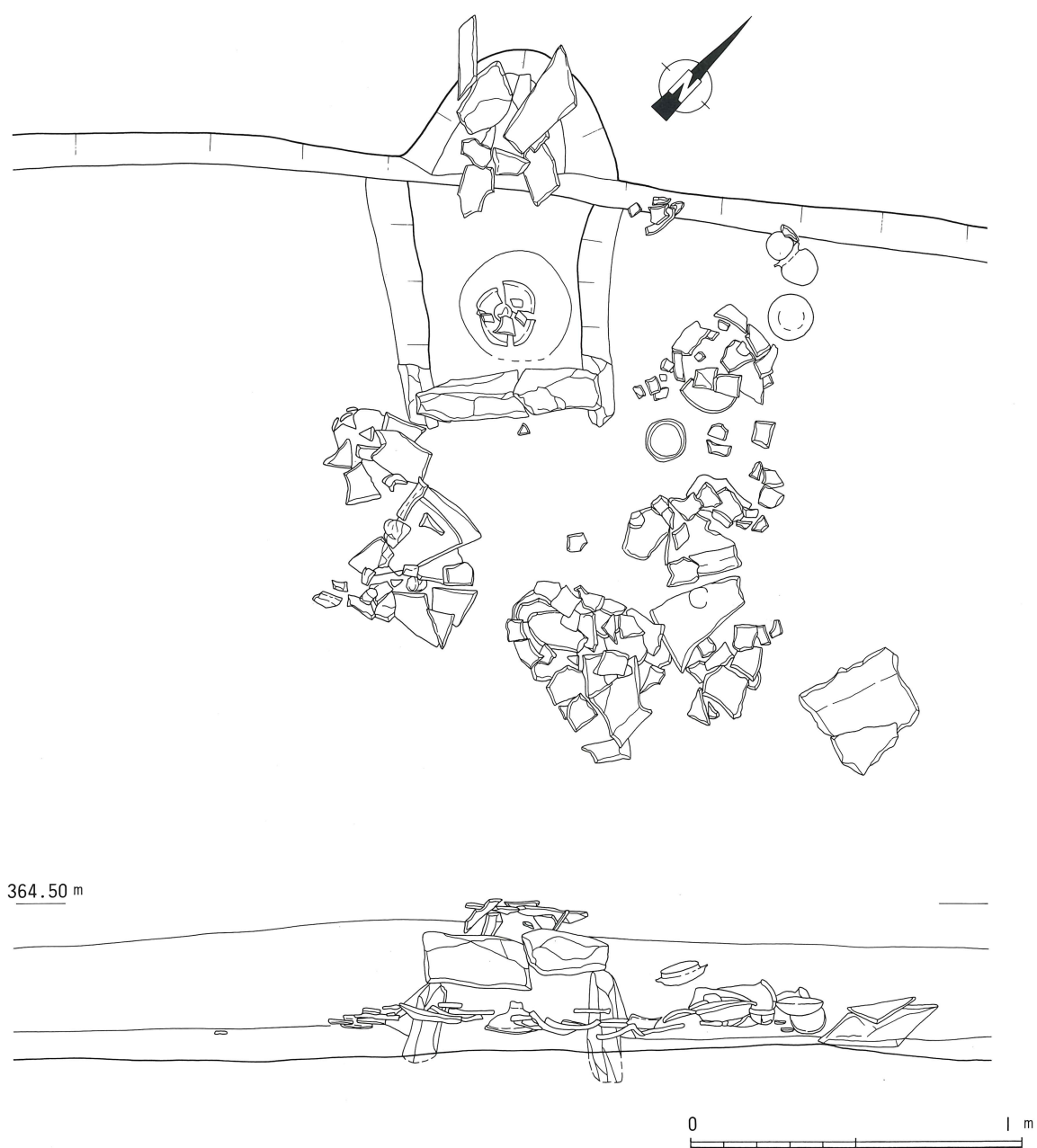


第20図 原田遺跡4号住居跡カマド実測図

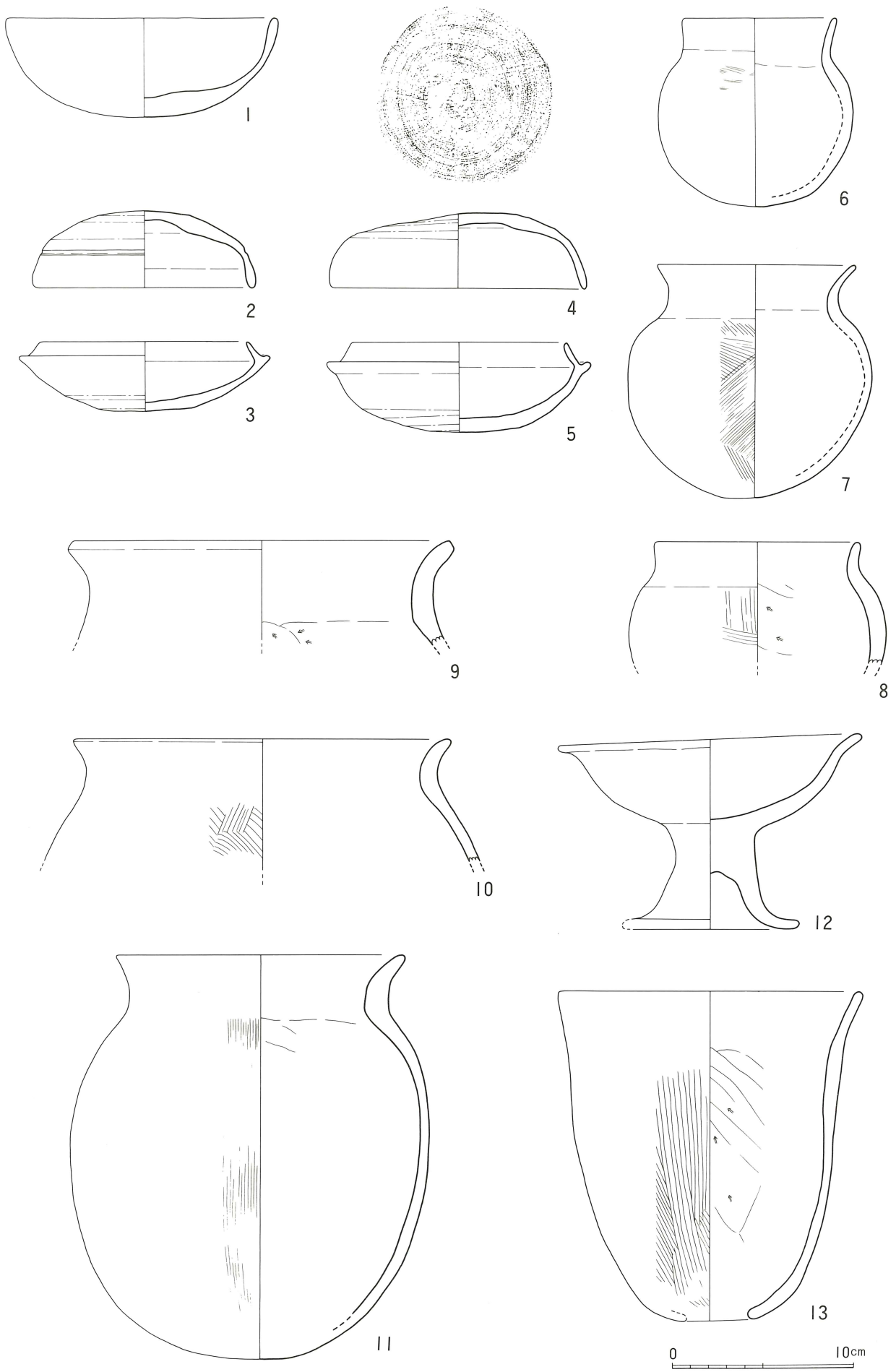
5は坏身で口径11.8cm、器高5cmを測る。色調は2・4・5は青灰色、3は暗赤灰色を呈する。

6～8は小型丸底壺で、6・7はカマド周辺からの出土である。口縁部から胴部にかけてはハケ目のあと横ナデで仕上げている。6は口径8.8cm、器高10.5cmを測る。7は口径10.8cm、器高13cmで、外面にはススが付着し、底部内面に煮こげが付いている。

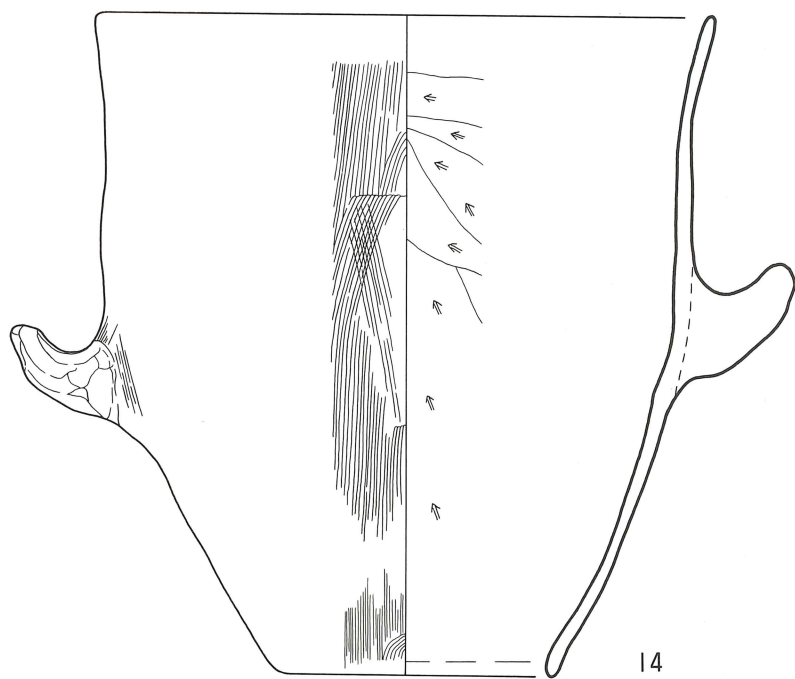
9～11・16～18は甕で、基本的な器面調整は外面を縦方向、或いは不定方向のハケ目調整、口縁部は内外面とも横方向のハケ目のあと、横方向のナデ仕上げを施している。内面は斜め方向のヘラ削りで仕上げている。11・16・17は外面にススが付着している。16は胴部下半分が赤褐色に変色しており、火をうけた様子が伝わる。17はカマド燃焼部壁に貼り付いた状態で出土した。底部には全面ススが付着していた。



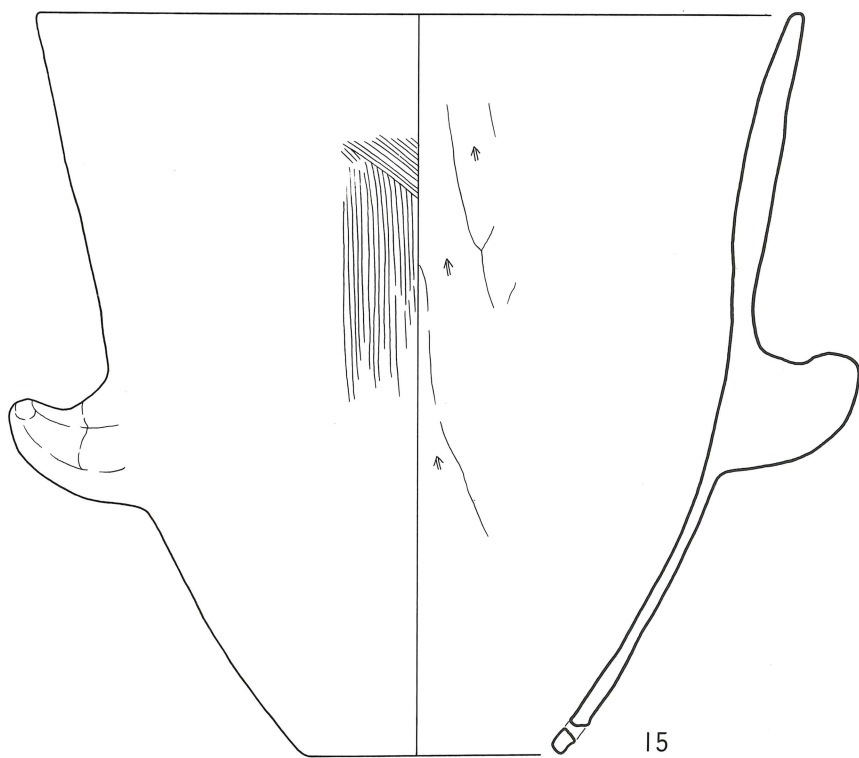
第21図 原田遺跡4号住居跡カマド周辺遺物出土状況実測図



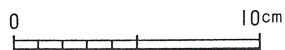
第22図 原田遺跡 4号住居跡出土遺物実測図(1)



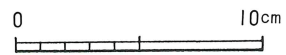
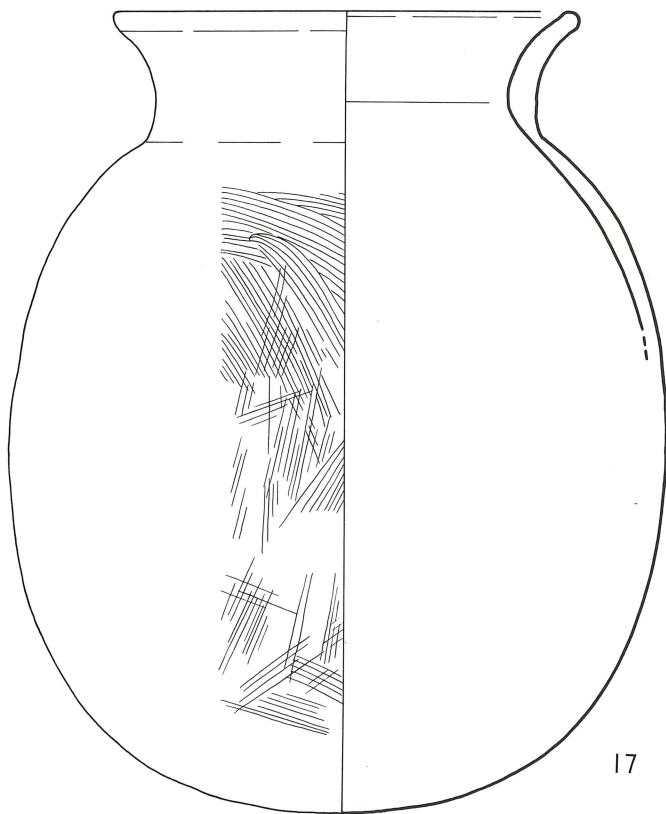
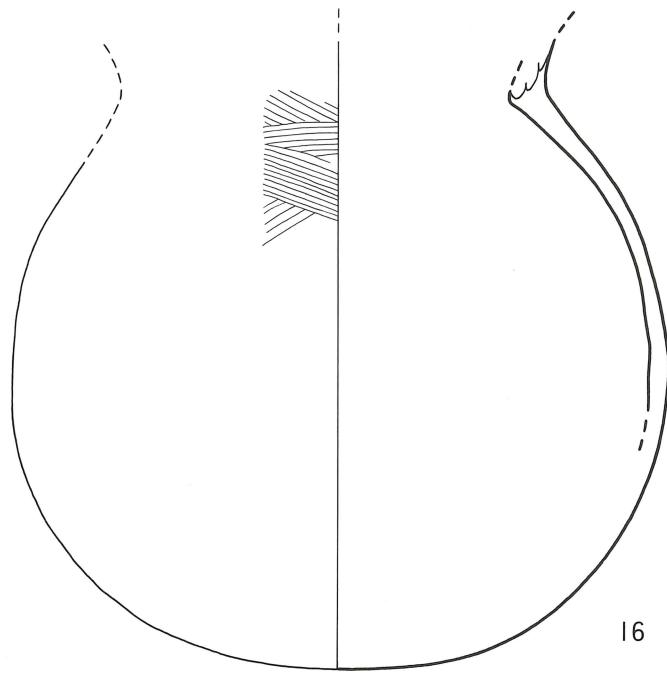
14



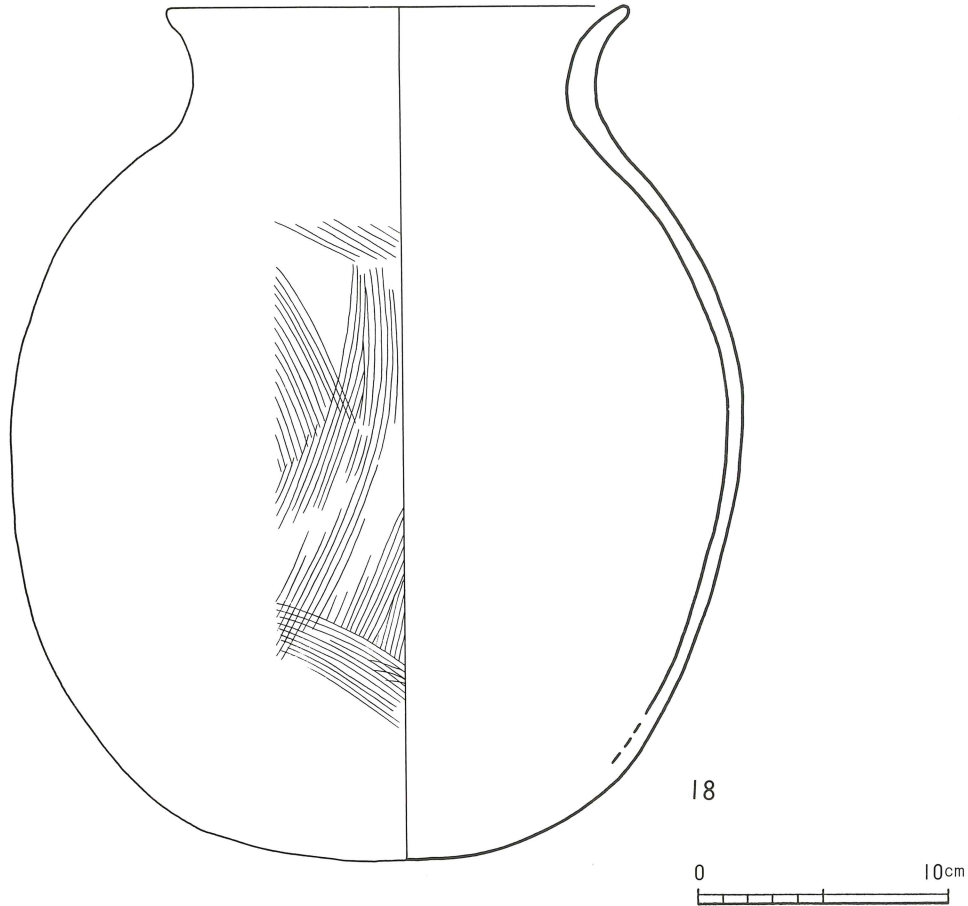
15



第23図 原田遺物4号住居跡出土遺物実測図(2)



第24図 原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図(3)



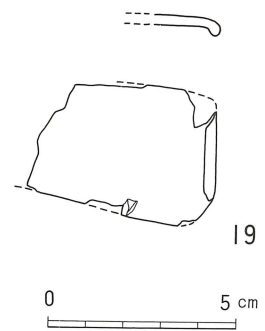
第25図 原田遺跡4号住居跡出土遺物実測図(4)

12はカマド燃焼室中央から出土した高坏である。上下を逆さにして配置されていて、支脚としての役割を果たしていた。全体に赤褐色に変色し、脚部にはススが付着していた。器面調整は、坏の下部から脚部にかけてヘラ削りで仕上げている。他の部分はナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈する。

13~15は甕で、13は小型である。器面調整は外面が13・14が縦方向のハケ目調整、15が不定方向のハケ目調整を施し、口縁内外面はハケ目のあと横ナデ、内面は斜め方向のヘラ削りを施している。14は外面にススが付着。15は底部付近に1個の穿孔が施されている。色調は13・14が淡黄褐色、15が淡赤褐色。16~18は甕で、外面にはハケ目調整が施される。

19は鉄鎌の一部分と考えるが残りは悪く、剥離が激しい。基部付近の最大幅は3.5cm、背厚さ3mmを測る。覆土中からの出土である。

他にカマド内から鉄滓が2点出土した。



第26図 原田遺跡4号住居跡出土鉄器実測図

5号住居跡

調査区の東、4号住居跡の西側5mに位置し、近世の溝状遺構に切られている。平面形は東西6.5m、南北6.5mの方形を呈している。検出面から床までの深さは20~40cmで主軸方位はN-38°-Wを示す。住居跡内には北壁にカマドが付設している。主柱穴は4本で径40cm前後、深さ50~70cmと比較的深い柱穴である。主柱穴間は3.3~3.5mを測る。

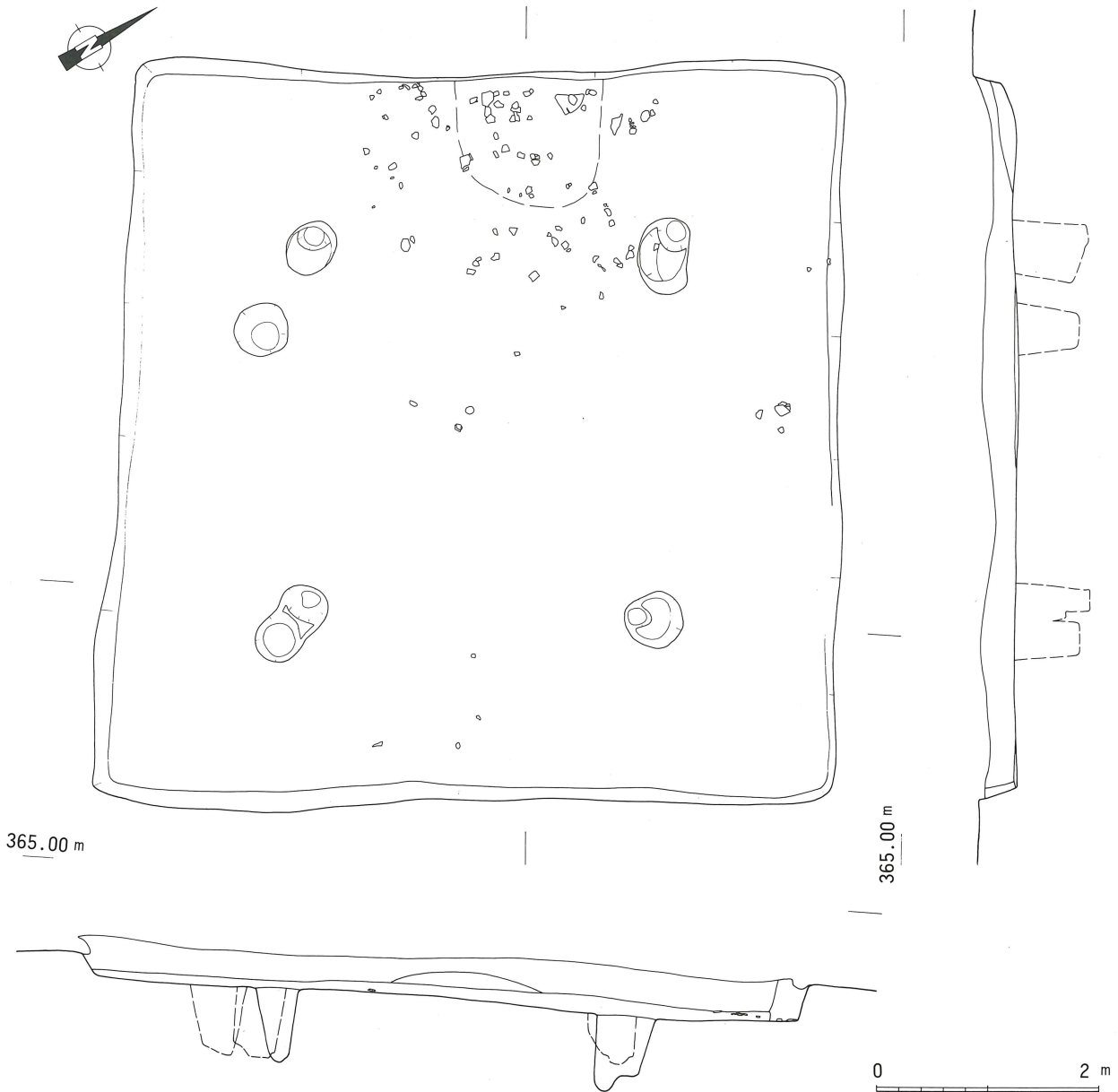
4本柱

カマド 北壁の中央に位置する。床面に焼土・炭層が堆積しているが、原形は留めていない。左右の焚口袖(石)や支脚等も存在しない。現存するカマド施設は基盤床だけである。

カマド

カマド基盤床 幅120cm、長さ90cm、深さ10cm前後でレンズ状に掘り込み、黄褐色粘質土で貼床をしている。上面は幅50cm、長さ40cmの範囲で被熱を受け、赤褐色に変色している。この部分が燃焼室と思われる。住居跡外部には煙道部は確認されなかった。カマド基盤床の上には黒褐色土に炭・焼土が混入した層が堆積していた。層中に甕の破片をかなり含んでいた。

出土遺物 (第29~30図) 当住居跡の埋土からは相当量の遺物が出土したが、そのほとんどが流れ込みである。遺物は甕、須恵器坏、縄文時代打製石斧、弥生時代石庖丁等である。



第27図 原田遺跡5号住居跡実測図

出土遺物

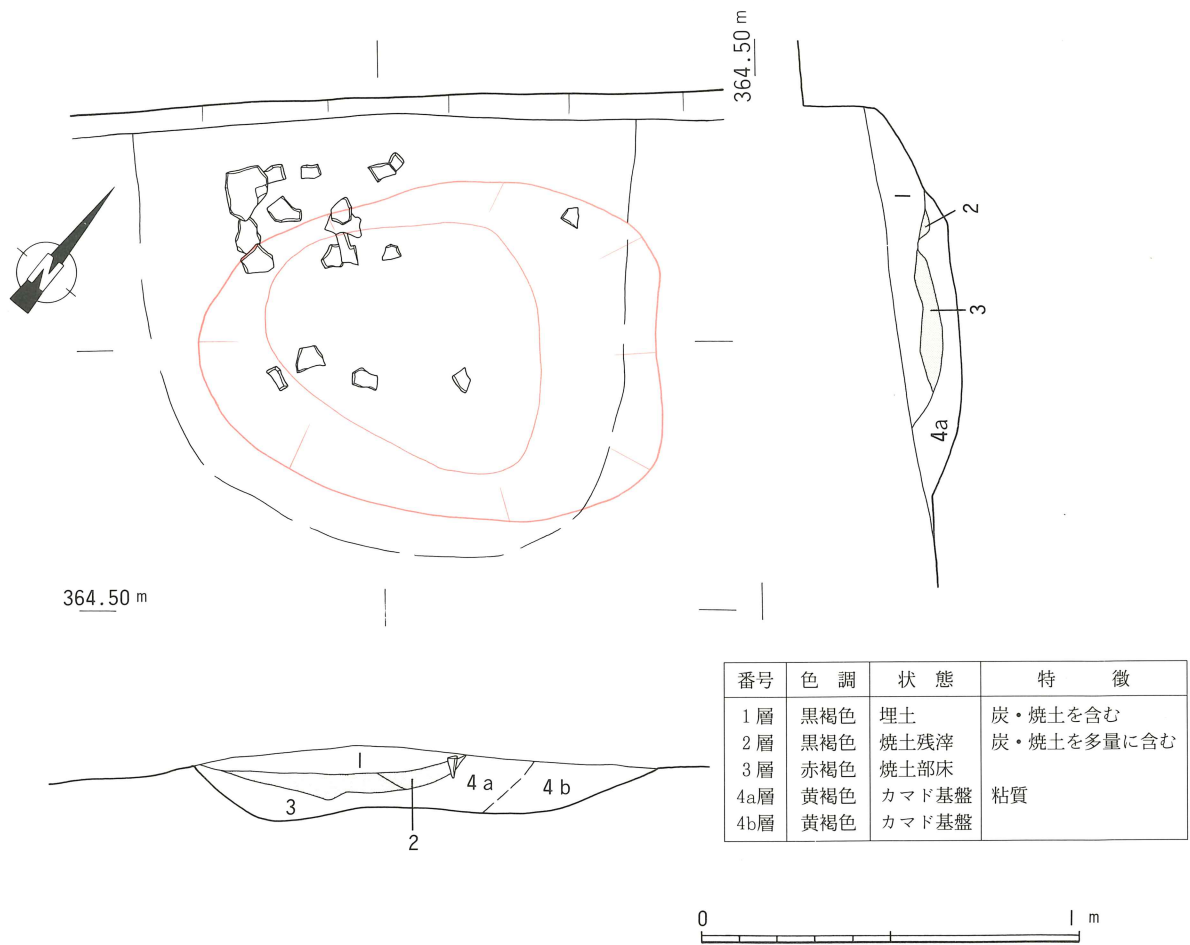
1～5は須恵器の坏蓋である。全て破片であり、全体の2分の1～3分の1を残す。口径は最小が1の13cm、最大が2の14.8cmである。器高は最小が4の3.6cm、最大が3の4.3cmで、1は器高不明である。器面調整は天井部が回転ヘラ削りのほかはナデ仕上げである。3は口縁部分に、4・5は天井部にそれぞれヘラ記号が認められる。また3の内面には当て具痕と思われる痕跡が僅かに認められる。色調はほぼ青灰色である。

6～10は須恵器の坏身である。7はほぼ完形品で、他は全体の2分の1～4分の1を残す。口径は最大が10の13.7cm、最小が8の11.6cmであるが、大部分は12cm前後である。器高は7の4.6cm以外は不明である。器面調整は底部が回転ヘラ削りで、口縁から内面はナデ調整を行っている。10は底部にヘラ記号を、内面に同心円タタキの当て具痕が認められる。色調はほぼ青灰色である。

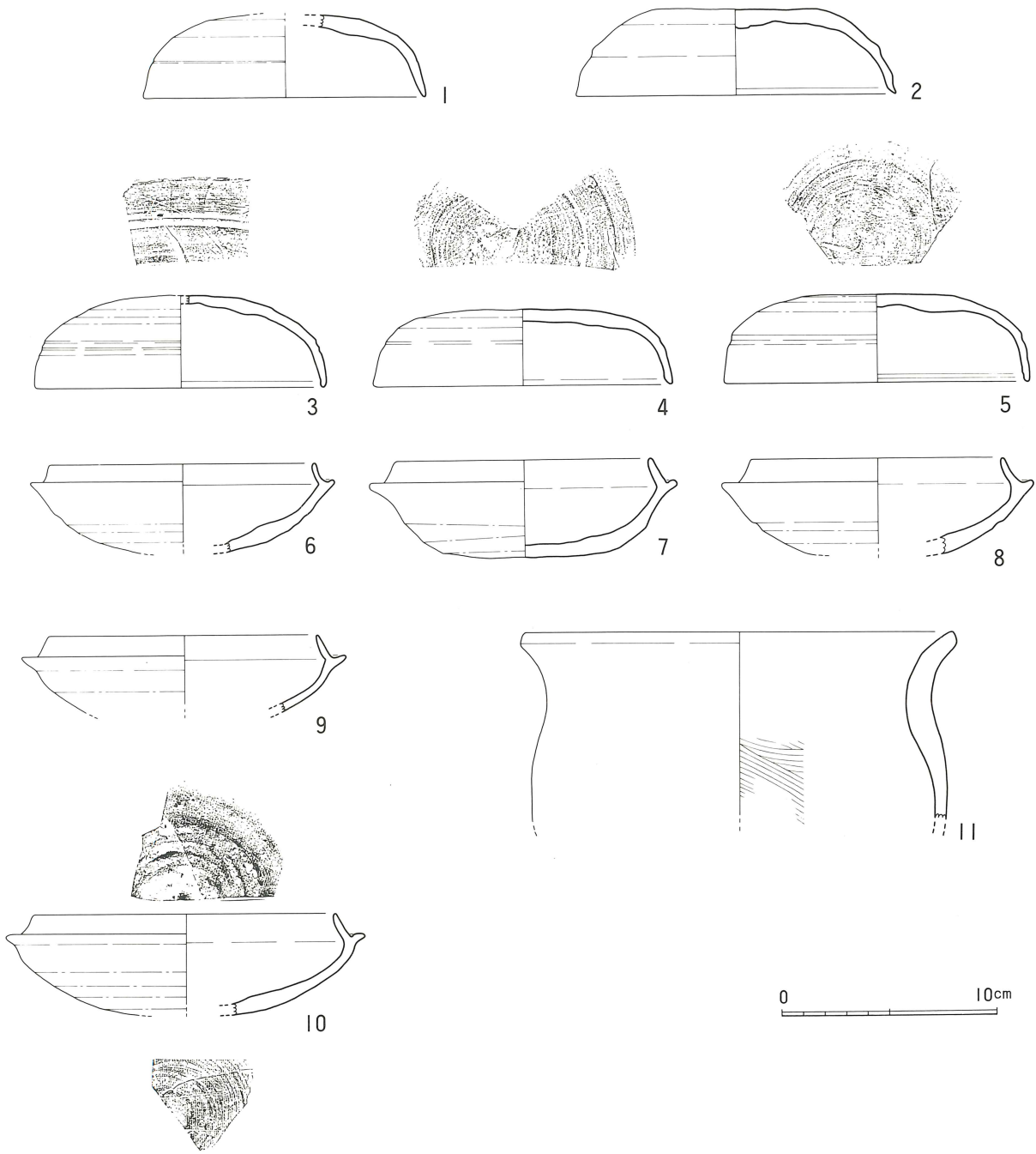
11は甕で、北東のコーナー付近から口縁部と胴部の一部が出土した。口縁内外面は横方向のナデで仕上げ、胴部外面は斜め方向のハケ目調整を行っている。色調は赤褐色を呈する。

12は紡錘車で全体の2分の1を残す。石材は滑石製で側面が傾斜し、台形を呈す。径4.3cm、孔径0.7cm、厚さ1.8cm、重さ24.4gである。

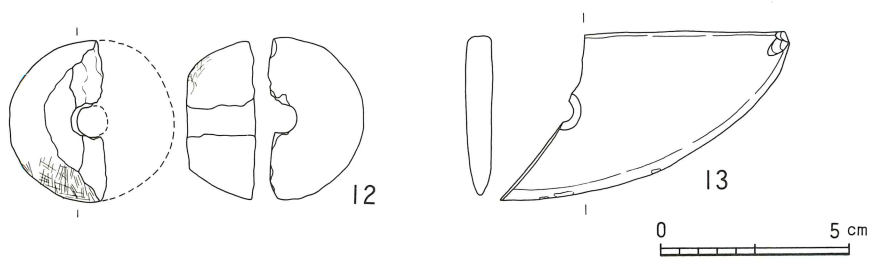
13は砂岩製の石包丁で全体の2分の1を残す。背は直線的で、刃部は丁寧に仕上げられ半月状になる。孔は両面穿孔である。埋土よりの出土であり、流れ込み遺物であろう。



第28図 原田遺跡5号住居跡カマド実測図



第29图 原田遺跡 5号住居跡出土遺物実測図



第30图 原田遺跡 5号住居跡出土石製品実測図

6号住居跡

5号住居跡の北側10mに位置する。平面形は方形を呈しているが、南側角付近は削平により消滅している。北壁は近世の溝状遺構により切られている。東西5m、南北4.8m、住居跡検出面から床までの深さは東壁付近で15cmである。主軸方位はN-72°-Eを示す。住居跡内には東壁にカマドを付設している。さらにこのカマドの東側からも別のカマドを検出した。南壁そばには径1.2m程の3号土坑が検出されたが、土層の切り合いからこの住居跡に伴うものではない。支柱穴は4本で径約40cm、深さは40cm前後である。支柱穴間は2.3~2.6mである。床面はほぼ平坦であり、黄褐色粘質土で厚さ5~10cm程の貼床を行っている。

3号土坑

4本柱

カマド

カマド 2基検出した。当住居跡に伴うものをカマドAとし、他の1基をカマドBとする。

カマドA 東壁の中央に位置する。住居跡外へは約10cm張り出している。上部施設は削平を受けており、カマド破棄に伴う祭祀行為の有無は確認できなかった。「コ」の字形の袖の一部分が壁側に残っている。

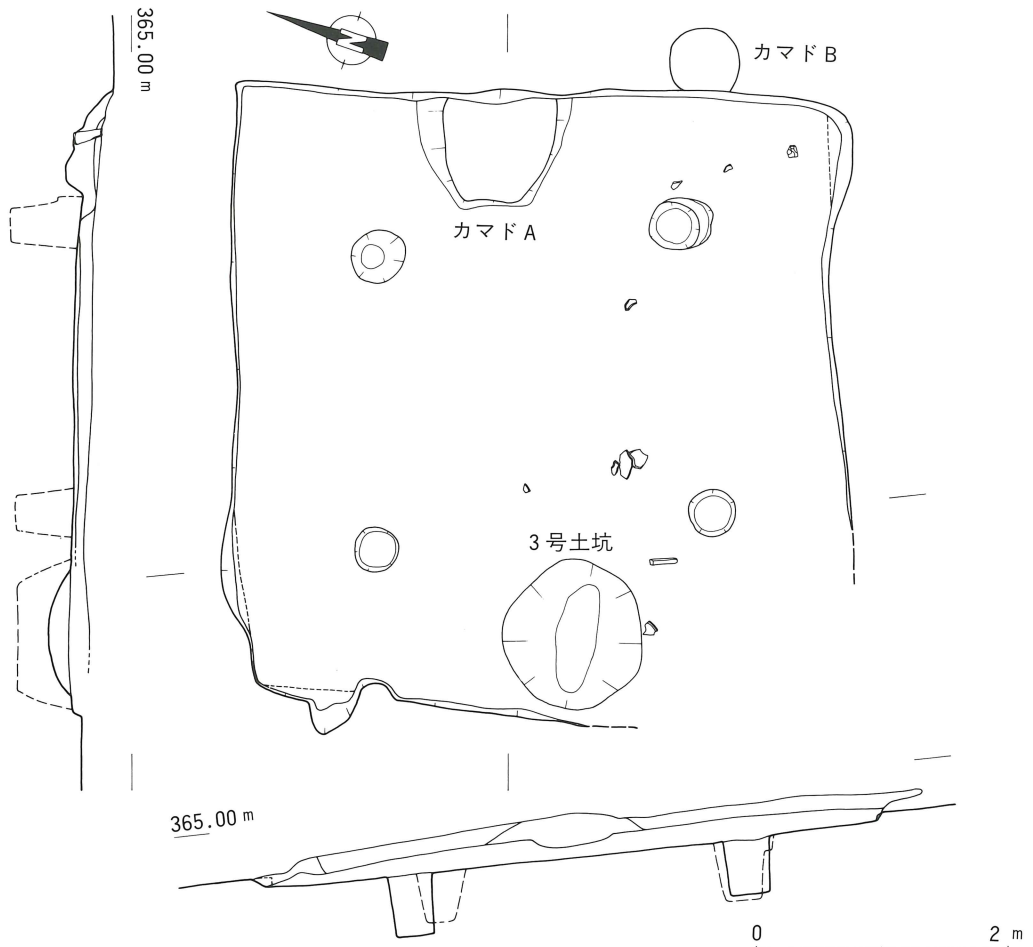
カマド基盤床 住居跡貼床と同質の層のため、明確には判断し難いが、レンズ状の窪みからみて幅160cm、長さ60cm、深さ10cm程度である。

支脚

焚口部 焚口両袖部分は壊されて存在しない。

燃烧室 燃烧室中央から石製の支脚が出土した。床の焼土化の様相からみて、支脚は元位置を保っている。燃烧室の袖は壊されている。

煙口部 天井部は壊されているが、煙口床の傾斜は約45°の勾配で住居跡外へ延びている。煙道部は現存しない。



第31図 原田遺跡 6号住居跡実測図

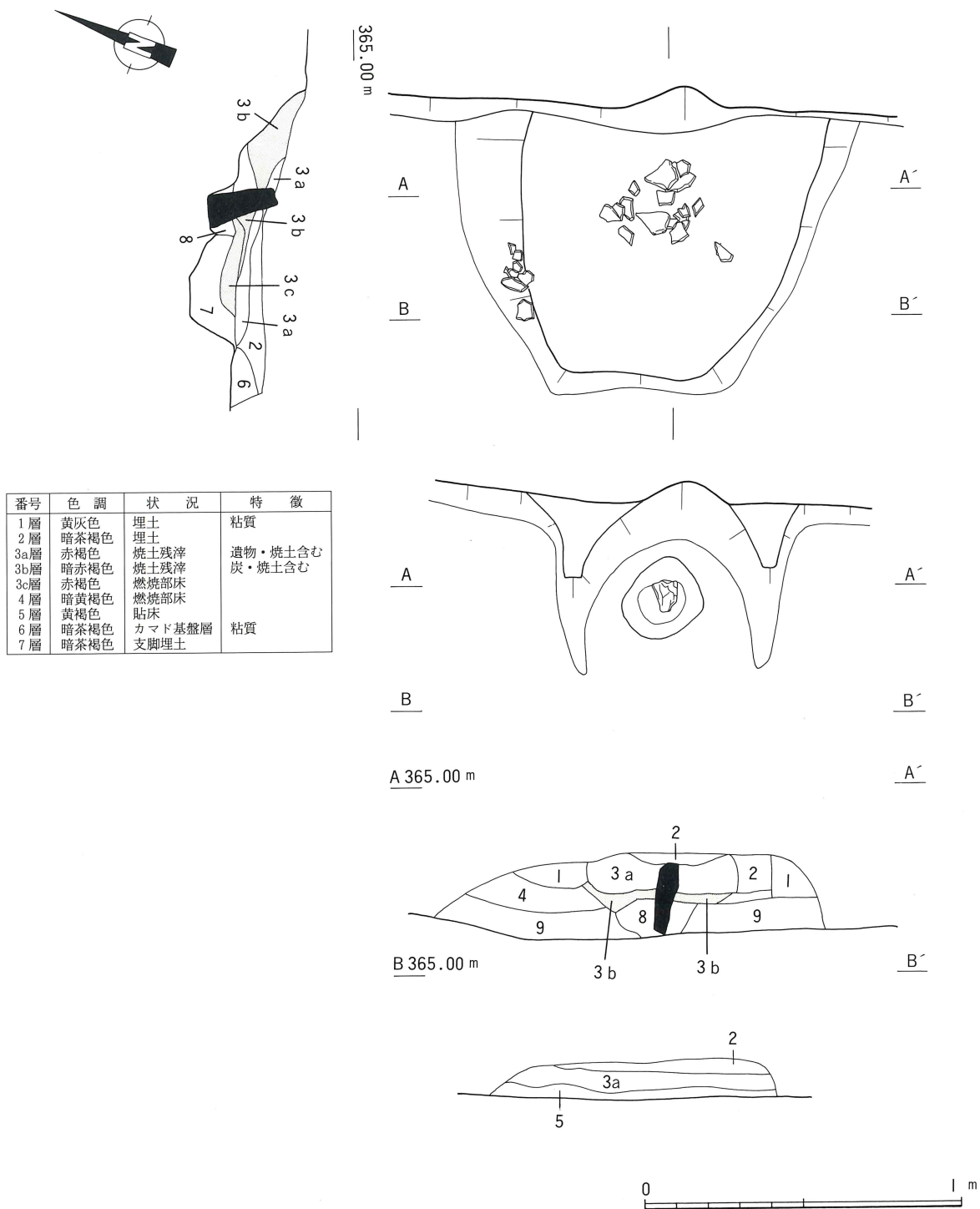
カマドB カマドAの東1.7mの東壁外に位置する。残りは悪く、残存する施設は燃焼室の床面だけであるが、この床面も一部分6号住居跡の東壁により切られている。カマドBが伴うと思われる住居跡はすでに削平を受けており、プランとしては確認できない。

出土遺物

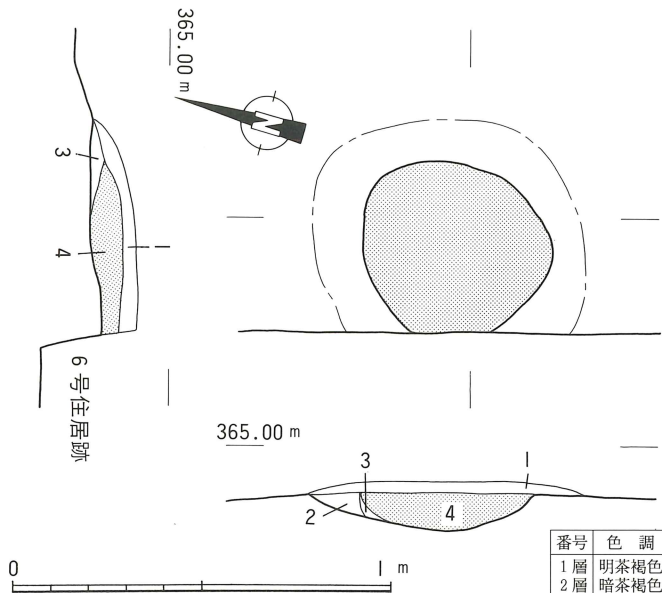
出土遺物 (第34図) 当住居跡内からは遺物の出土は少なく、図示できるものは2点である。

1は須恵器の坏身で床面出土。全体の2分の1を残す。口径11.8cm、器高4.4cmで底部回転ヘラ削り、口縁内外は横ナデが施されている。焼成は良好で、色調は内外面とも黄灰色である。

2は甕の口縁部分で小破片である。復元口径は18.2cmで胎土に白色砂粒、角閃石を含む。器面は、口縁内外面とも横方向のナデ調整で仕上げている。色調は橙色を呈する。

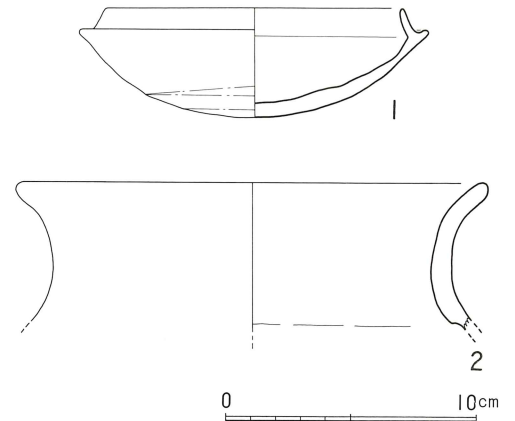


第32図 原田遺跡6号住居跡カマドA実測図



第33図 原田遺跡 6号住居跡カマドB実測図

番号	色調	状況	特徴
1層	明茶褐色	崩落埋土	炭・焼土含む
2層	暗茶褐色	カマド基盤層	粘質
3層	黄灰色	燃焼部床	表面被熱
4層	赤褐色	燃焼部床	

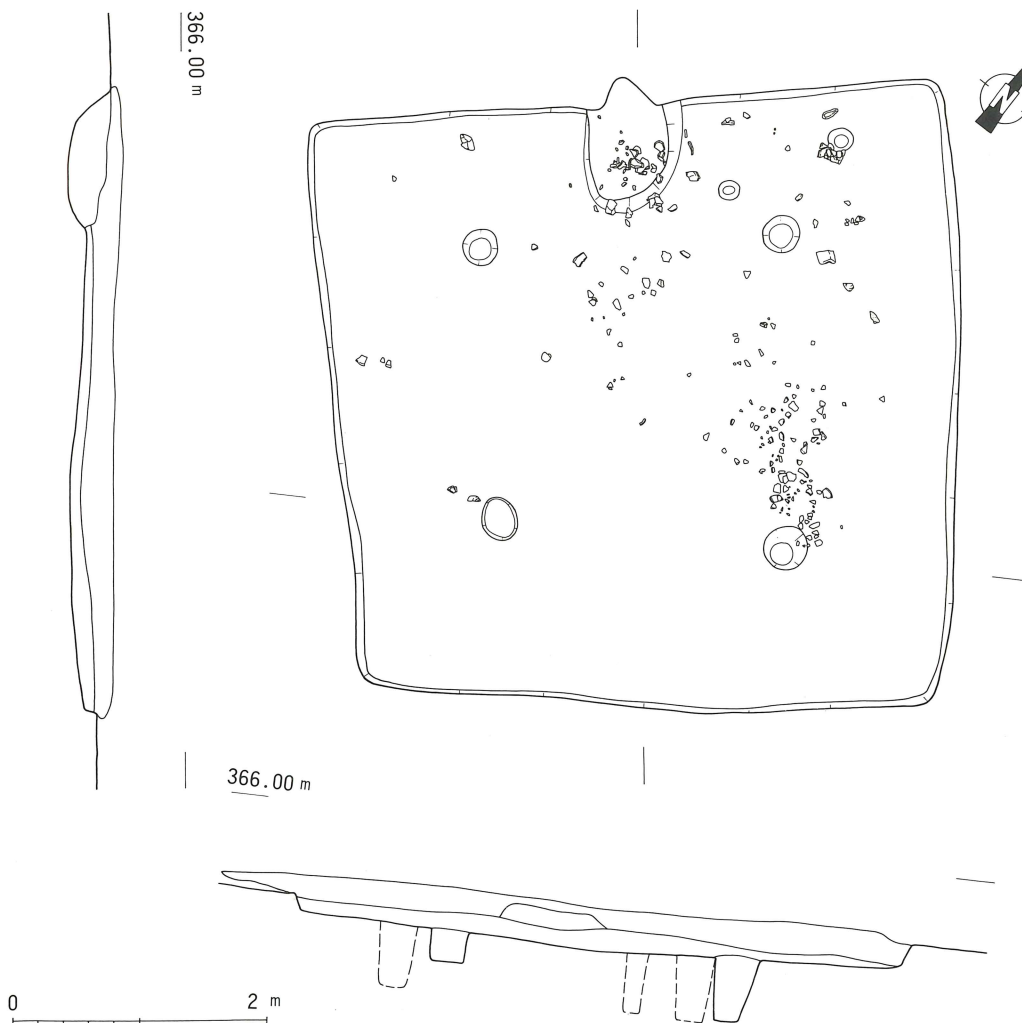


第34図 原田遺跡 6号住居跡出土遺物実測図

7号住居跡

6号住居跡の北5 mに位置する。平面形は方形を呈しており、長軸5 m、短軸4.8 m、検出面から床までの深さは約15 cmを測る。主軸方位はN-36°-Wを示す。住居跡内には北壁にカマドを付設している。

主柱穴は4本で径30 cm前後、深さ30~50 cmである。主柱穴間は2.2~2.5 mを測る。床面はほぼ平坦で、厚さ5 cmほどの貼床を行っている。貼床は黄褐色の粘質土を使用し、仕上げている。



第35図 原田遺跡 7号住居跡実測図

カマド 北壁の中央に位置する。壁を20cmほど掘り込んでいる。原形を留めていない。

カマド

カマド基盤床 幅100cm、長さ80cm、深さ10cm前後でレンズ状に掘り込み、暗茶褐色の粘質土で貼床をしている。

燃烧室 燃烧室床面の被熱による焼土層が残っている。上面には被熱した壺の破片が約1個体分出土した。

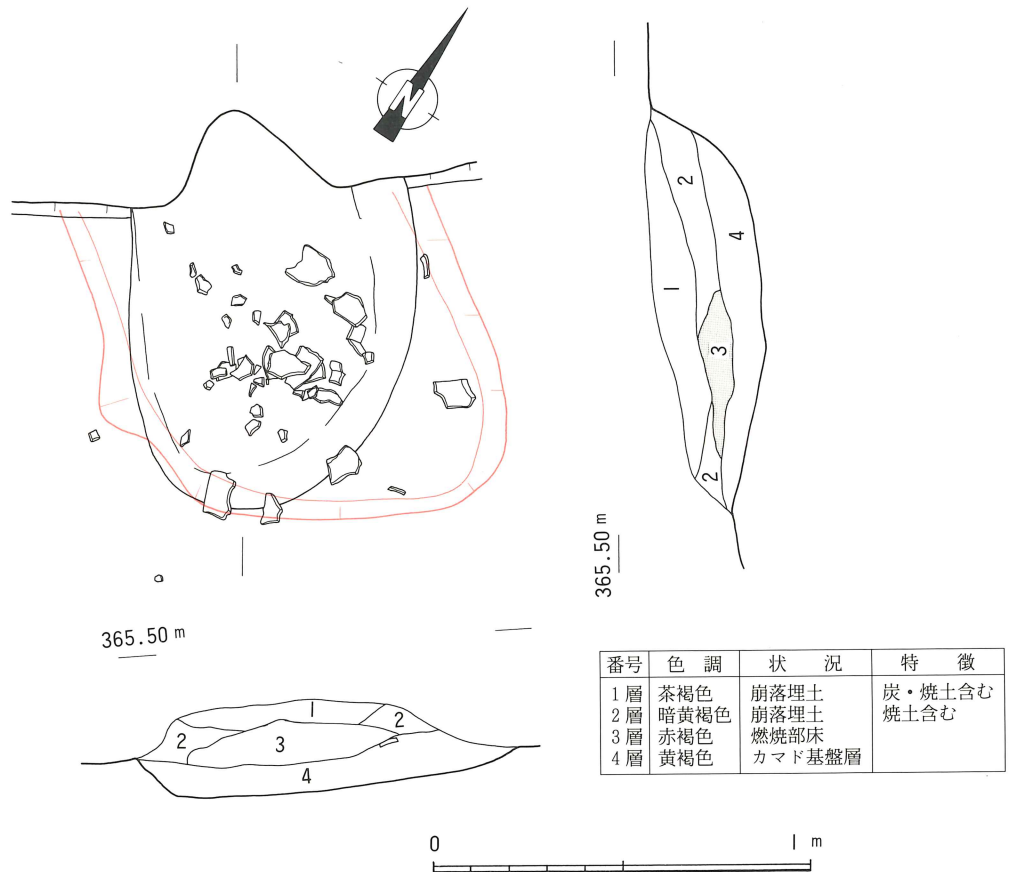
出土遺物 (第37図) 遺物はカマドを中心に出土し、ほとんどが甕の破片である。

出土遺物

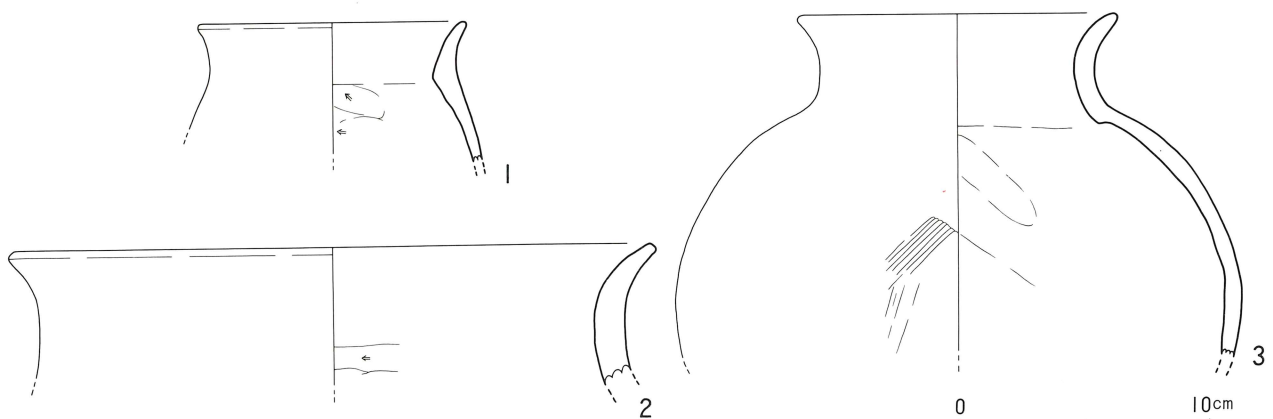
1はカマド内から出土した小型丸底壺で、器面は口縁内外が横方向のナデ調整、胴部内面は斜め方向のヘラ削り、色調は橙色を呈す。

2は甕の口縁で、残りは良くない。内外面とも横方向のナデ調整、胴部内面はヘラ削りを行っている。胎土に角閃石を含む。

3はカマド内出土の壺で、外面は比熱により赤褐色に変色している。器面は、口縁内外面とも横方向のナデ調整、胴部外面は不定方向のハケ目調整、胴部内面は斜め方向のヘラ削りで仕上げている。



第36図 原田遺跡7号住居跡カマド実測図



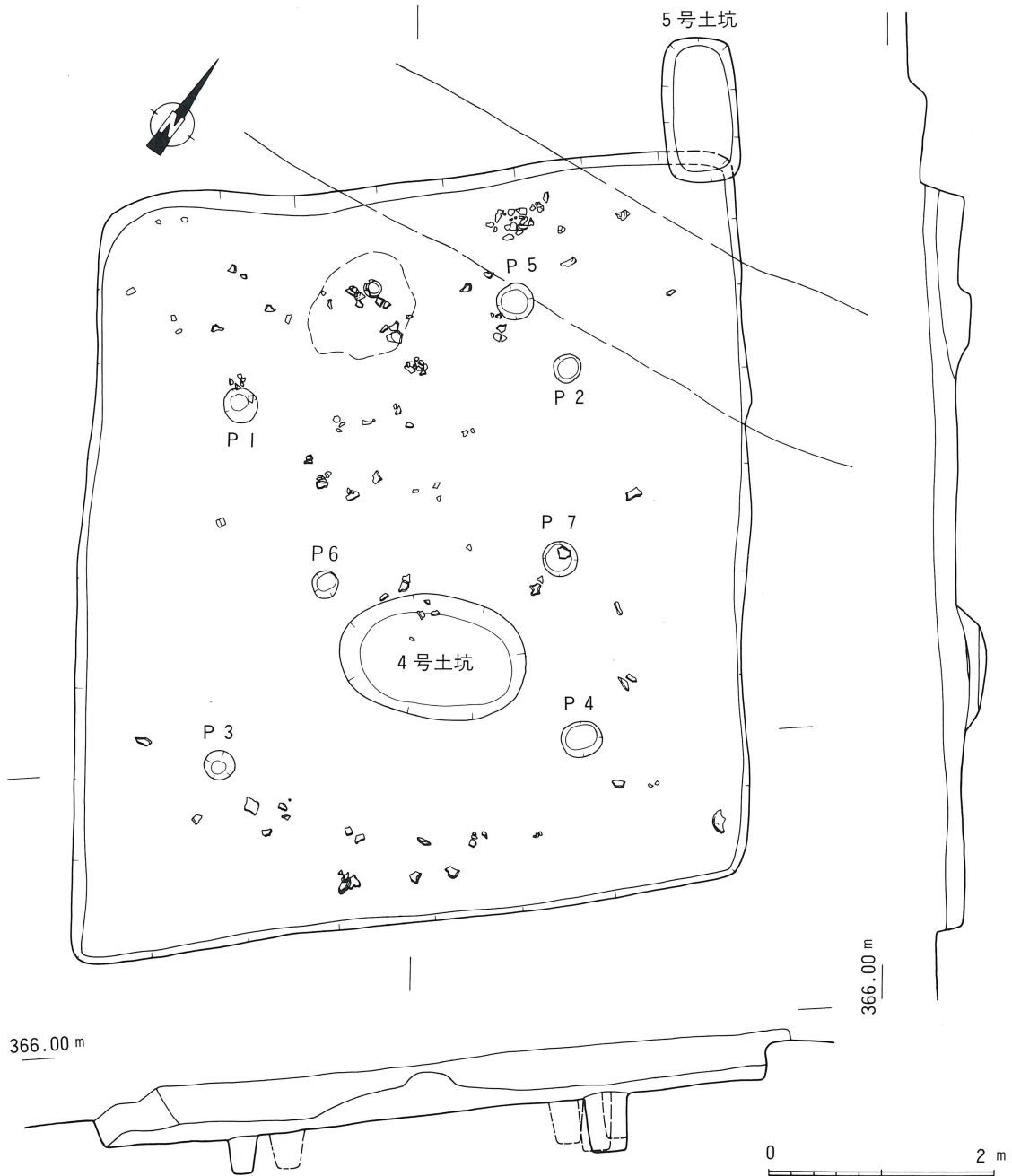
第37図 原田遺跡7号住居跡出土遺物実測図

8号住居跡

7号住居跡の北1mに位置する。平面形は方形を呈しているが、北側角を近世の溝状遺構によって切られている。長軸6.5m、短軸6.0m、検出面から床までの深さは20~30cmである。主軸方位はN-35°-Wを示す。住居跡内には北壁付近にカマドを付設している。住居跡の北壁角に隅丸長方形の4号土坑が、ほぼ中央に長軸168cm、短軸108cmの楕円形の5号土坑が検出されたが、いずれも住居跡に伴うものではない。支柱穴は4本でP1~P4までが、当住居跡の支柱穴と考えられる。P5~P7は最終床面検出時に確認された。支柱穴P1~P4は径20~30cm、深さ40~60cmと比較的深く掘り込まれている。支柱穴間はP1~2間は2.9m、P3~4間は3.2m、P1~3間は3.2m、P2~4間は3.2mを測る。

床面には厚さ5cm前後の貼床が認められた。黄褐色の粘質土を使用し、堅固に仕上げている。

4号土坑
4本柱



第38図 原田遺跡8号住居跡実測図

貼床を除去すると先述したP5～P7の柱穴が検出された。当住居跡は建て替えが行われたと思われる、P5～P7の柱穴は建て替え前の住居跡の主柱穴と考えられる。主柱穴は確認できたのは3本であるが、P1が新旧住居跡の主柱穴を兼ねていたことも考えられる。この4本を主柱穴とすると径30cm前後、深さ40～50cmとなる。主柱穴間は2～2.5mとなり、やや不整形の柱穴配置となる。

建て替え

カマド 北壁のほぼ中央付近に位置し、壁とは接していない。残りはあまり良くない。袖、天井部等が残っていない。

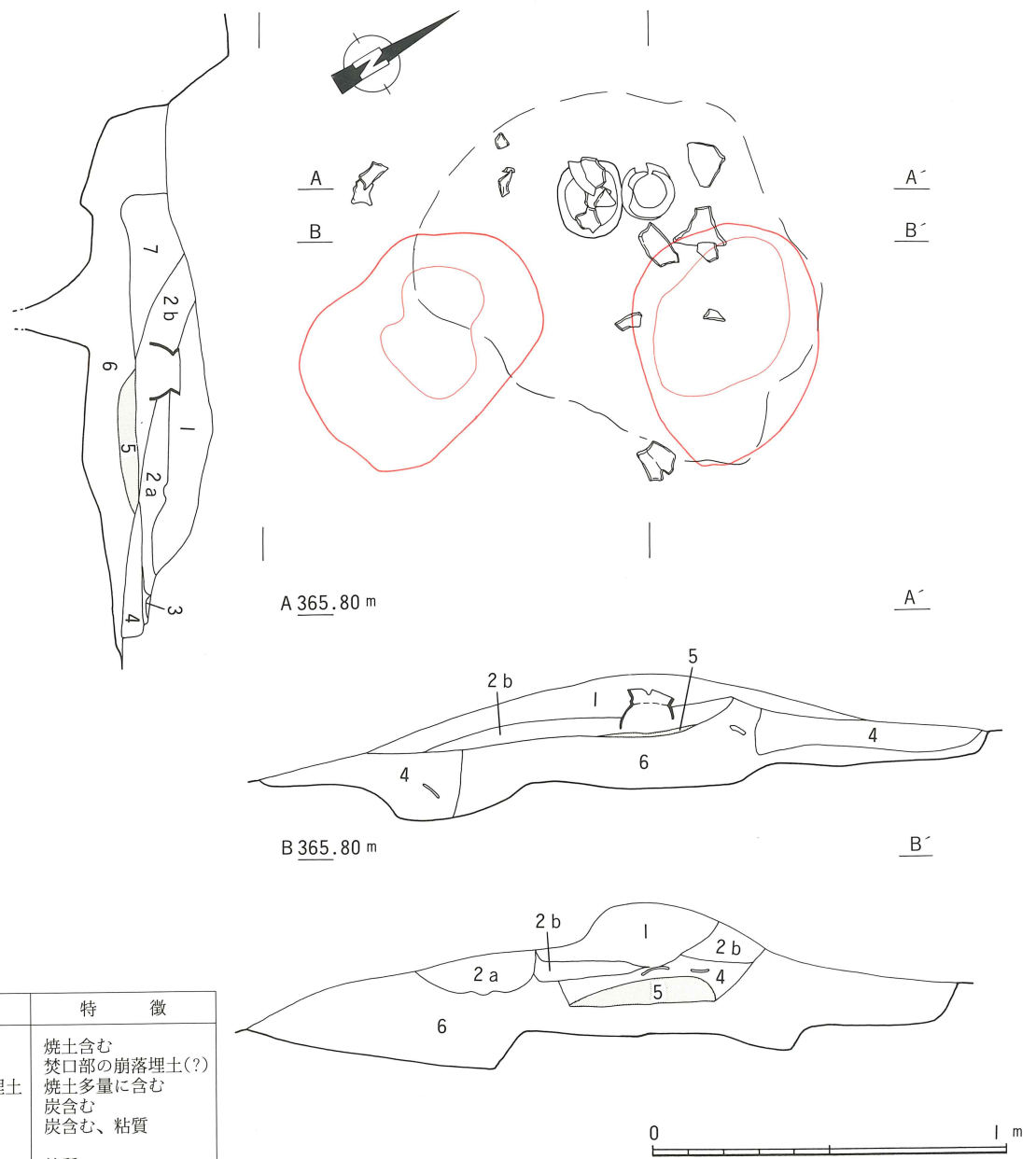
カマド

カマド基盤床 幅約1.5m、長さ約1.5m、深さ約15cmほどを掘り下げ、暗茶褐色の粘質土を敷きつめている。

焚口部 両端にピット状の掘り込みを検出した。袖石据え付け用の掘り込みと思われる。袖石は存在しない。

燃烧室 燃烧室は天井、袖、壁は残っていない。中央部分から甕の上半分が埋置された状態

支脚



番号	色調	状況	特徴
1層	暗褐色	埋土	焼土含む
2a層	灰褐色	崩落埋土	焚口部の崩落埋土(?)
2b層	暗赤褐色	炎熱・炎口部崩落埋土	焼土多量に含む
3層	黒褐色	前庭部埋土	炭含む
4層	暗褐色	前庭部埋土	炭含む、粘質
5層	赤褐色	燃烧部床	
6層	茶褐色	カマド基盤層	粘質
7層	暗茶褐色	煙口・煙道部埋土	粘質

第39図 原田遺跡8号住居跡カマド実測図

で出土した。被熱を受け赤褐色に変色し、一部ススが付着している。支脚としての役割をしていたと思われる。床は甕の前面まで赤褐色に被熱しており、幅41cm、縦41cm、厚み5cm前後のほぼ円形である。炎焼部と炎口室の境ははっきりしない。燃焼室には壺の破片が散在している。

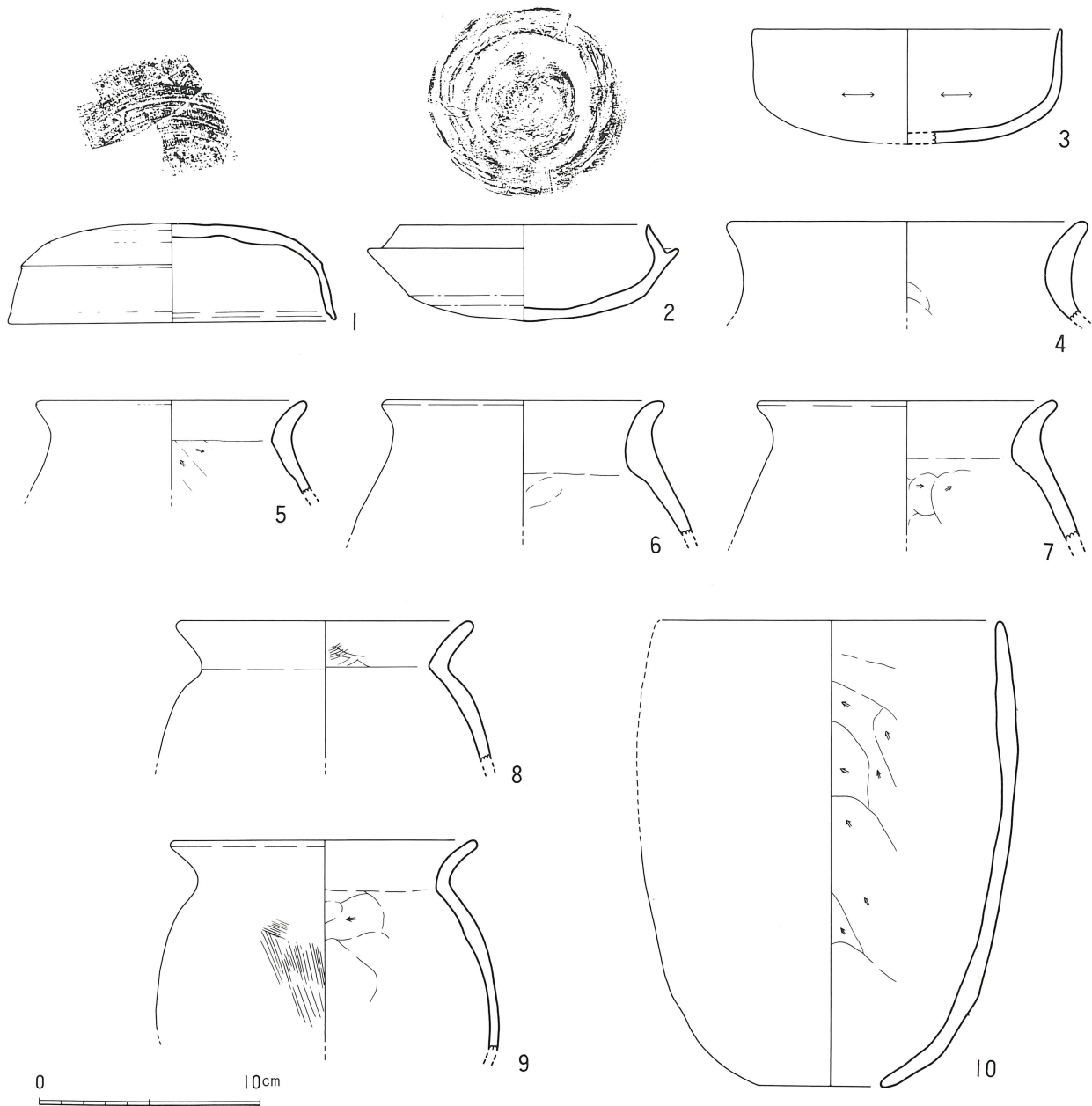
煙口室 残存しない。

出土遺物

出土遺物（第40図） 遺物は埋土内から須恵器の坏や甕の破片等が出土した。カマドや周辺からは甕、甌等が出土した。

1～2は須恵器の坏である。1は口径14.7cm、器高4.5cmで天井部は回転ヘラ削り、他は横方向のナデ仕上げを行っている。天井部にはヘラ記号が見られる。2は口径11.3cm、器高4.4cmで、器面調整は1と同じである。内面に同心円タタキの痕跡が認められる。3は土師器の碗で全体の3分の1を残す。復元口径14.1cm、器高5.2cmで、器面は内外面ともヘラミガキを行っている。色調は黄白色を呈している。

4～9は甕の口縁～胴部の一部で、5～9はカマド及びカマド周辺からの出土で、内外面に



第40図 原田遺跡8号住居跡出土遺物実測図

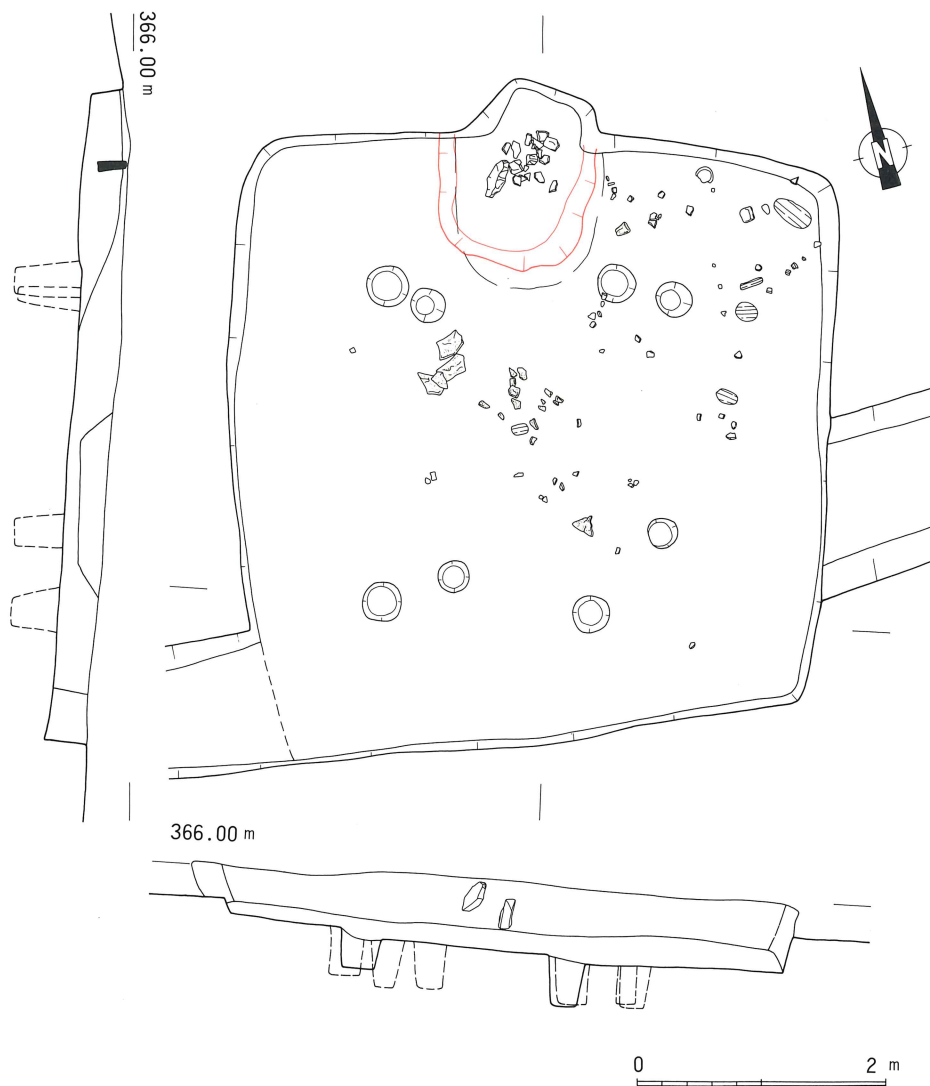
ススや煮焦げ痕が認められる。なかでも9は支脚として使用されていたため、外面の半分は被熱を受け、赤褐色に変色、半分はススが付着している。口径は最小が5の11.8cm、最大で4の15.4cmである。器面調整は、口縁部内外面とも横方向のナデ調整、胴部外面は9が縦方向のハケ目調整、他はナデ或いは摩滅して不明である。胴部内面は斜め、横方向のヘラ削り調整を行っている。

10は小型の甌である。上部はススが付着している。器面調整は外部がナデ調整、内面は胴部上部が斜め方向のヘラ削り、中央から底部は縦方向のヘラ削りを行っている。口径15.4cm、器高21.2cmである。色調は橙色を呈している。ススや煮焦げ痕が認められる。

9号住居跡

8号住居跡の北西3mに位置する。平面形は方形を呈しており、東西4.8m、南北4.9m、検出面から床までの深さは30~40cmを測り、北壁にカマドを付設している。主軸方位はN-18°-Eを示す。主柱穴は4本であるが、貼床除去後にさらに4本の柱穴を検出した。当住居跡の主柱穴はP1~P4で、径30cm、深さ40cm前後である。主柱穴間は1.8~2.6mで台形状の配置をしている。P5~P8の柱穴は貼床除去後の検出であり、建て替え前の住居跡の主柱穴である。径20~30cm、深さ35cm前後で主柱穴間は長軸2.1m、短軸1.7m前後のやや長方形の配置をして

4本柱
建て替え



第41図 原田遺跡9号住居跡実測図

いる。床面は北側と西側の一部が幅約1mに亘ってやや高く、この部分を住居跡の建て替え時に拡幅したものと考え。これより旧住居跡は4×4m前後の規模であったと推測する。

当住居跡の床面は黄褐色粘質土で厚さ約5～15cmの貼床を行って旧住居跡との傾斜を整えている。南側は東西に走る近世の溝状遺構によって切られている。

カマド

カマド 北壁の中央に位置する。住居跡外へは約40cm程張り出している。上部施設は燃烧室床と支脚、焚口袖石の一部が残っている。

カマド基盤床 幅1.2m、長さ1.5m、深さ10cm前後でレンズ状に掘り込み、暗茶褐色の粘質土で貼床を行っている。

袖石

焚口部 右袖石が検出されただけで他の施設は存在しない。

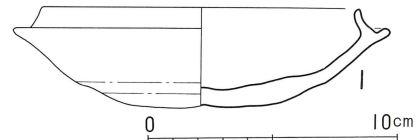
支脚

燃烧室 燃烧室中央から石製の支脚が出土した。床面は径60cm前後の範囲で被熱を受け、赤褐色に変色している。上面から赤褐色に被熱した甕の破片が出土した。炎口室から煙道にかけては存在しない。

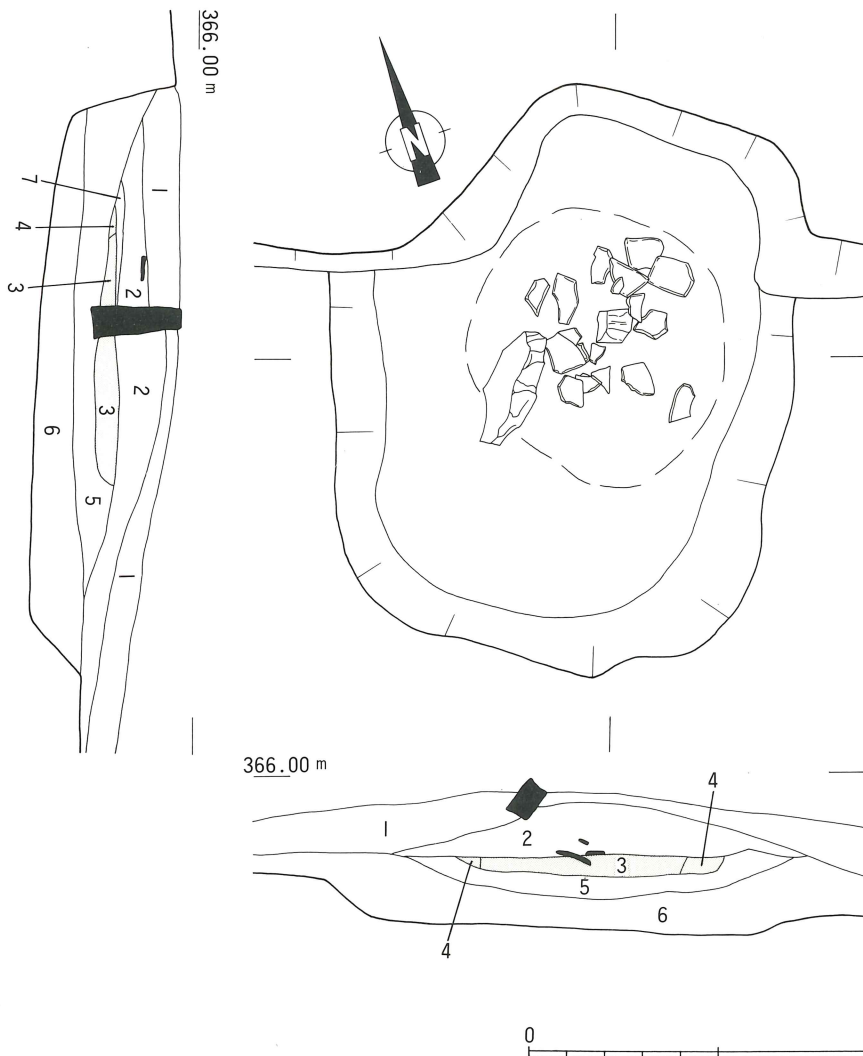
出土遺物

出土遺物 (第42図) 遺物はカマド内から被熱した甕の胴部破片が出土した。周囲からも若干の破片は出土したが、全体的に遺物は少ない。

1は須恵器の坏身である。カマドの右側から出土した。口径15.2cm、器高4.0cmで底部回転ヘラ削り、他は横ナデで仕上げている。色調は淡青灰色を呈す。



第42図 原田遺跡9号住居跡出土遺物実測図



第43図 原田遺跡9号住居跡カマド実測図

番号	色調	状況	特徴
1層	暗黒褐色	埋土	二次堆積
2層	暗赤褐色	崩落埋土	炭・焼土多量に含む
3層	赤褐色	燃烧部床	
4層	暗赤褐色	燃烧部床	
5層	茶褐色	カマド基盤層	表面被熱
6層	暗茶褐色	カマド基盤層	粘質
7層	黒灰色	炭層残滓	

10号住居跡

7号住居跡の西3mに位置する。東西4.9~6m、南北5.5~5.9m、住居跡検出面から床までの深さは10~20cmで、平面形はやや変形した方形を呈している。主軸方位はN-41°-Wを示す。住居跡内には北壁にカマドを付設している。主柱穴は4本で径40cm前後、深さ40~60cmと

4本

比較的に深く掘り込まれている。主柱穴間は長軸2.7m、短軸2.5mとほぼ方形の配置をしている。床面はほぼ全域で厚さ5cm前後の貼床が認められた。茶褐色の粘質土を使用し、堅固に仕上げている。

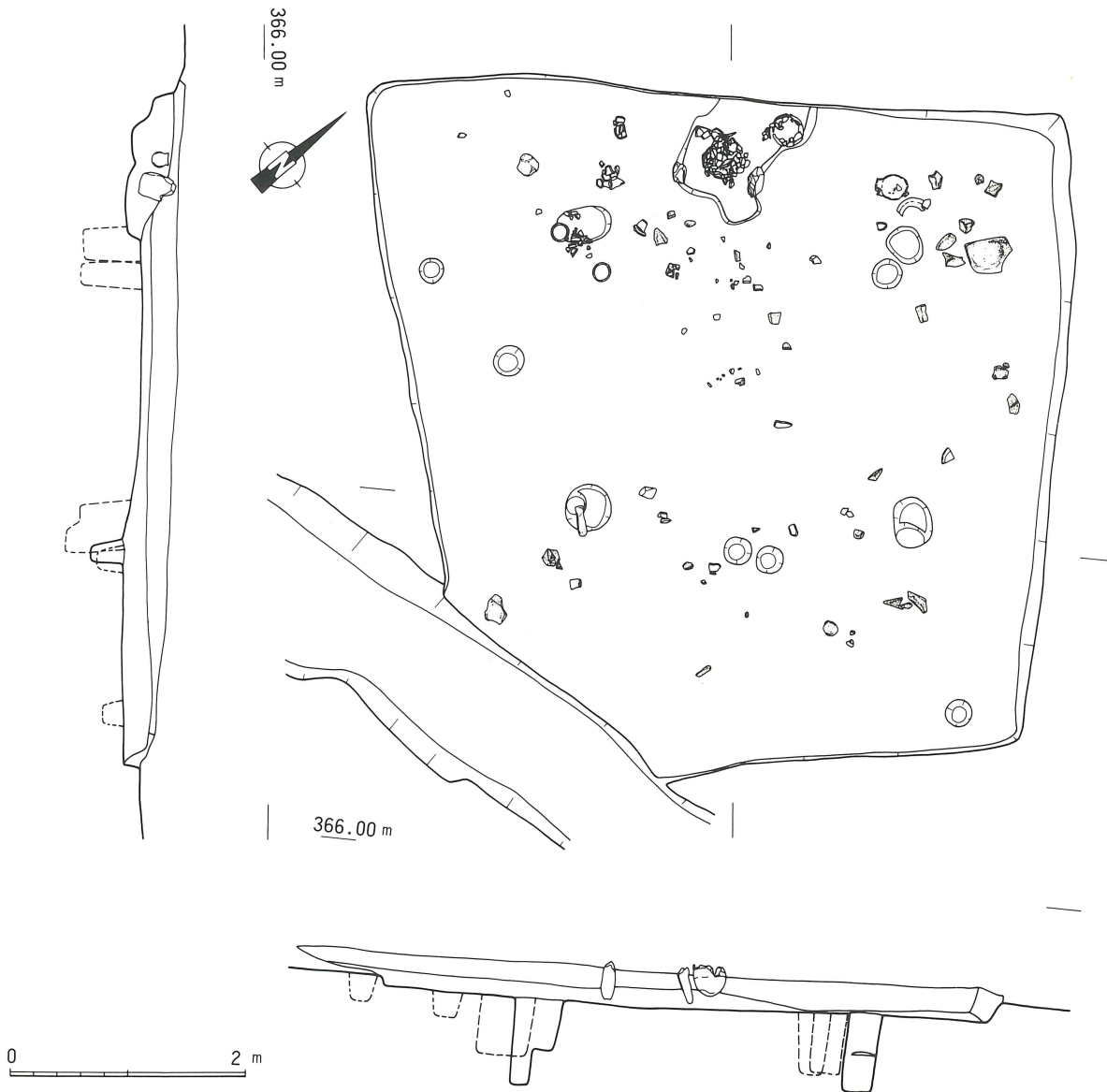
カマド 北壁のほぼ中央に位置し、壁からは突出していない。上部施設は削平を受け残りは悪いが、下部施設はほぼ原形を保っている。カマドの規模は幅、長さとも1.1m前後である。

カマド

カマド基盤床 幅110cm、長さ80cm、深さ10~15cm前後でレンズ状に掘り込み、暗黄褐色の粘質土で貼床を行っている。

焚口部 左右袖石が残っている。左袖石はほぼ垂直であるが、右袖石は若干内傾した状態で検出した。傾斜角は65°を測る。石材は凝灰岩で、先端を打ち欠いて使用している。袖石間は床面で60cm、天井付近で53cmを測る。袖石はカマド基盤床を掘り込み、安定させている。

袖石



第44図 原田遺跡10号住居跡実測図

支脚

燃烧室 上部は崩落していたが、中～下部はほぼ原状のまま残存していた。燃烧室中央から小型丸底壺が出土した。壺はカマド破棄後に再埋置した状態ではなく、底部は床に接し、赤褐色に被熱していた。カマド使用時に支脚としての役割を果していたものである。周囲には壺の破片が散在していた。床面は壺の手前までが赤褐色に被熱している。範囲は幅60cm、長さ40cm、厚さ5cm程で楕円形をしている。

煙道 天井部は破壊されており、存在しない。煙口から煙出部にかけてはほぼ平坦で焼土残渣が堆積している。煙道奥壁の傾斜角は70° 前後で現状では屋外には張り出していない。

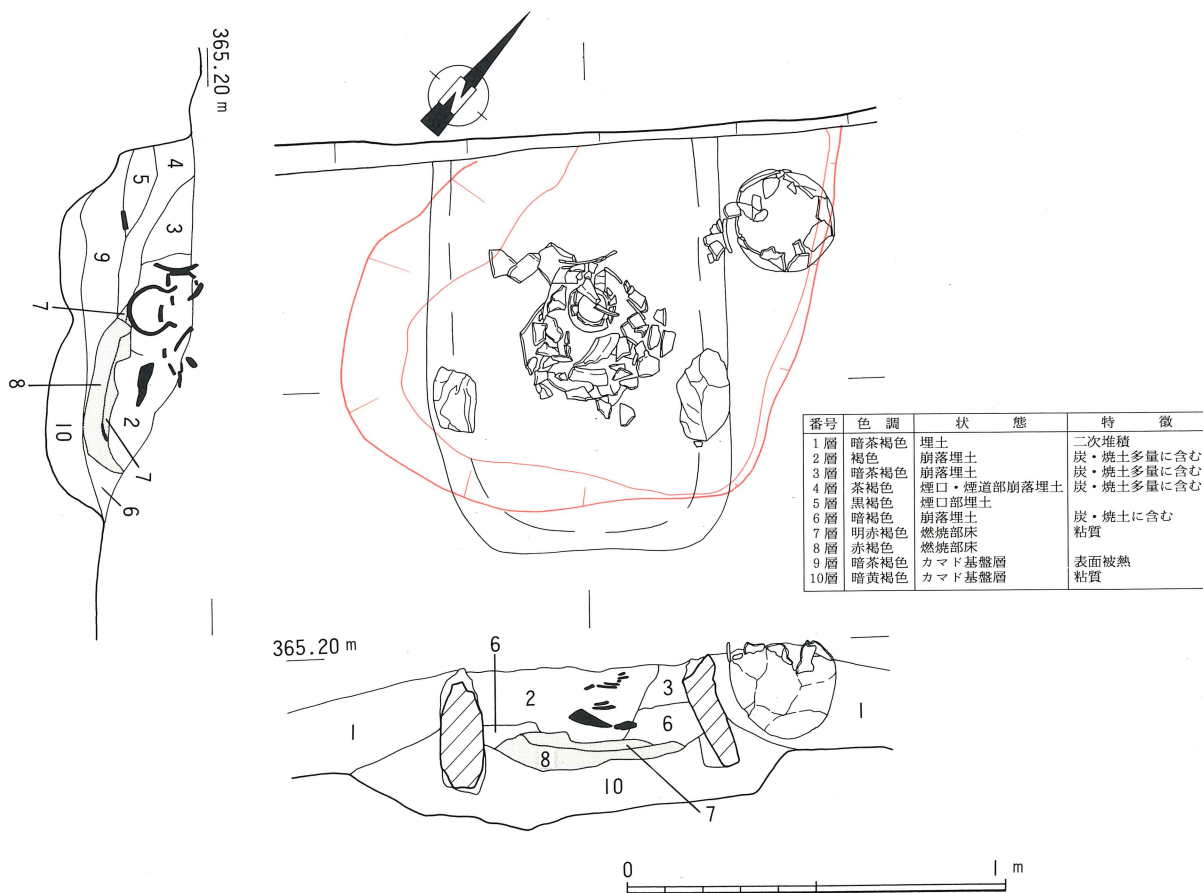
出土遺物

出土遺物 (第46図) 遺物はカマドの周囲で坏のセットや甕が出土した。またカマドからは支脚に使用した小型丸底壺、支脚上に備え付けた状態での甕、右袖石の脇で甕が出土した。埋土中からは8・9号住居跡出土の須恵器と接合する坏身が出土した。

1～3は須恵器で1・2の坏はカマド周辺からの出土である。1は口径13.6cm、器高4.2cmで、2は口径12.2cm、器高4.8cmである。3は口径13.6cm、器高3.9cmである。いずれも天井部と底部をヘラ削り、内面底部を不定方向の横ナデ、他は横ナデで仕上げている。胎土は1・2に白色砂粒・長石が、3に石英・長石が目立つ。色調は青灰色を呈する。

4～6は土師器の坏で、4・5はカマド周辺の出土である。4は口径11.8cm、器高3.5cm、5は口径12.9cm、器高3.9cm、6は口径13.4cm、器高3.4cmである。いずれも内外面とも丁寧に磨かれている。色調は4が橙色、5が灰褐色で外面にはススが附着している。6は橙色であるが、内外面とも赤色顔料を塗布している。

7はカマド燃烧室からの出土で、支脚の役割をしていた。口径11.6cm、器高14.9cmである。器面調整は口縁内外面とも横方向のナデ調整、胴部外面は不定方向の粗いハケ目調整、胴部内

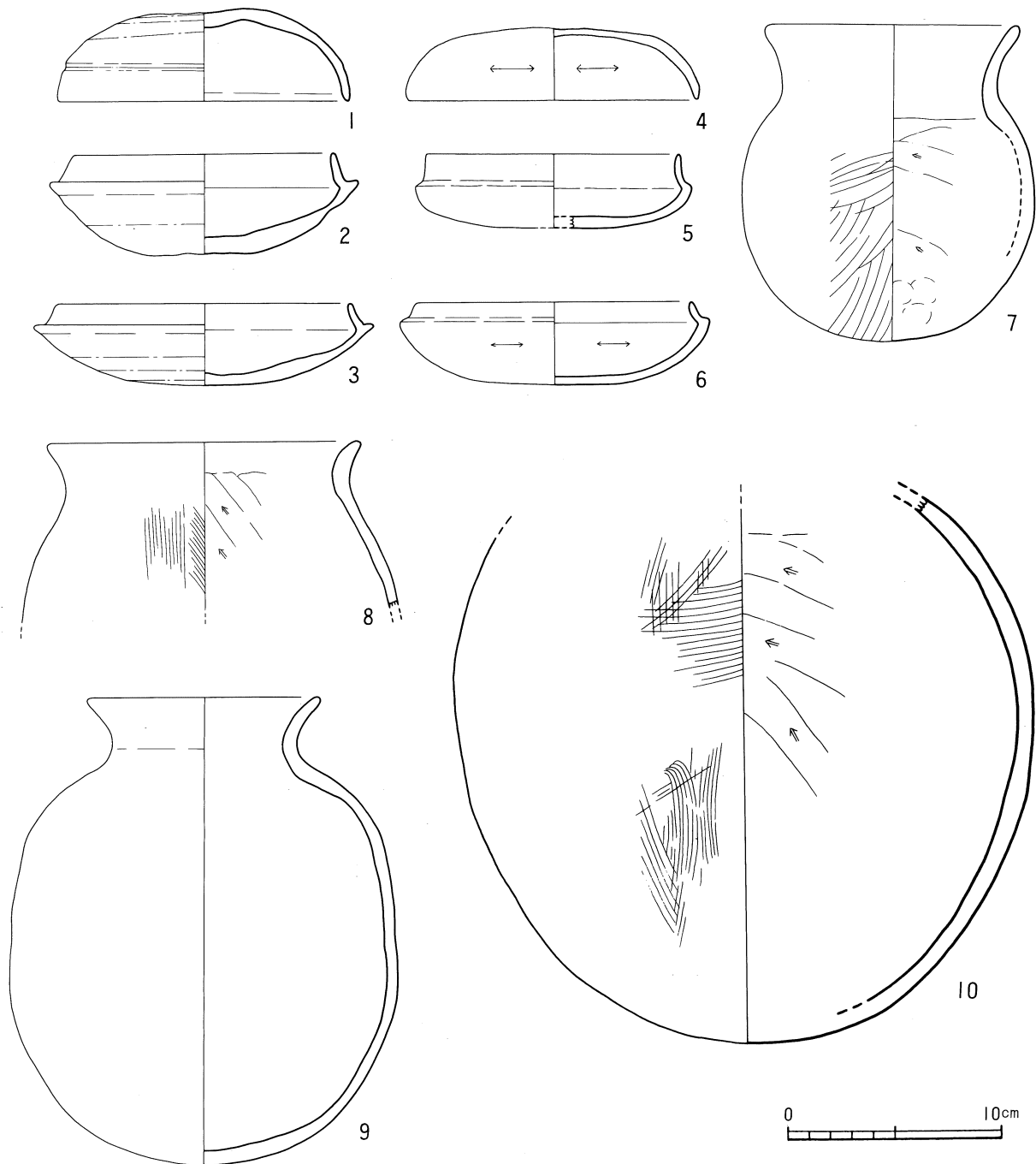


第45図 原田遺跡10号住居跡カマド実測図

面は斜め方向のヘラ削りで仕上げている。色調は黄橙色を呈している。

8～9はカマドの袖付近から出土した甕である。8は口縁と胴部の一部で、口径14.2cmである。器面は口縁が横方向のナデ、胴部外面に縦から斜め方向のハケ目調整を行い、スス附着。内面は斜め方向のヘラ削りで、煮焦げが付いている。9は全体の2分の1を欠く。口径10.3cm、器高22.1cmである。器面は口縁が横方向のナデ、胴部外面は縦から斜め方向のハケ目調整の後、ナデ調整を行っている。下半は被熱により赤褐色に変色、上半はススが附着している。内面は斜め方向のヘラ削りで、煮焦げが付いている。

10はカマドの北側より出土した甕で口縁部を欠く。器面は外面が不定方向の粗いハケ目調整で、底部は被熱により器面荒く、他はスス附着。内面は斜め方向のヘラ削りで仕上げている。



第46図 原田遺跡10号住居跡出土遺物実測図

11号住居跡

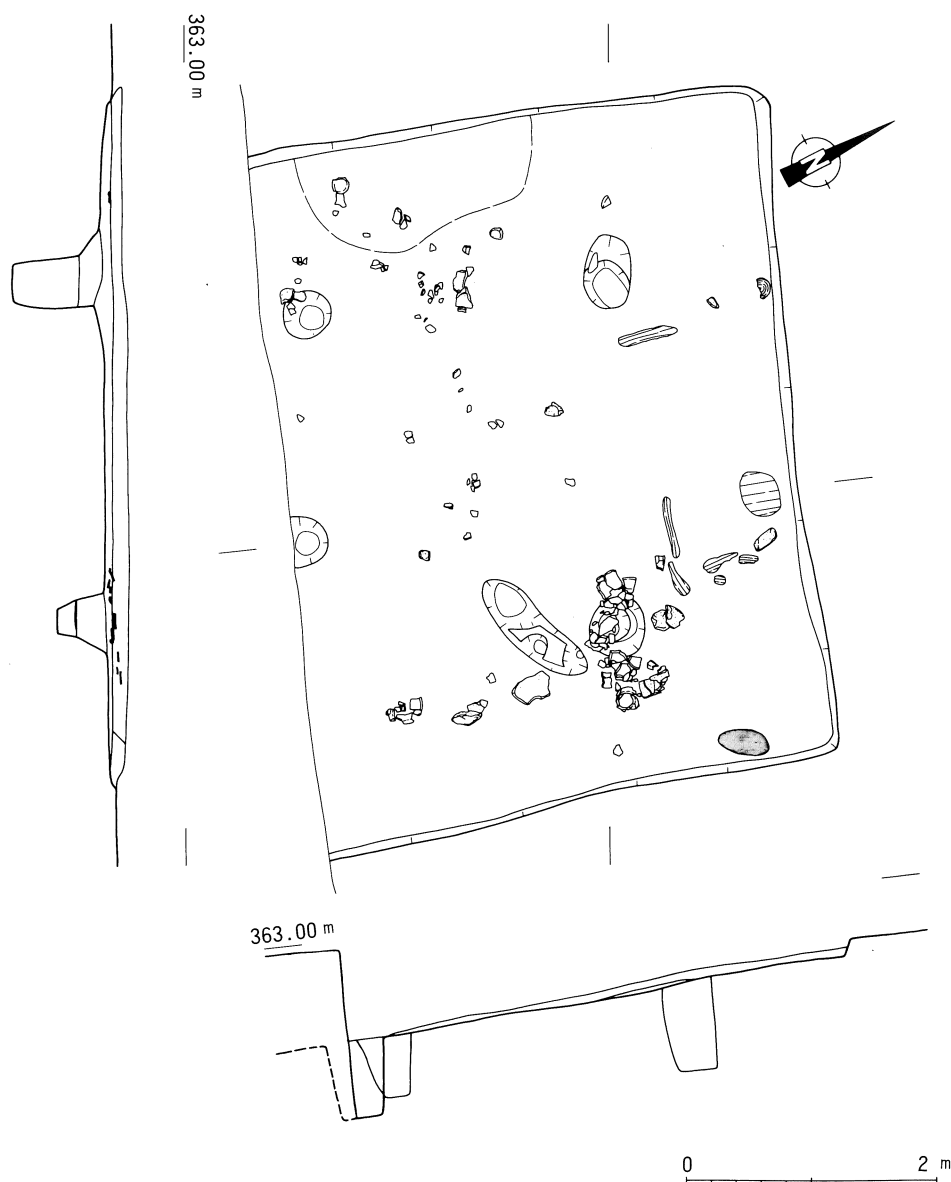
10号住居跡の南西30m、2号住居跡の北西26mに位置する。今回の調査区内では1軒単独で確認されたが、地形的にみるとさらに南側に集落跡は展開すると思われ、11号住居跡も一群を構成する可能性が高い。平面形は方形を呈していると考えられるが、南壁を含む約4分の1が調査対象区外になるため、全容は不明である。東西5.5m、南北4 + α m、検出面から床までの深さは約10cmを測り、西壁にカマドを付設している。主軸方位はN-67°-Wを示す。主柱穴は4本であると考えるが、調査区内では3本を確認した。主柱穴間は2.5~2.6mで、径40~50cm、深さ40~60cmを測る。

4本柱

床面はほぼ全域で厚さ5cm前後の貼床が認められた。褐色の粘質土を使用し、堅固に仕上げている。

カマド

カマド 西壁のほぼ中央付近に位置する。壁とは接していない。残りは悪く、燃烧室の床だけが残存している。



第47図 原田遺跡11号住居跡実測図

カマド基盤床 幅50cm前後、長さ70cm、深さ5cm程を掘り下げ暗褐色の粘質土で貼床を行っている。

燃烧室 床面に径20cm程度の焼土層が残っているだけである。他の施設は存在しない。

出土遺物 (第49図) 遺物は、カマド周辺から須恵器の坏や甕の破片、東側のコーナーから中央寄りにかけて甕や甕の口縁部が出土した。住居跡の残りはさほど良くなかったが、遺物は比較的残っていた。

出土遺物

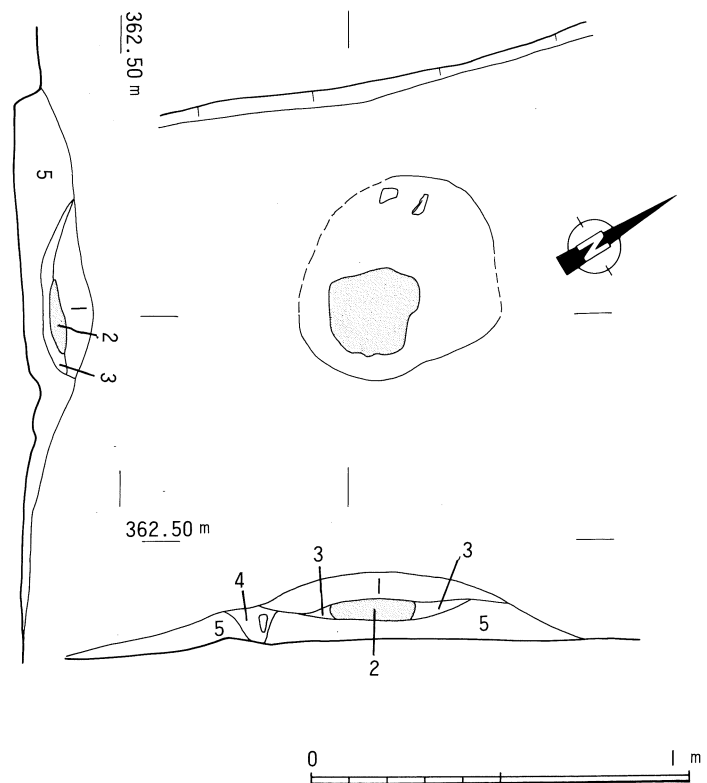
1～3は須恵器の坏で、カマドの両脇から出土した。1は全体の4分の1が残り、口径13.4cm、器高3.9cm。2はほぼ完形で、口径14.8cm、器高4.0cm。3は全体の2分の1が残り、口径15.4cm、器高4.7cmである。器面は天井部がヘラ削りのほかは横方向のナデ調整で、2と3は内面に不定方向のナデがみられる。2の天井部にはヘラ記号らしき痕跡がみられる。胎土は1に角閃石、2に長石、3に角閃石が目立つ。色調は灰色から青灰色を呈す。

4～6は甕の口縁部から胴部の一部で、4と6が東側のコーナー付近で、5が東壁寄りの中央付近で出土した。口径は4が13.8cm、5が14.4cm、6が18.6cmである。器面は口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部外面は4と5が不定方向のハケ目調整、胴部内面は不定方向のヘラ削りを行っている。4の内面には煮焦げの痕跡がみられ、外面は被熱により、赤褐色に変色している。6の外面にはススの付着がみられる。

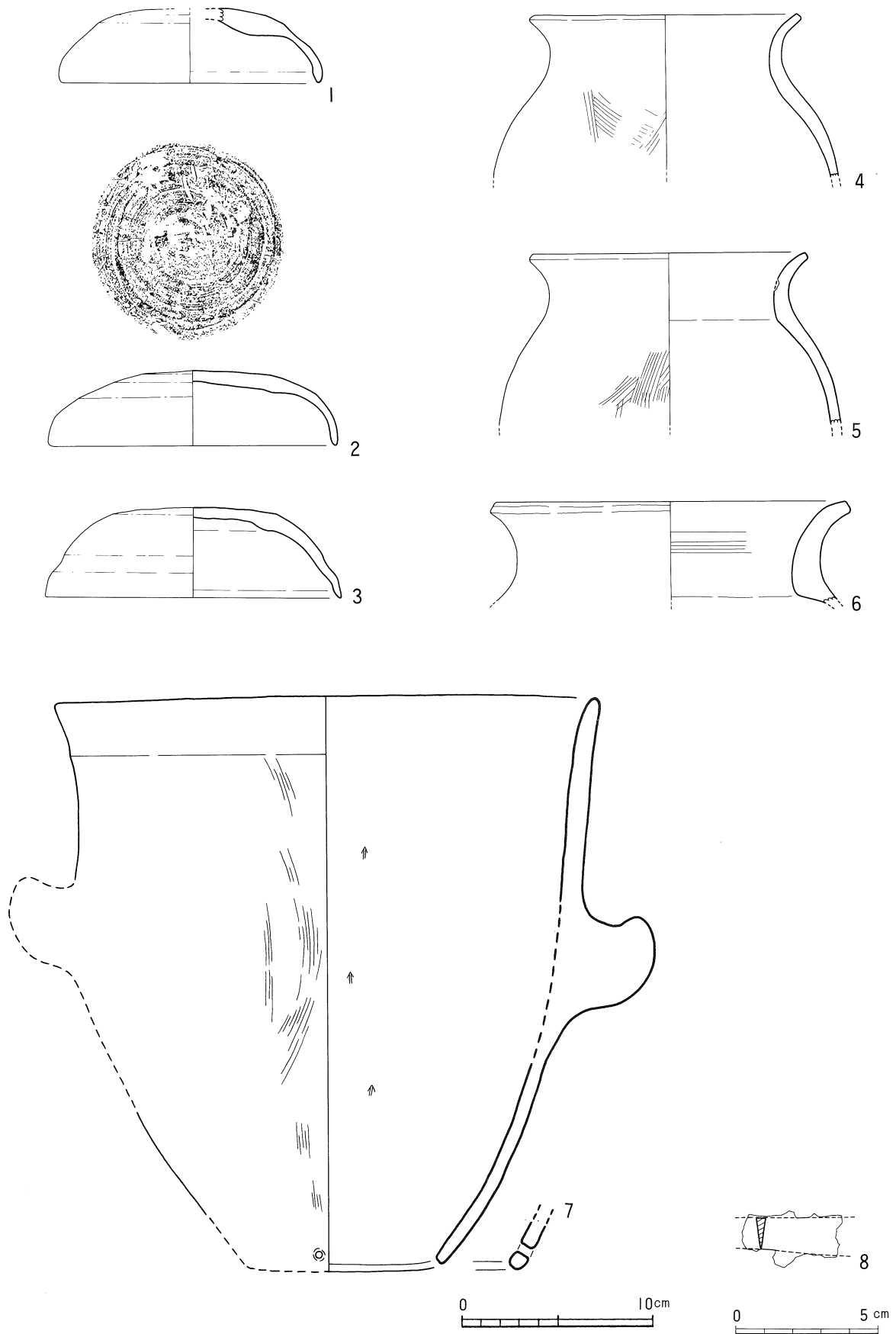
7は4・6と同位置から出土した甕で、胴部の一部を欠く。口径28.5cm、器高30cmである。器面は口縁内外面とも横方向のナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ目のあと一部ナデ調整、胴部内面は縦方向のヘラ削りを行っている。底部には2個の穿孔が施されている。胎土に白色砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈している。

8は刀子の刃部の一部で、柱穴内から出土した。背厚さ4mmを測る。

番号	色調	状態	特徴
1層	茶褐色	埋土	遺物・焼土含む
2層	赤褐色	燃烧部床	
3層	黄褐色	燃烧部床	炭・焼土多量に含む
4層	暗黒褐色	袖石抜取埋土	
5層	暗褐色	カマド基盤層	粘質



第48図 原田遺跡11号住居跡カマド実測図



第49图 原田遗迹11号住居跡出土遺物実測図

住居跡間接合遺物

原田遺跡では合計11軒の住居跡が確認されたが、いずれも重複することなく、整然と検出された。この各住居跡の覆土中から出土した土器片が、各々の遺構をこえて接合した事例が4点確認された。

1は4・5号住居跡出土の須恵器坏蓋である。全体の3分の2が残っており、大型破片は5号住居跡出土である。標高では5号住居跡が50cm程高く、住居跡間は約5m離れている。復元口径は13.4cm、器高3.9cmで、器面調整は天井部回転ヘラ削り、口縁から内面にかけては横方向のナデ仕上げである。天井部にヘラ記号が認められる。色調は青灰色を呈している。

4・5号住居跡出土

2は7・8号住居跡出土の須恵器坏蓋である。全体の2分の1が残っている。口縁の一部が8号住居跡出土である。標高では8号住居跡が約30cm高く、住居跡間は近接している。復元口径は16.7cm、器高3.9cmで、器面調整は天井部回転ヘラ削り、口縁から内面にかけては横方向のナデ仕上げである。色調は暗青灰色を呈している。焼成は堅固である。

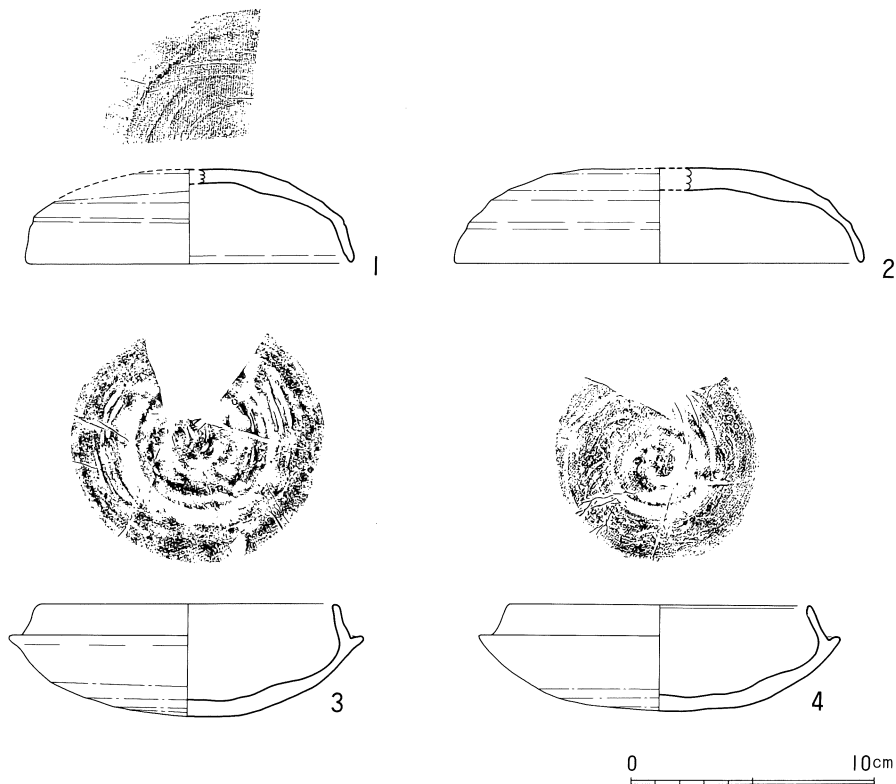
7・8号住居跡出土

3は8・9・10号住居跡出土の須恵器坏身である。全体の3分の2が残り、その大半を8号住居跡出土の破片が占める。標高は8・9号住居跡がほぼ同じで、10号住居跡が約60cm低い。住居跡間は8号住居跡と9・10号住居跡は約3m離れている。口径は12.3cm、器高4.4cmで、器面調整は底部が回転ヘラ削り、内面底部が不定方向のナデのほかは横方向のナデ仕上げである。内面底部に当て具痕が認められる。色調は淡青灰色を呈している。

8・9・10号住居跡出土

4は2と同様7・8号住居跡出土の須恵器坏身で、全体の4分の3が残っている。口径12.3cm、器高4.7cmで、器面調整は底部が回転ヘラ削り、口縁から内面にかけては横方向のナデ調整を行っている。内面に当て具痕が認められる。

7・8号住居跡出土

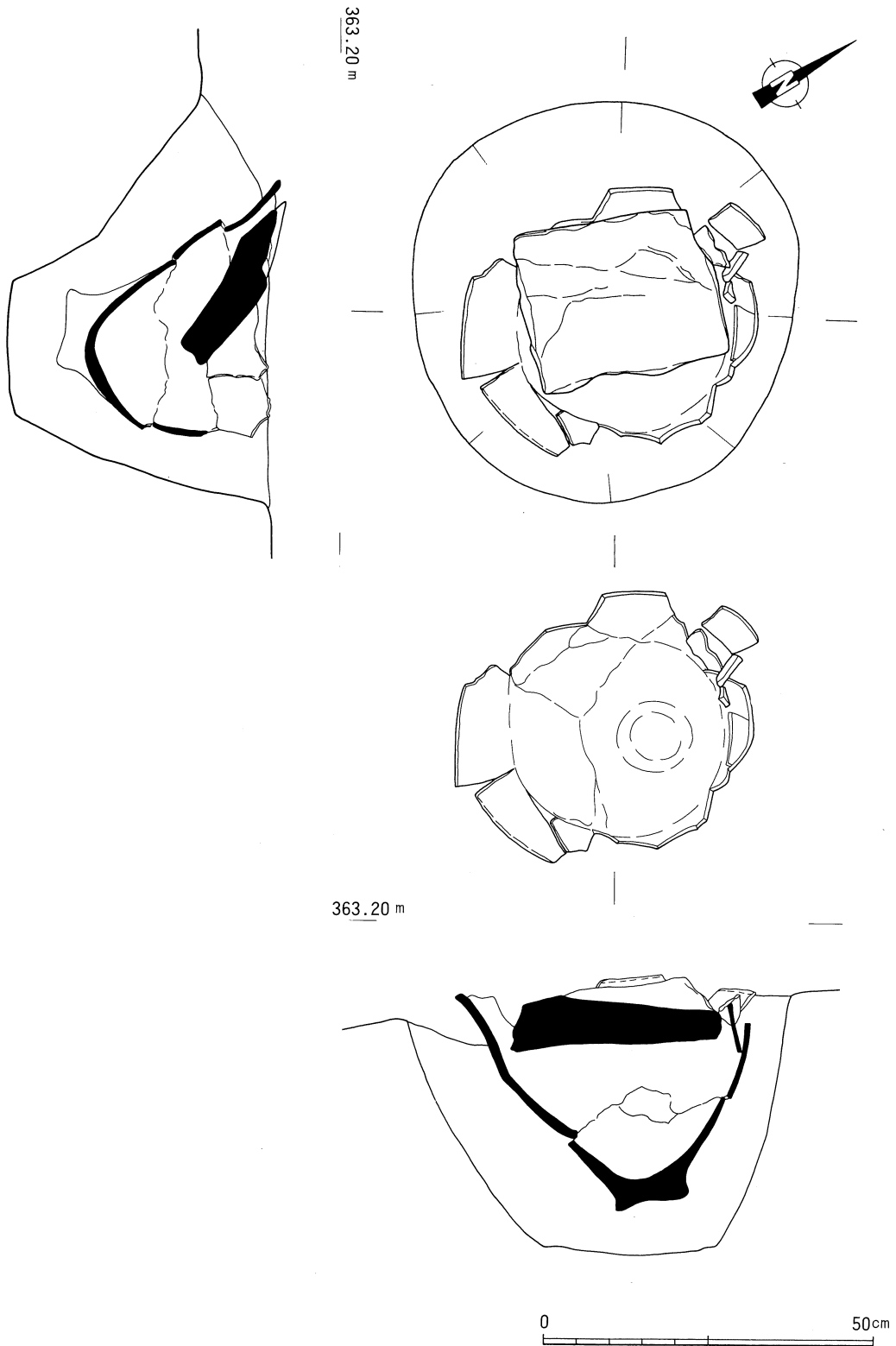


第50図 原田遺跡住居跡間接合遺物実測図

埋甕遺構

埋甕遺構

調査区の南東端から1基単独で検出された。径約60cm、検出面からの深さ約40cmの土坑内に縄文時代晩期の甕が埋置されていた。厚さ7cm程の安山岩板石を蓋石として使用していた。周辺からは柱穴3個が確認されたが、いずれも出土遺物はなく、柱穴との関係は不明である。

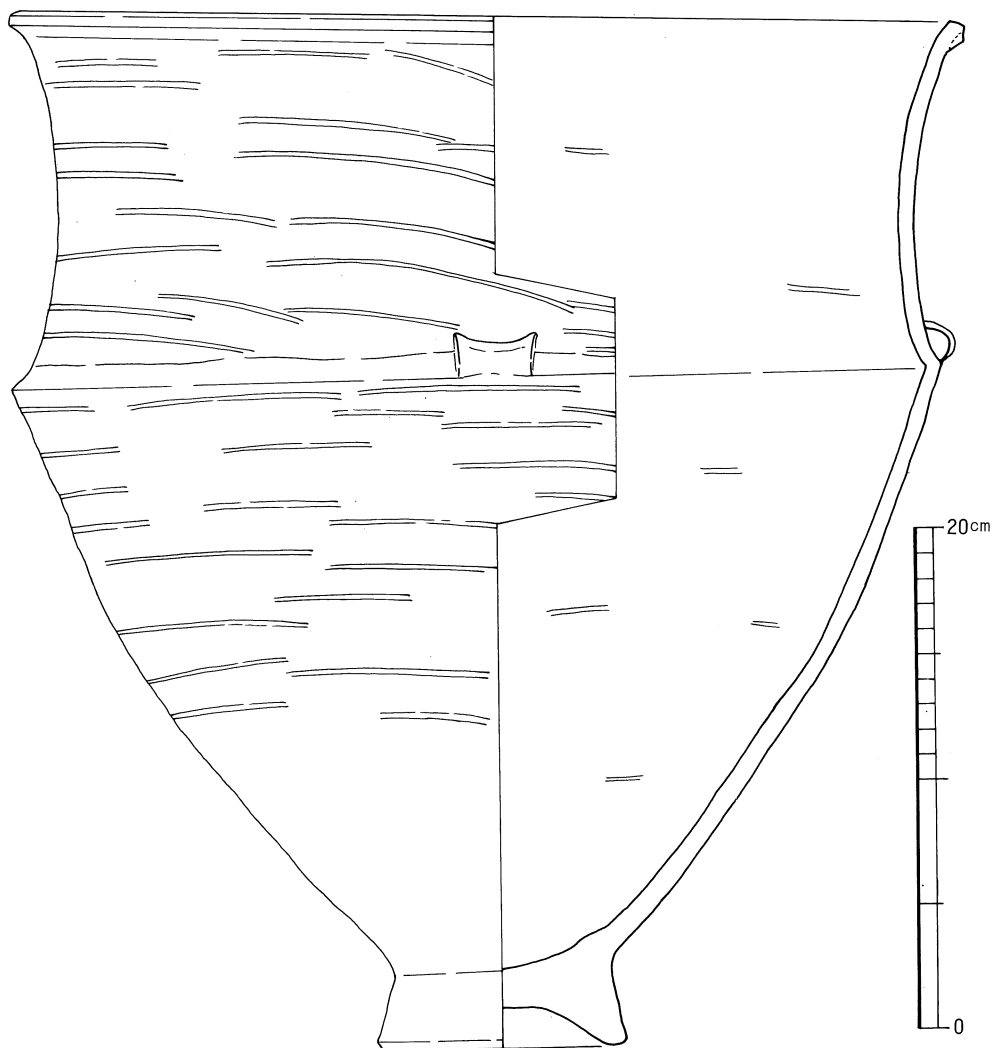


第51図 原田遺跡埋甕遺構実測図

埋甕（第52図） 埋設されていたため、ほとんど完形で出土した。器形は口縁部が外反し、外側端部に突帯を一条巡らしている。胴部の屈曲は内外面に稜を生じ、この稜の上位である肩部は、強く指ナデされている。また、この肩部には1ヶ所、リボン状突起が付く。底部は厚く、上げ底になる。器面調整は、外面が上位4分の3、内面は全面が横方向の条痕で、さらに、外面は粗いヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキで仕上げている。また、外面の下位4分の1はナデ仕上げである。色調は内外面とも茶褐色で、胎土に角閃石と斜長石を含む。

時期は、口縁部に一条の無刻目突帯を巡らせることや、底部の形態が、このタイプの土器がほぼ単純な状況で出土した大野町夏足原遺跡（O地区）のものと類似し、上菅生B式土器と理解でき縄文時代晩期後葉に位置付けられる。

土坑 原田遺跡では7基の土坑が検出された。遺物を含んでいる土坑は1基だけで他の土坑からは遺物の検出はない。土坑は調査区のほぼ中央に集中している。（坂本）



第52図 原田遺跡埋甕遺構使用土器実測図

1号土坑

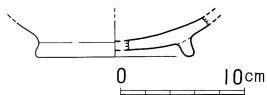
1号土坑（第53・54図） 3号住居跡の西壁中央部分に位置し、住居跡を切っている。平面形は円形を呈し、径1.7m前後、床面も円形で径1.4m前後である。深さは約50cmを測る。長軸方位はN-31°-Eを示す。土坑内からは、床面から約10cm程浮いた状態で、高台付きの碗の破片が出土した。貼付け高台で、色調は淡黄褐色を呈している。時期は8世紀代と思われる。

2号土坑

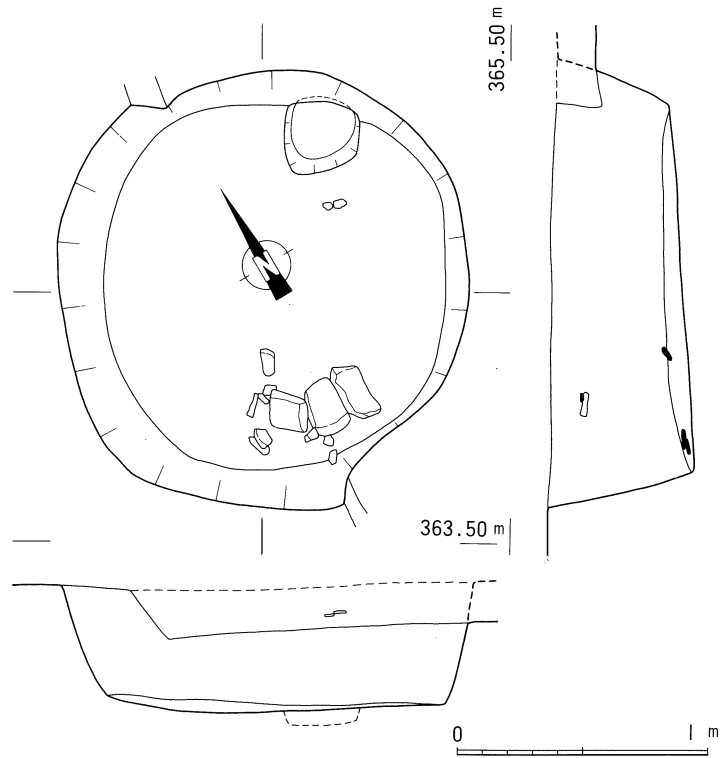
2号土坑（第55図） 3号住居跡の北東のコーナー付近に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、幅は検出面で118×62cm、床面で93×50cm、検出面からの深さは15cmを測る。長軸方向はN-59°-Wを示す。出土遺物はない。

3号土坑

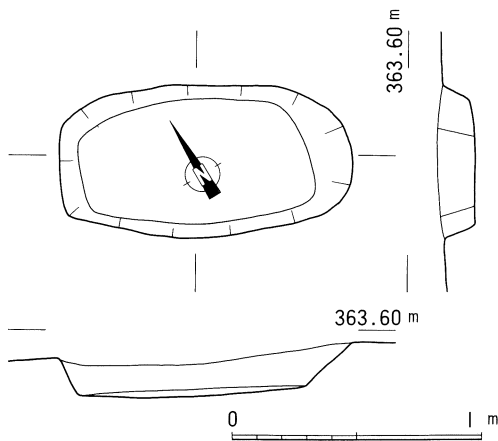
3号土坑（第56図） 6号住居跡内の西壁中央付近に位置する。平面形は不整円形で、幅は120×110cm、床面は不整の長方形で87×31cm、検出面からの深さは35cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面は緩傾斜する。長軸方向はN-77°-Eを示す。埋土は黄褐色土で6号住居跡の埋土を切って構築されている。遺物は出土しなかった。



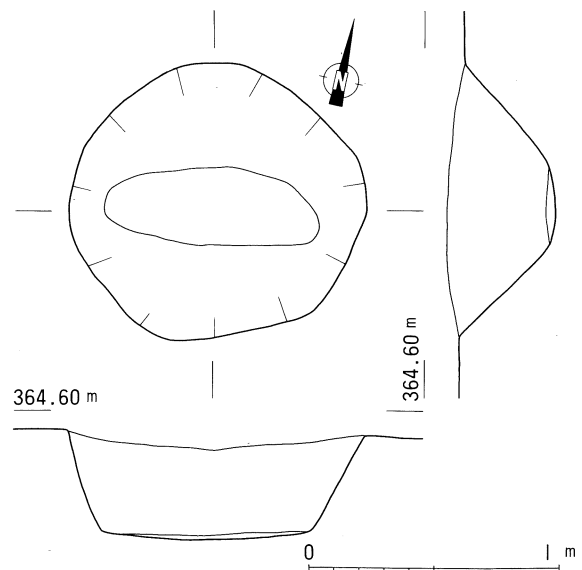
第53図 原田遺跡1号土坑出土遺物実測図



第54図 原田遺跡1号土坑実測図



第55図 原田遺跡2号土坑実測図



第56図 原田遺跡3号土坑実測図

4号土坑（第57図） 8号住居跡の北側コーナーに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、幅は検出面で127×67cm、床面で110×50cm、検出面での深さは12cmを測る。床面はやや船底状を呈し、壁面は緩傾斜する。長軸方向はN-20°-Eを示す。遺物の出土はない。

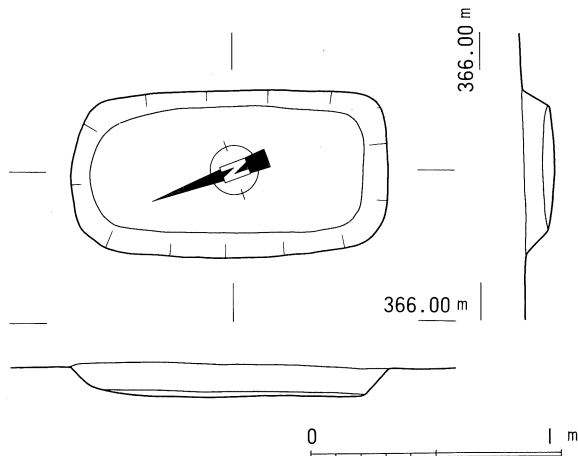
4号土坑

5号土坑（第58図） 4号土坑と同様に、8号住居跡内の中央やや南よりに位置する。平面形は楕円形を呈し、幅は検出面中央で167×109cm、床面で138×80cm、検出面からの深さは40cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを示す。土坑の上面は、長さ10~50cm程の板石を多量に使用し土坑表面を覆っている様子が伺える。何等かの施設と考えられるが、土坑内からは遺物等の出土はなく、詳細は不明である。

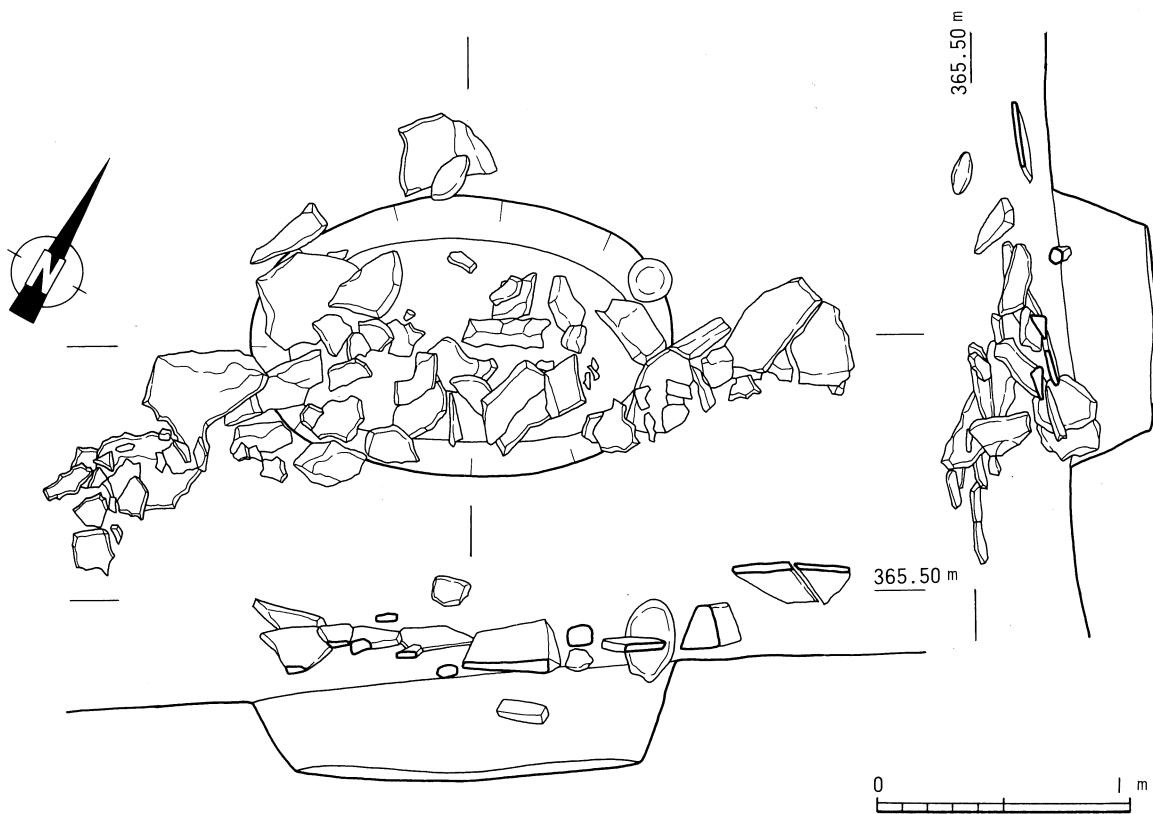
5号土坑

6号土坑（第59図） 9号住居跡の北5mに位置する。平面形は不整形を呈し、幅は検出面中央で159×134cm、床面は楕円形で151×99cm、検出面からの深さは中央で17cmを測る。長軸方向はN-1°-Wを示す。床面は緩傾斜しており、南北にそれぞれ柱穴状の掘り込みが認められた。土坑内からは北側部分で長さ50cm前後の板石3枚と、径20cm前後の角礫数個が出土した。何等かの意味を持つ施設と考えられるが、遺物等の出土はなく、詳細は不明である。

6号土坑



第57図 原田遺跡4号土坑実測図

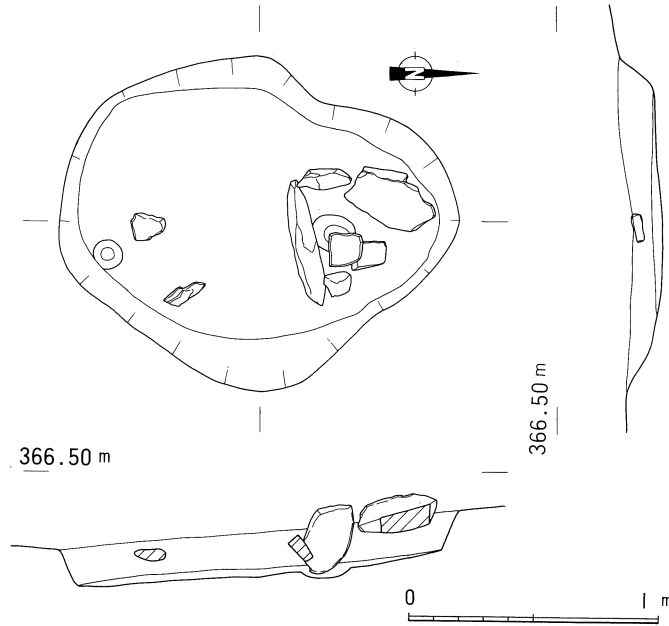


第58図 原田遺跡5号土坑実測図

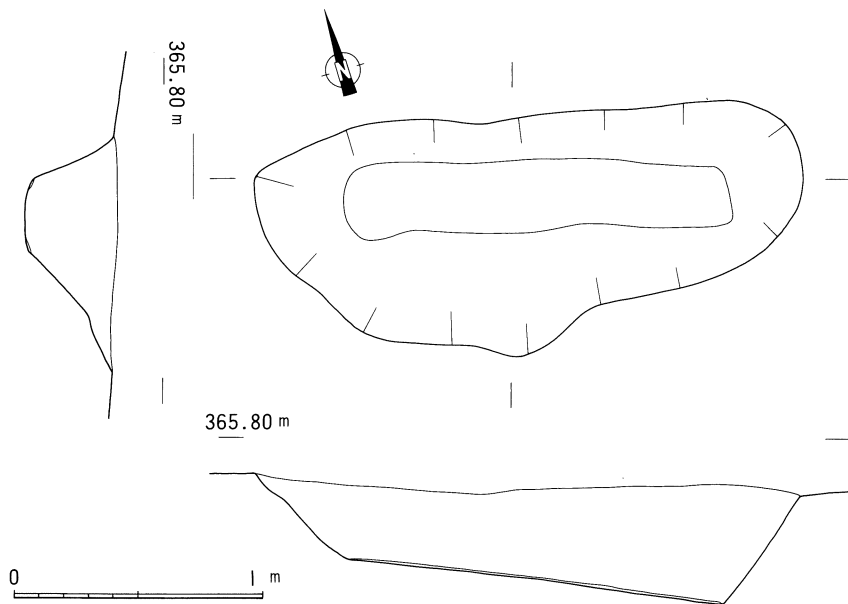
埋土の堆積状況は、黒褐色土の一括堆積である。埋土中には多量の灰、焼土を含む。

7号土坑

7号土坑（第60図） 8号住居跡と9号住居跡の間に位置する。標高は365.5m前後である。平面形はやや不整形の隅丸長方形を呈し、幅は検出面で220×79cm、床面は長方形で北西に向かって緩やかに上昇しており、155×30cm、検出面からの深さは中央で35cmを測る。長軸方向はN-74°-Wを示す。土坑内埋土は2層に分層でき、1層は上面に乗っている層で厚さ10cmほどである。暗茶褐色を呈している。若干の遺物を含むが、流れ込み埋土と考える。2層は土坑の全面に堆積する埋土で、茶褐色を呈している。遺物は含まない。



第59図 原田遺跡6号土坑実測図



第60図 原田遺跡7号土坑実測図

包含層

包含層は調査区北端で確認された。山裾が途切れた平坦地に、最も深い場所で約40cm程形成していた。出土遺物はさほど多くないが、旧石器時代の石器、縄文時代晩期の浅鉢や壺、平安時代の石帯等が出土した。

出土遺物 (第61・62・63図)

第61図は縄文時代の土器で、数量的には多くないが、壺形土器・浅鉢形土器・深鉢形土器などの器種が揃っている。

1～4は壺形土器と考える。1～3は破片は小さいが、口縁部の形態から判断する。器面調整は1・3が内外面横ナデで、2は外面は横ナデ、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げている。4は頸部から胴部の資料であるが、外面は丹塗り研磨、内面は横方向のケズリ状の器面調整である。色調はいずれも茶褐色であるが、2の内面は黒褐色である。胎土には角閃石・斜長石を含み、4は砂粒が目立つ。器壁や残された部分から推測すると、3は大型の壺形土器の可能性が強い。

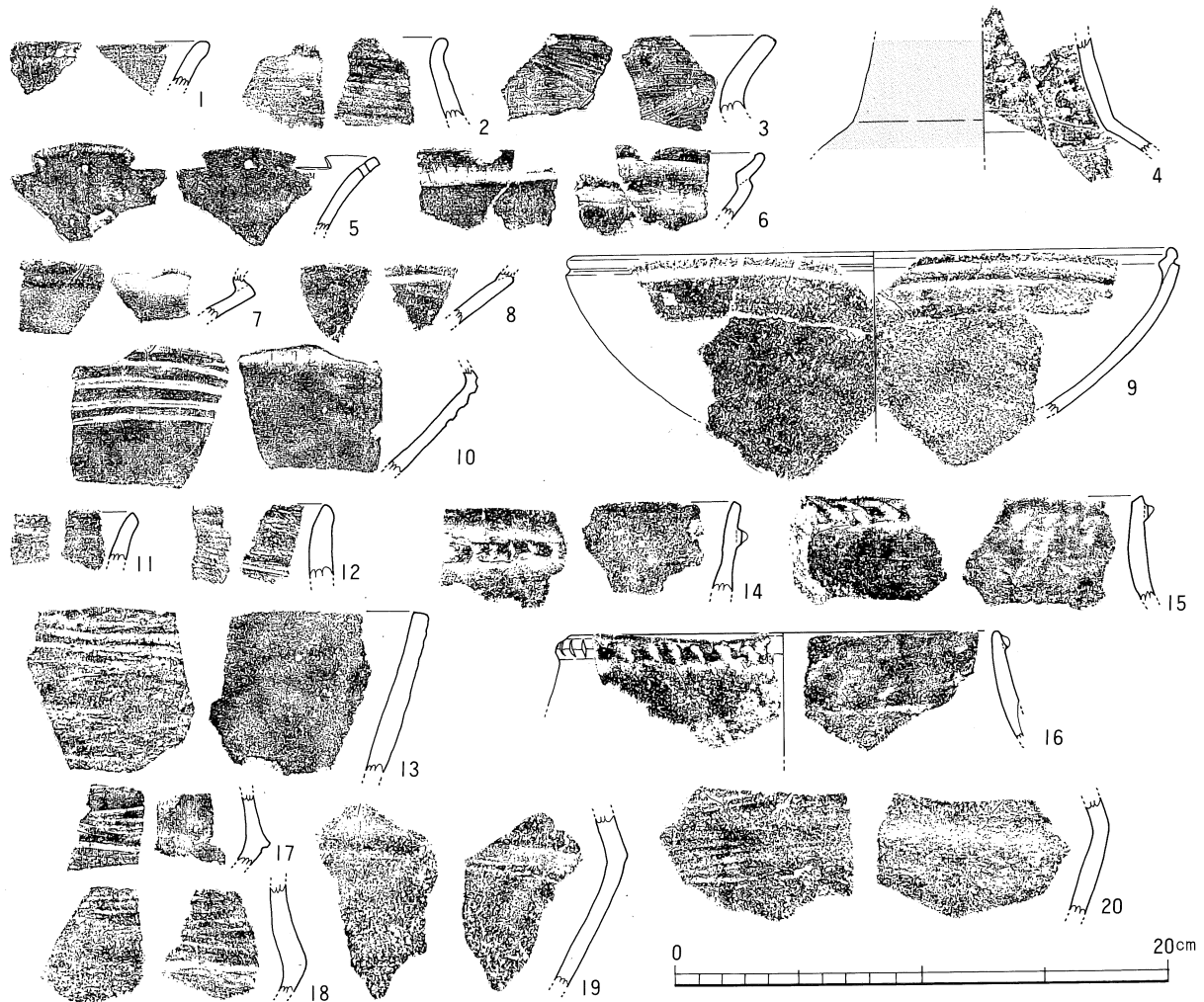
5～10は浅鉢形土器である。5は口縁部にヒレ状突起のある浅鉢で、その部分には焼成前の穿孔が認められる。6は口縁部が小さく屈曲する。口縁内面端部はわずかに肥厚し、内湾する。外面にはススが付着している。7～10は屈曲する肩部の資料である。10の外面には4条の平行沈線が認められる。この沈線は幅が4mmあり、中央部が盛り上がっている。9は口縁部が短く

包含層

出土遺物

壺形土器

浅鉢形土器



第61図 原田遺跡包含層出土縄文時代晩期土器実測図

内面端部がわずかに肥厚する。浅鉢形土器はいずれも内外面ヘラミガキで仕上げられている。色調はいずれも濃い茶褐色で、胎土に角閃石・斜長石を含む。

深鉢形土器

11～20は深鉢形土器である。深鉢は口縁部の刻目突帯文の有無によりふたつに分類される。

11～13は口縁部に突帯が無く外反するタイプで、器面調整は11が内外面ナデ、12は内外面条痕、13は外面条痕、内面ナデ仕上げである。色調は11・13が茶褐色で、12は黒褐色である。

14～16は口縁部に刻目突帯が一条巡るタイプである。器面調整は3点とも内外面ナデ調整で、15の内面には指圧痕が残る。色調はいずれも茶褐色であるが、14の外面は明茶褐色でススが付着している。

17～20は屈曲する肩部の資料である。17の胴部は稜を生じており、その下位に沈線が一条巡る。18～20の肩部は緩く屈曲し、器面調整は18が内外面条痕のあと横ナデ、19が内外面横ナデ、20が外面が条痕のあと横ナデ、内面が横ナデで仕上げられている。また20の外面にはススが付着している。

深鉢形土器の胎土には、いずれも角閃石・斜長石を含む。

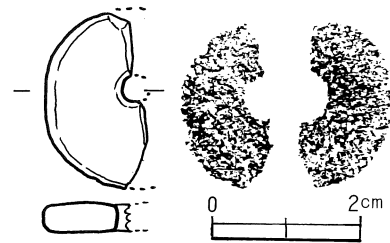
**縄文時代
晩期末**

原田遺跡包含層出土の縄文土器は、刻目突帯文土器や壺形土器の存在から、縄文時代晩期末に位置付けられる。特徴としては、刻目突帯文土器に壺形土器が伴うものの、浅鉢形土器の口縁部の形態は、北部九州の同時期の土器と異なり、「く」の字状に屈曲はしない。また、6・9の浅鉢形土器には、縄文時代晩期前半に見られる口縁部の立ち上がりの名残りが認められる。さらに、5のヒレ状突起も古い様相である。

包含層出土の縄文土器を一時期のセットと考えるならば、壺形土器と刻目突帯文土器の基本的な組成に、古い様相を残した浅鉢形土器が伴うと理解することができ、玖珠盆地の地域性ともとらえることができる。

紡錘車

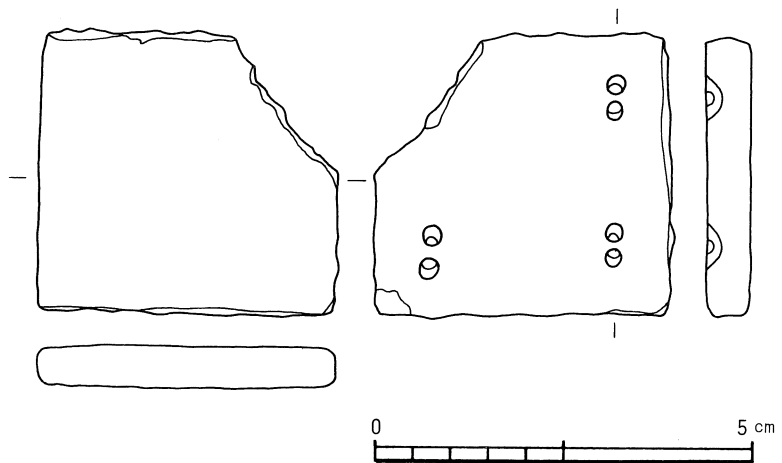
第62図は土器片を利用した紡錘車である。直径は2.5cm、厚さ4mmの土器片の周辺を研磨加工し、中央部に径4mmの孔を穿っている。色調は明褐色である。



第62図 原田遺跡包含層出土紡錘車実測図

石帯

第63図は蛇紋岩を使用した石帯である。色調は黄白色で表面に漆と思われる塗料を塗布している。縦幅3.8cm、横幅3.95cm、厚さ0.6cmを測る。形態は巡方である。表面の塗料は光沢を帯び、濃い緑黄色を呈しているが、そのほとんどが剥げ落ちていて、残りは悪い。裏面は潜り穴が縦辺に沿って、上下・左右4ヶ所に穿たれている。石帯は規格性を帯びており、時期は9世紀前半に比定できる。同地区からは同時期の資料は他に出土していない。(坂本)



第63図 原田遺跡包含層出土石帯実測図

原田遺跡出土石器

当遺跡では、包含層・表土層・住居跡覆土内から旧石器～縄文時代の石器が多数出土した。遺跡内には、同時期の遺構の検出例は無く、一括遺物として扱っているが、この中の残りの良いものを図示する。

旧石器時代石器（第64図）

1～4は、いずれも流紋岩を素材としたナイフ形石器である。1・2は、共に縦長剥片を利用し、二側辺においてブランディング加工が施されている。ブランディングは、主にポジ面より行われているが、若干ネガ面からの対向剥離が認められる。刃部は打面側である左上に設定されている。3は、横長剥片を素材としたもので、これも打面側に刃部を作出している。尚、1～3は2形態Aタイプに属するものと思われる。4は、横長剥片を利用したものである。中位より大きく折断を受けており、全体復元は困難であるが、2形態に属するものと思われる。ブランディング加工は、残存部位を見る限り、打面に対して行われ、ポジ面からのみ一定方向に施されている。また、剥離面端部を刃部とするもので、1～3とは製作上の性格を異にする。5は、流紋岩を素材とした剥片である。断面形は台形を呈する。6は、不純物を多く含む漆黒色の黒曜石製品である。一側辺に対し、密な調整剥離が認められる。また、自然面を多く残す。7は、流紋岩を素材とした彫器である。縦長剥片の打面及び剥離面端部を折断したあと、加工を行っている。

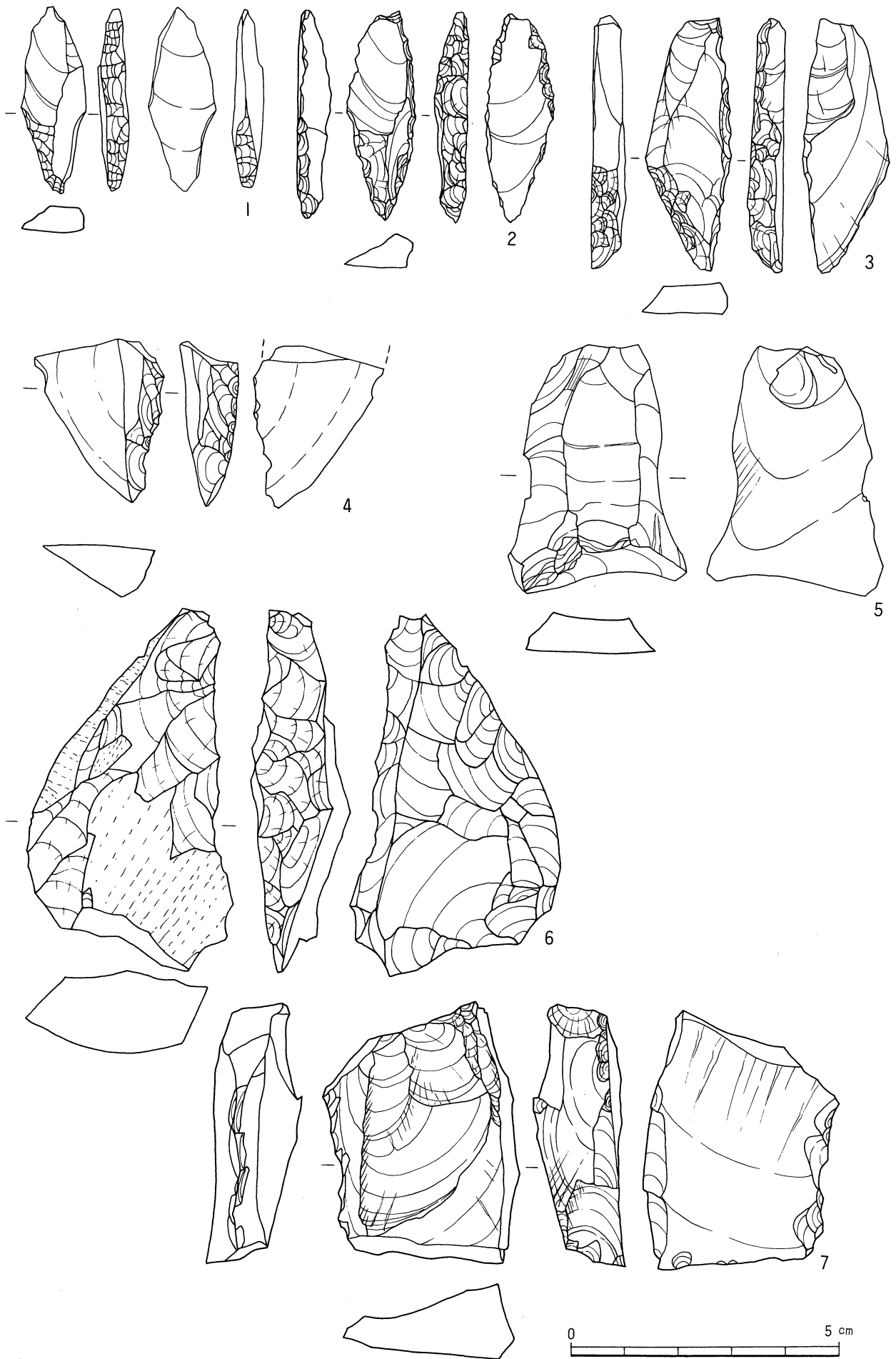
旧石器

縄文時代石器（第65・66・67図）

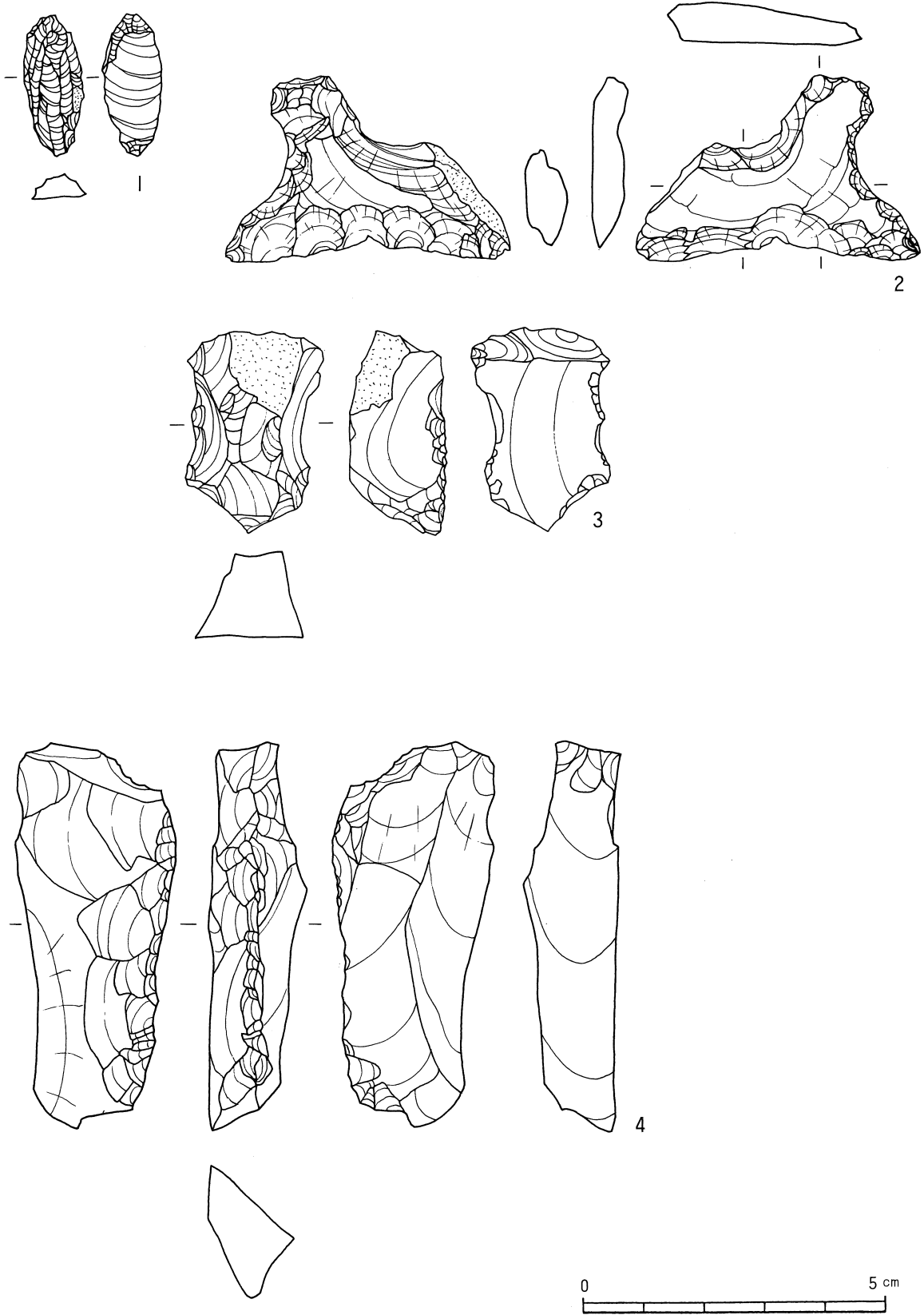
第65図 1は、漆黒色黒曜石を素材とする楔形石器である。2は、金山産のサヌカイトを石材とする石匙で、右端部に自然面を残す。3は、石核である。腰岳産黒曜石を素材とする。4は、姫島産黒曜石を素材とする二次加工剥片である。ポジ面はヒンジーフラクチャー気味に端部がL字状を呈する。

縄文石器

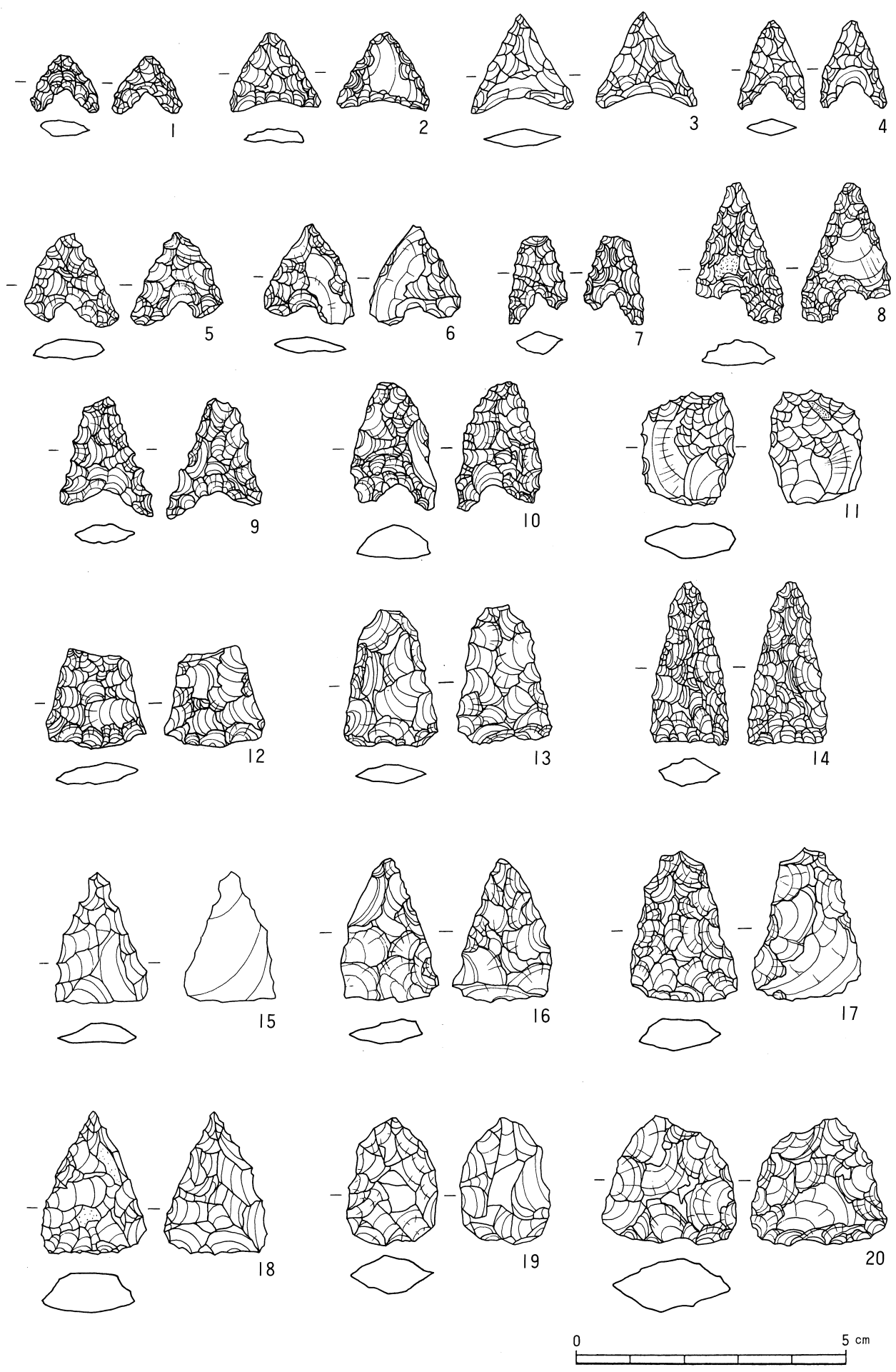
第66図 1～20は打製石鏃及び、その未製品である。1は、姫島産黒曜石を素材とし、凹基式の基部を有する。2・3は、正三角形の形態を有し、やや内湾する基部を持つ。石材は2が姫島産黒曜石、3が金山産サヌカイトを用いている。4は、二等辺三角形の形態を呈し、深い逆V字状の挟りを持つ。姫島産ガラス質安山岩を素材に用いる。5・6は、共に両脚端部を欠損し、姫島産黒曜石を石材としている。6は比較的薄い剥片鏃で、ネガ・ポジ両面に主要剥離面を残す。7は、姫島産黒曜石を石材に用い、基部は凹基式である。先端部と片脚部を欠損している。8は、二等辺三角形の形態を呈し、片脚部を欠いているが鏃形鏃である。主要剥離面を残す。9は、姫島産黒曜石を素材とし、二等辺三角形の形態を呈する。10は、姫島産黒曜石に素材を求めたもので、細い脚部を呈し、先端部は丸い。11は、石鏃未製品で、腰岳産黒曜石に素材を求めている。12は、石鏃未製品で、姫島産黒曜石を素材とする。製作途中に誤って鏃身部中位より折断し、作業を放棄したと考えられる。13は、平基式で二等辺三角形の形態を呈する。金山産サヌカイトを素材としているが、先端部を欠いている。14は、チャート製で、縦に細長い鏃である。基部は平基式である。15は、金山産サヌカイトを素材とする剥片鏃で、ポジ面に対し調整剥離は認められない。16は鏃身部下部を欠損し、基部の形態は不明である。サヌカイトを用いる。17は、石鏃未製品で、ネガ面に主要剥離面を残す。ここまでの製作段階では凹基無茎鏃で、金山産サヌカイトを素材とし、若干の自然面を残す。18は、腰岳産黒曜石を素材とする平基無茎鏃で、鋭い先端部を有する。鏃身部はやや厚みを持つ。19は、石鏃未製品である。姫島産黒曜石を素材としている。20は、金山産サヌカイトを素材とする石鏃未製品で、ポジ面に主要剥離面を残す。打面側を基部とし、剥離面端部を先端に使用する意図が読み取れる。



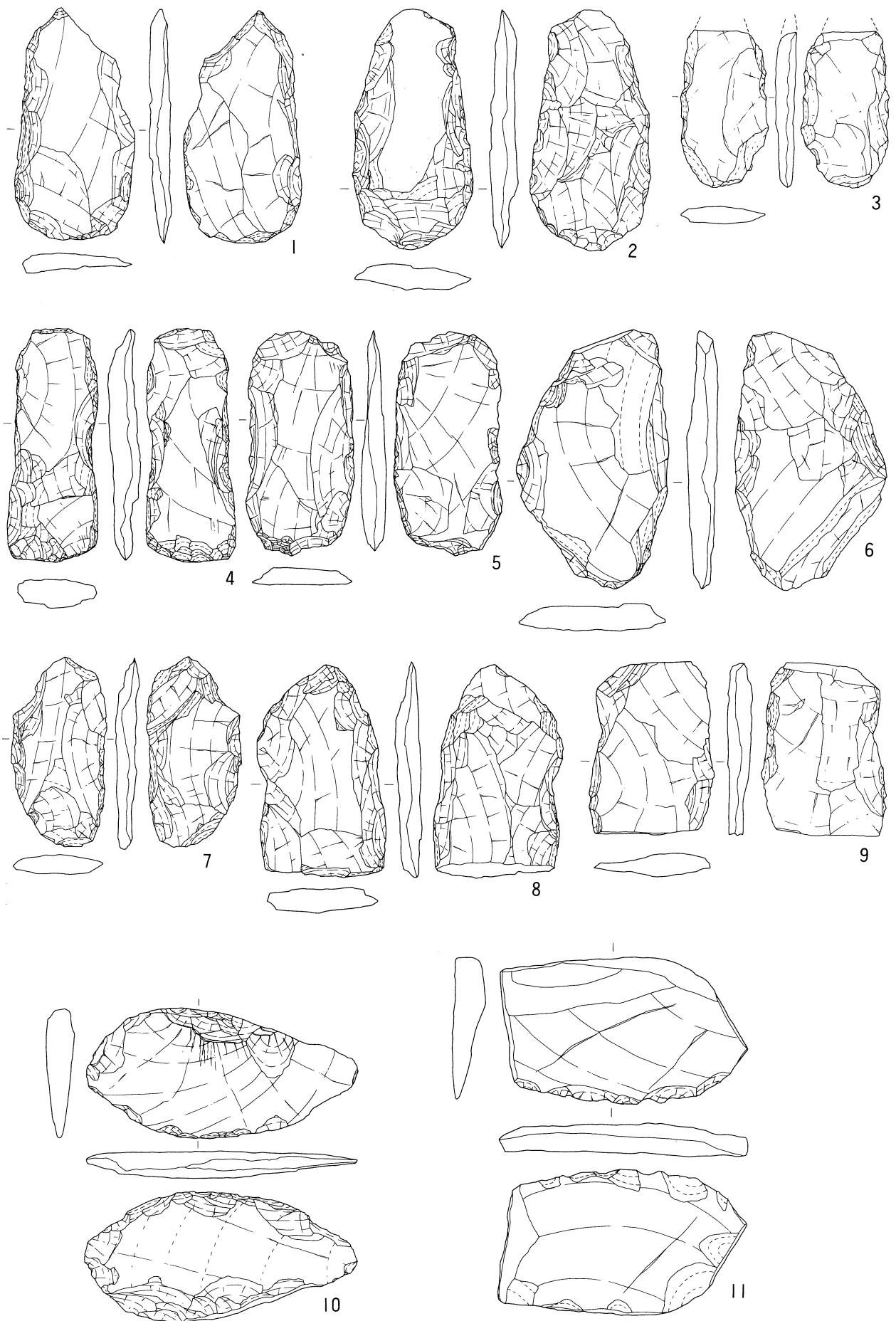
第64图 原田遺跡出土旧石器時代石器実測図



第65図 原田遺跡出土縄文時代石器実測図(1)



第66図 原田遺跡出土縄文時代石器実測図(2)



第67図 原田遺跡出土縄文時代石器実測図(3)

第67図 1～9は、全て輝石安山岩を石材とする扁平打製石斧である。2～5・7は完形品で、特に2は基部、刃部とも著しく摩滅している。7は刃部幅が3cm前後で、比較的小型である。右側面は直線的であるのに対して、東側面は外湾している。10・11は横刃形石器と思われる。輝石安山岩の扁平な素材を使用し、周縁を調整加工し、半月状の刃部を形成している。

(単位cm、g)

図版No.	出土地点	石 材	長さ	最大幅	厚さ	重さ	種 類
64- 1	4号住居跡	流 紋 岩	3.4	1.2	0.5	2.0	ナイフ形石器
64- 2	4号住居跡	流 紋 岩	3.85	1.25	0.6	2.5	ナイフ形石器
64- 3	11号住居跡	流 紋 岩	4.7	1.55	0.55	4.2	ナイフ形石器
64- 4	4号住居跡	流 紋 岩	3.1	2.5	1.0	5.4	ナイフ形石器
64- 5	10号住居跡	流 紋 岩	4.7	3.4	0.75	13.9	剥片
64- 6	表 採	大山川流域黒曜石?	6.7	4.0	1.7	29.3	剥片
64- 7	包含層	流 紋 岩	4.9	3.5	1.0	27.2	彫器
65- 1	5号住居跡	腰岳産黒曜石	2.3	0.95	0.4	0.9	楔形石器
65- 2	5号住居跡	金山産サヌカイト	3.0	4.7	0.6	7.3	石匙
65- 3	包含層	腰岳産黒曜石	3.2	1.9	1.6	12.7	石核
65- 4	包含層	姫島産黒曜石	6.4	2.6	1.6	21.5	剥片
66- 1	溝1	姫島産黒曜石	1.05	1.25	0.3	0.1	石鏃
66- 2	5号住居跡	姫島産黒曜石	1.5	1.7	0.25	0.4	石鏃
66- 3	3号住居跡	金山産サヌカイト	1.7	2.1	0.3	0.5	石鏃
66- 4	4号住居跡	ガラス質安山岩	1.7	1.3	0.3	0.4	石鏃
66- 5	2号住居跡	姫島産黒曜石	1.75	1.75	0.3	0.7	石鏃
66- 6	包含層	姫島産黒曜石	1.35	1.7	0.3	0.6	石鏃
66- 7	8号住居跡	姫島産黒曜石	1.65	1.1	0.4	0.4	石鏃
66- 8	包含層	腰岳産黒曜石	2.55	1.6	0.45	1.1	石鏃
66- 9	包含層	姫島産黒曜石	2.2	1.75	0.4	0.9	石鏃
66-10	包含層	姫島産黒曜石	2.35	1.6	0.6	1.3	石鏃
66-11	包含層	腰岳産黒曜石	2.1	1.7	0.6	2.2	石鏃未製品
66-12	10号住居跡	姫島産黒曜石	1.85	1.85	0.4	1.1	石鏃未製品
66-13	包含層	金山産サヌカイト	2.6	1.75	0.3	1.5	石鏃
66-14	5号住居跡	チャート	3.0	1.45	0.5	2.2	石鏃
66-15	3号住居跡	金山産サヌカイト	2.4	1.7	0.35	1.3	石鏃
66-16	表 採	サヌカイト	2.6	1.85	0.5	2.0	石鏃
66-17	7号住居跡	金山産サヌカイト	2.8	2.0	0.6	2.7	石鏃未製品
66-18	包含層	腰岳産黒曜石	2.6	1.95	0.7	3.1	石鏃
66-19	表 採	姫島産黒曜石	2.3	1.6	0.7	2.2	石鏃未製品
66-20	2号住居跡	金山産サヌカイト	2.4	2.5	0.9	4.6	石鏃未製品
67- 1	2号住居跡	輝石安山岩	13.0	6.5	1.1	132.4	石斧
67- 2	7号住居跡	輝石安山岩	13.4	6.8	1.4	155.6	石斧
67- 3	表 採	輝石安山岩	8.8	5.0	1.0	71.9	石斧
67- 4	8号住居跡	輝石安山岩	13.0	5.0	1.6	140.5	石斧
67- 5	包含層	輝石安山岩	12.6	6.0	1.4	125.9	石斧
67- 6	表 採	輝石安山岩	14.5	7.7	1.8	236.4	石斧
67- 7	3号住居跡	輝石安山岩	10.5	5.4	1.0	76.2	石斧
67- 8	5号住居跡	輝石安山岩	12.0	7.2	1.3	168.0	石斧
67- 9	包含層	輝石安山岩	9.6	7.0	1.3	125.0	石斧
67-10	2号住居跡	輝石安山岩	7.3	15.2	1.5	236.4	横刃形石器
67-11	表 採	輝石安山岩	8.2	13.8	1.6	271.7	横刃形石器

第2表 原田遺跡出土石器計測表

小 結

原田遺跡は、玖珠盆地西部の玖珠川を望む舌状丘陵上に位置する。標高は約360mで、玖珠川がつくりだす沖積地との比高差は50m程である。丘陵は北から南に向かって緩やかに下降し、中央付近から先端部まではほぼ平坦な地形を形成している。遺跡は山林や畑地として利用されており、調査区は丘陵北側の緩斜面上に位置する。

今回の調査では、縄文時代晩期の埋甕遺構、縄文時代晩期～平安時代の遺物を含む包含層、古墳時代後期の住居跡等を確認している。また、表土層や遺構内埋土からは旧石器～弥生時代までの石器等が多数出土している。含包層からの出土遺物は縄文土器から9世紀前半の石帯にまで及ぶ。しかし原田遺跡の中心は古墳時代後期の住居跡と、それに伴う遺物であろう。

縄文時代の遺構は、埋甕遺構が調査区南東端から検出された。周囲はほぼ平坦で他の遺構の検出はないが、調査区外に展開する可能性もある。この遺構の時期は、甕の口縁部の形態から上菅生B式の範疇に属するものと思われる、縄文時代晩期後半に位置付けられる。埋甕遺構以外では、北西端の山際で包含層が確認された。丘陵上の一番高い地点で、この部分は平坦地となっている。出土遺物は前述したようにほとんど縄文時代晩期末の壺・浅鉢・深鉢形土器であるが、一点だけ9世紀前半の石帯が出土している。原田遺跡出土の縄文土器のセット関係としては、包含層出土ではあるが、刻目突帯文を有する深鉢形土器と壺形土器の組成に、古い様相を残した浅鉢形土器が伴うと考えられるのではないだろうか。他に、表土層や遺構内埋土から打製石斧や石鏃等が出土しており、縄文時代晩期頃の遺構が存在していた形跡がうかがえる。

玖珠盆地周辺の縄文時代晩期の遺跡としては小田遺跡群の存在があげられる。小田遺跡群は原田遺跡の南側の沖積地に展開する。縄文時代晩期の遺物は小田地区一帯でかなり表採できるが、特に西田遺跡では多数の資料が確認されている。西田遺跡では調査区内の各遺構から混在状態で、縄文後期～晩期の土器・石器が出土している。原田遺跡と同様に明確な遺構の存在はなく、後世に開発・削平されたものと思われる。

古墳時代の遺構では、11軒の住居跡がいずれも切り合うことなく整然と確認された。未完掘の1軒を除く10軒は、北壁或いは西壁にカマドを持ち、支柱穴は4本である。住居跡内での立て替えは2軒確認できる。住居跡間での時期差はほとんど生じていないと思われるが、8号住居跡から古い様相を示す須恵器灯蓋(第40図-1)が出土している。床面から幾分浮いた状態で1点だけ出土した。同住居跡内の他の遺物は6世紀後半代の範疇にはいると考えられ、先の1点は流れ込みと判断した。当住居跡の時期は、須恵器の特徴などからみて6世紀後半代に比定される。

4号住居跡は残りが非常によく、カマド施設のほとんどが存在していた。煙道部は住居跡外に張り出し、板石で上面を覆っていた。焚口には左右両袖石と天井石が残っており、燃焼室中央からは支脚として高坏が出土した。カマド周辺からは当時の生活そのままと思えるような状態で土師器の甕・壺・坏・小型丸底壺や須恵器の坏のセットが出土した。

住居間相互のグループであるが、1号住居跡は調査区の南西側から単独で検出された。地形的には緩斜面であり、このグループが存在すると考えると調査区外に展開する可能性が高い。2～3号住居跡は調査区南に位置し、1号住居跡同様調査区外へ展開する可能性が高い。この場合11号住居跡も含まれる可能性がある。4・5号住居跡は地形的にみて1つのグループを形成すると見られる。6～10号住居跡の出土遺物はほぼ同時期であり、厳密な時期差は生じないが、立地等からみて6世紀後半の一時期に数回の立て替えはあったものと思われる。また、6～10号住居跡のグループに4・5号住居跡も加わる可能性も高い。この結果、調査区内においての住居跡間のグループは3グループから4グループと考えられるが、地形的にはさらに条件の良い調査区南側に集落遺構が展開する可能性が非常に高く、かなりの住居跡が確認されるものと思われる。また時期差の生じる住居跡群も存在するものと思われる。

これらの状況から少なくとも原田遺跡では、縄文時代晩期後半代にはなんらかの生活の場所となり、古墳時代の一時期に再び生活が営まれたことがうかがえる。

当遺跡の調査以前には玖珠盆地周辺において、古墳時代以降の住居跡群の確認事例は昭和61年の小田遺跡群(中

西遺跡・西田遺跡・冷酒庵遺跡)があげられる。ここでは縄文～中世に至る多くの遺跡が確認され、弥生時代後期末～奈良時代までの集落の変遷が明らかにされている。一方、玖珠川右岸の台地や谷部では周知遺跡等も少なく、調査もさほど行われていなかった。このような中で九州横断自動車道関係の発掘調査が始まり、原田遺跡の調査が行われるようになった。原田遺跡の調査以降では谷ノ瀬遺跡(6世紀後半)、下綾垣遺跡(6世紀後半～末)、治別当遺跡(6世紀前半、7世紀前半、8世紀前半)、松木遺跡(7世紀後半～8世紀前半)があげられる。下綾垣遺跡・谷ノ瀬遺跡や松木遺跡は扇状地や沖積地ではなく、比較的高所に存在することから、玖珠盆地周辺では沖積地に展開するグループと丘陵上に展開するグループが存在することがわかる。特に松木遺跡では若干の時期差はあるものの、原田遺跡の立地条件と非常に近い。しかし、大分県内では古墳時代になると集落は台地上に展開するケースは少なく、扇状地に降りてくるのが一般的であるが、玖珠盆地周辺では両地域に集落跡が展開するという特異なケースである。

ここで玖珠盆地内における古墳の分布状況からみると、東部に亀都起古墳を中心とする大隈グループ、北部に鬼ヶ城古墳を中心とする森・帆足グループ、西部に鬼塚古墳を中心とする小田グループの三グループに分けられる。これらのグループと原田遺跡の位置関係を照らし合わせてみると、当遺跡は地理的には小田グループに属すると思われるが、この小田グループとは玖珠川を挟んだ対岸の台地上に位置する。さらに小田地区では西田遺跡・冷酒庵B遺跡で古墳時代後期の住居跡が検出されていることから、当グループの中心はやはり小田地区に位置するものと思われ、対岸の原田遺跡は明確な小田グループとはいえないであろう。あるいは小田グループに属さない別のグループの存在する可能性も考えられる。たとえば原田遺跡の周囲からはやはり九州横断自動車道関係で5世紀後半の岩塚古墳、時期不明の玖珠SA地区遺跡群の石棺等古墳時代の遺構が検出されている。これらの遺跡とも合わせ考えるとひとつの小グループ或いは小田グループから派生したグループの可能性も考えられるのではないだろうか。

これまで玖珠地区では玖珠川左岸の扇状地の調査がほとんどで、玖珠盆地の西部、それも玖珠川右岸での発掘調査は行われていなかった。九州横断自動車道の調査を契機にいままで実態が不透明であったこの地域の一端が明らかになり、本地域の動向を探るうえでは重要な結果をもたらした。今後、他遺跡の整理や発掘調査が進むにつれ、さらにこの地域の様相が解明してくるであろう。

参考文献

- 1 『荻台地の遺跡Ⅳ』荻町教育委員会 昭和53年
- 2 『菅生台地の遺跡Ⅺ』竹田市教育委員会 1986
- 3 『小田遺跡群Ⅰ』玖珠町教育委員会 1986
- 4 『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』大分県教育委員会 1990

2) 岩塚古墳

遺跡の概要

岩塚古墳は玖珠郡玖珠町大字戸畑字半組に所在する。遺跡は玖珠盆地の北西、通称岩塚と呼ばれる標高380mの丘陵上にある。この丘陵上には、先端部に6世紀後半～7世紀後半に築造されたと考えられる駅東横穴墓群が知られているのみで、現在までのところ顕著な古墳は認められない。

ところで、玖珠盆地内における古墳群は、盆地東部にあるおごもり方形低塚古墳－船岡山古墳－亀都起古墳の系譜を持つ大隈グループ、盆地北部にある千人塚－鬼ヶ城古墳^{註(1)}を持つ帆足グループ、陣ヶ台古墳群－鬼塚古墳の系譜を持つ小田グループに分けられる。これらグループのうち、5世紀中葉～6世紀中葉前後では、大形円墳である船岡山古墳や全長48mの前方後円墳である亀都起古墳を有する大隈グループが優位を示しているが、6世紀末葉～7世紀初頭にかけては鬼ヶ城・鬼塚古墳を有する帆足・小田グループが台頭してくる状況が看取される。岩塚古墳は小田グループ内に入るものと考えられるが、このグループの中心地は玖珠川を隔てて対岸に所存する小田遺跡群と考えられることから、本古墳はその立地から小田グループの派生的なものとしての性格を有しているものと思われる。

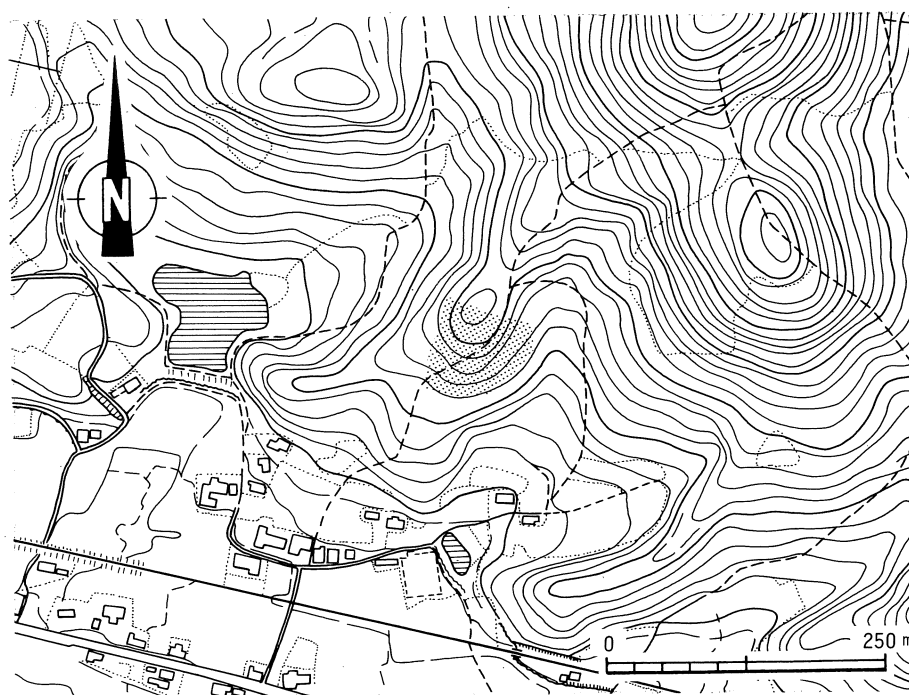
発見の経緯

本古墳は、その立地が丘陵先端にあったためか、明確な墳丘は認められず、その存在が明らかでなかった。そのため、道路建設工事中に大型ブルドーザのキャタピラが、石棺蓋石中央付近に当たりその存在が分かり工事関係者より通報があった。幸いにして蓋石が巨大であったために大型蓋石部分は、旧状をとどめていた。しかしながら西側小口付近の小型蓋石は、粉々に破碎され除去されていた。この隙間から石棺蓋内に埋葬人骨の存在が確認されたため、棺内の調査は九州大学文学部九州文化研究施設の田中良之助教授の参加指導を得て後日行うこととし、当面は石棺の墓壙確認、墳丘の有無の確認、周辺の墳墓の確認等を石棺の周辺を中心として約1500㎡の範囲で行なった。数日後、田中助教授の協力を得て棺内の調査を行なった。

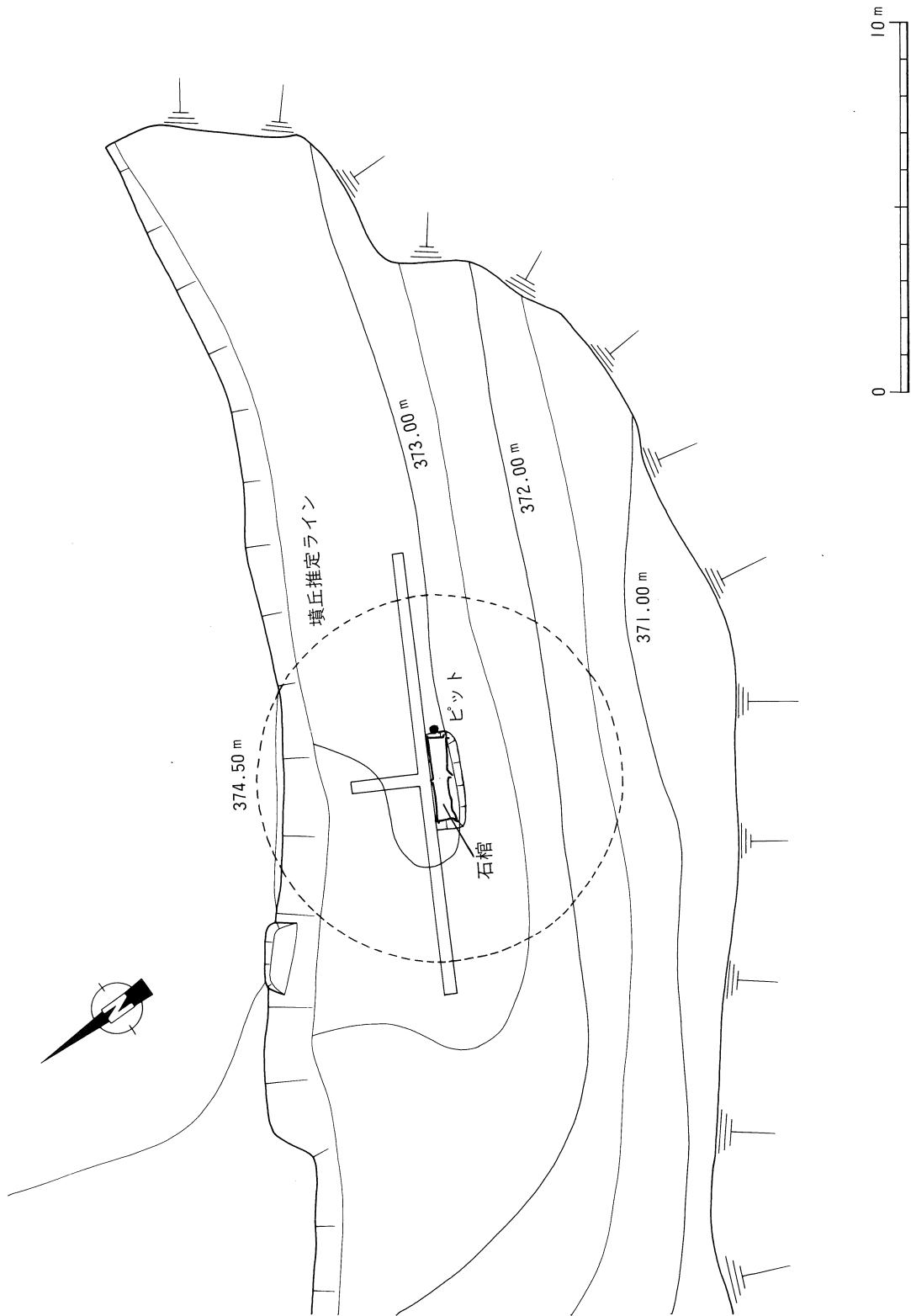
岩塚古墳

遺跡の概要

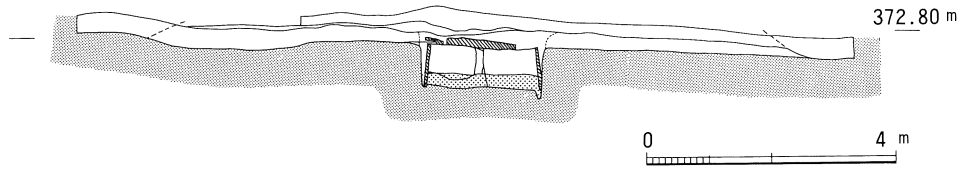
発見の経緯



第68図 岩塚古墳周辺地形図



第69図 岩塚古墳主体部周辺地形図



第70図 岩塚古墳墳丘実測図

墳丘

石棺発見の状況が突発的なものであったため、墳丘の有無は危ぶまれたが東西の土層では確認された。しかしながら南北の土層については北側が完全に削平されており南側についても斜面が急になるため流失していた。

東西土層は、第70図に示すとおり旧地下に厚いところで20cmの盛土を確認することができた。盛土の範囲は5.4mを測る。また、旧地表から基盤層までに達するような周溝は確認されなかったが、東西ともに旧地表の屈曲部分がみとめられその周辺より墳丘盛土をしていた可能性が高い。屈曲部間の長さは約10mを測る。以上の結果から、本石棺には、径10m前後の低墳丘があった可能性を指摘できる。

主体部

主体部は、主軸をN-60°-Wに向けた組み合わせの箱式石棺である。石棺墓壇は現状で旧地表下面付近から掘り込まれているのは認められたが、上面からの掘り込みラインは明らかでない。石棺は、東西に長い二段掘りの墓壇内に位置する。下段の墓壇は、主軸を東西に向けた隅丸長方形を呈し、上縁で東西長1.95m、南北長0.76m、深さ0.55mを測る。掘り込み角度は、東西南北ともに約80°前後と垂直に近い。墓壇上面の標高は約372.5mを測る。

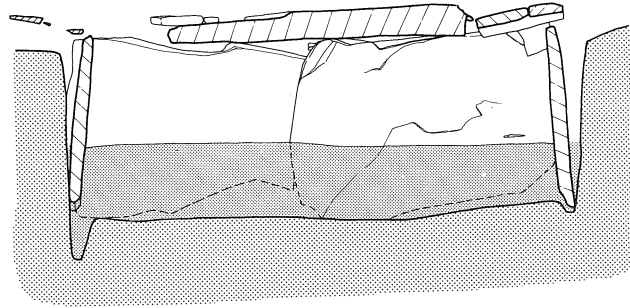
墓壇内には、基盤層の二次推積土（黄褐色粘質土）に少量の旧表土（黒色クロボク質土）を混入した埋土を詰め、棺材を固定している。また、壇内上面より石棺材の剥片が認められた。これは、墓壇内に石棺を埋置する際、微調節時にできた石屑であろう。

石棺石蓋は大型の割石を一枚東側小口部分から西側小口方向に向けておかれており、これで棺全体の約4分の3を蓋っている。残り4分の1の部分は小型の割石で蓋っていたと考えられるが破碎され明瞭でない。棺は6枚の肉厚な板状の割石を壁側に2枚ずつ、両小口壁に1枚ずつ立て並べているが、南側壁は2枚の大型板石を合せ、接合部の隙間にやや小型の板石を1枚裏から組込ませている。側壁はほぼ垂直に立っている。両小口石は、側石の内側に組込まれ若干内傾して立っている。棺内内側には、赤色顔料が塗布されている。側壁と小口の接合部には床面付近のみに厚さ5cm前後の粘土目張りが施されている。棺床は基盤層の二次推積土を固く敷いており、特別な枕施設は認められない。棺内内法は、長軸長1.73m、東西小口幅5.4m、中央幅0.42m、深さ0.4mを測る。なお、棺材は全て安山岩製であり、これは周辺に露頭している。

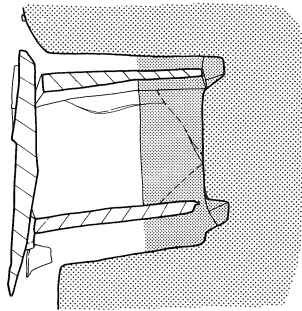
墳丘

主体部

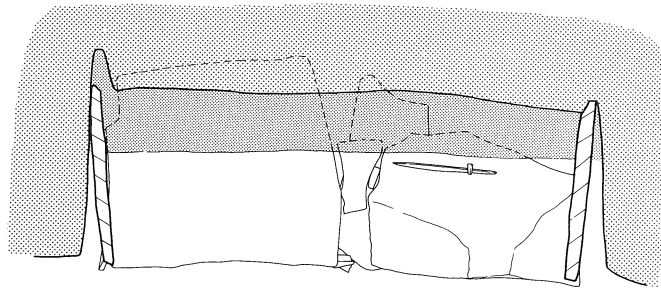
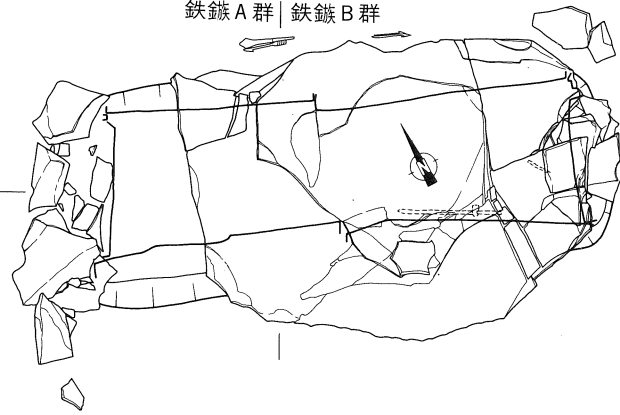
L = 372.800 m



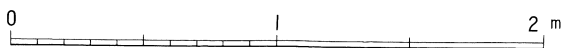
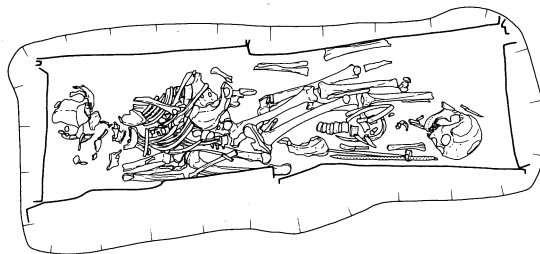
L = 372.800 m



鉄鍬A群 | 鉄鍬B群



L = 372.800 m



第71図 岩塚古墳主体部実測図

ピット

石棺の東側小口部中央より東0.5mの地点で、径20cm、深さ15cmのピットが検出された。これは、現状では旧地表下面でその存在が確認できたことから、本石棺に付属する施設と考えられ、祭祀用のものと考えられる。

遺物の出土状況⁽²⁾

遺物は、石棺の棺内と棺外で出土した。棺外では鉄鏃が2群出土した。A群は鉄鏃2本（平根圭頭+細根片刃）がセットとなり、石棺中央の北側、1段目墓壇脇で検出された。墓壇を掘り始めてからすぐに出土し、刃先を西側に向け水平に置かれていた。B群も鉄鏃2本（細根片刃）がセットとなり、石棺中央やや東側、棺蓋脇で検出された。棺蓋を取り除くとすぐに出土し、刃先を東側に向け水平に置かれていた。これら鉄鏃群の帰属関係は、鉄鏃が多くの場合男性に副葬される事実があることと、出土位置、レベル、刃先の方向から、1号人骨（初葬の熟年男性）→A群、2号人骨（追葬の熟年男性）⁽³⁾→B群と考えられる。

棺内からは、鉄剣と刀子が出土した。鉄剣は棺東側の南側壁ぎわで刃先を西に向け水平に置かれていた。刀子は東小口ぎわで刃先を東に向け水平に置かれていた。これら遺物の帰属関係は、出土位置、レベル、人骨の埋葬状況等から1号人骨のものと推定される。

出土遺物

鹿角装鉄剣（第72図5）

全長40.4cm、茎長10.4cm、最大身幅2.9cm、身厚0.5cm、茎幅2.1~1.1cmのもので、茎には3個の目釘穴を持つ。剣身は全体にやや先細りで、関部は一方が直角で他方が鈍角に開いている。剣身には錆が見られない。切先、茎には部分的に木質が残る。関付近には直弧文を施した鹿角製の把縁具が装着されている。

刀子（第72図1）

全長9.1cm、茎長2.9cm、最大身幅1.2cm、身厚0.3cm、茎幅1.2~0.6cmのものである。刀身は研ぎ減りして中央付近が内湾している。茎には部分的に木質が残る。

鉄鏃（第72図2-4）

3・4はA群、1はB群のものである。4は全長15.9cmの平根圭頭類に属する篋被を有するものである。2・3は細根片刃類のものである。3は全長17cm脛部に木質が残っているため篋被の有無は不明である。2は全長15.5cm茎部先端が欠損し、篋被の無いものである。

時期

時期決定に最も有効な土器の出土は本古墳から無かったので、明確な時期比定は難しい。しかしながら石棺内外から埋葬人骨との帰属関係の明らかな武器類が出土した。武器類の編年研究は近年著しい進歩があり、おおよその時期比定はできる。さらに、後述するように人骨の埋葬状況⁽⁴⁾から人骨間の時間差もある程度復元できる。これらを総合して検討しよう。

まず、1号人骨副葬された鹿角装鉄剣+平根圭頭鉄鏃・細根片鉄鏃のセットは、出土土師器から5世紀中葉前後に比定されている玖珠郡おごもり方形低塚古墳より出土した鉄剣+平根柳刃鉄鏃のセットに比べ新出のものもある。また、直弧文様を施した鹿角製刀装具は、5世紀後葉前後に多く出土することなどから、1号人骨の埋葬時期は、5世紀後葉前後と推定される。次に、2号人骨に副葬された細根片刃鉄鏃のセットは5世紀後葉~6世紀前葉に多く見られること、1号人骨と2号人骨の埋葬時期差は骨の状態から10年以内におさまるとの所見から、2号人骨の埋葬時期は、5世紀末前後と推定される。（村上）

ピット

遺物の出土状況

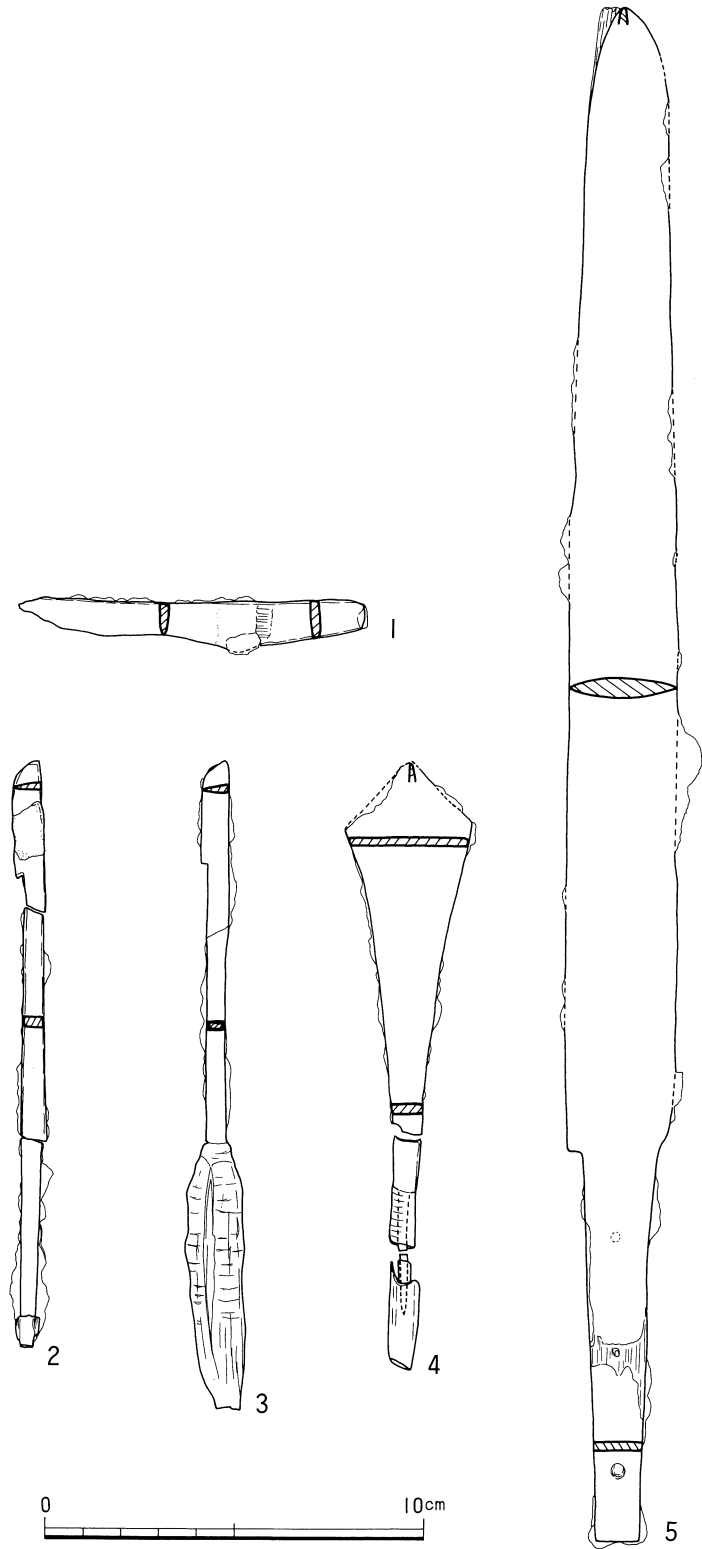
出土遺物

刀子

鉄鏃

時期

- 註(1) 報告書では方形周溝墓とするが都出比呂志氏は、この種の墳墓をまとめ低塚墳と提唱している。都出比呂志「墳墓」『日本考古学』4 集落と祭祀 1986年
- 註(2) 土生田純之「古墳における儀礼の研究」『九州文化史研究所紀要』36 1991年
- 註(3) 森 浩一「古墳にみる女性の社会的地位」『古代の日本』12 1987年
- 註(4) 古野徳久「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』64 1989年
- 註(5) 県内出土の代表的なものに大野郡三重町十六山横穴墓出土のものがある。玉永光洋『十六山横穴墓群』1983年



第72図 岩塚古墳出土遺物実測図

—岩塚古墳出土人骨について—

九州大学大学院比較社会文化研究科
基層構造講座

田 中 良 之

はじめに

岩塚遺跡箱式石棺からは3体の人骨が検出された。形質の詳細については、後日刊行予定の報告書で報告する。ここでは出土状態を中心に報告することにし、あわせて被葬者の親族関係についても予備的な考察を行ってみたい。

なお、親族関係者の推定については筆者がこれまで用いてきた方法（田中他、1985；土肥他、1986；田中・土肥1989）による。

出土状態

1号人骨は1体のみ南東に頭位をとる被葬者で、眉弓等から男性、歯牙咬耗度（Brocaの1～2度）から熟年と推定される。頭骨は原位置と思われ上・下顎は関節したままである。左上腕・前腕、胸・腰椎および左寛骨もほぼ原位置を保っている。しかし、右寛骨は動かされて2号人骨右大腿骨上の上のり、左右下肢骨も西側へと押しやられた状態である。また、右上腕・前腕は本来の位置を動かされ2号人骨右大腿骨の下に検出された。ところが、原位置を動かされ保存も完全ではないものの、尺骨と橈骨は2本が平行する本来の位置関係を示しており、この2本と上腕骨の位置関係も肘をやや曲げた状態で関節していた可能性を示している。また、下肢骨は、壁側へと動かされてはいても、膝関節は左右とも関節した状態を示しており、右寛骨は右大腿骨と関節したまま動かされていた。軀幹の左外側に切っ先を足元に向けた鉄剣が副葬されており、他に鉄鏃・刀子を持つ。

2号人骨は、1号人骨と差し違えに頭位をとる。寛骨大坐骨切痕角および恥骨下角から男性と推定され、歯牙咬耗度（Brocaの0～1度）により成年前半と推定される。頭骨は保存不良であったが、上・下顎骨は関節に近い状態であり、原位置のままであると考えられる。右上腕骨は1号人骨の左脛骨上に乗っており、本来の位置にあると思われる。右前腕は1号人骨の左右大腿骨上の上のり、遠位端は離れているものの、上腕骨遠位端との位置関係からみて原位置に近いと考えて大過なからう。左の上腕・前腕骨は3号人骨軀幹骨の下に検出されたが、肘関節は外れ、片づけられた状態であった。また、右肋骨はほぼ原位置を保っており、胸・腰椎は関節状態ではなく乱れてはいるものの、おおむね本来の位置に近いと思われる。右の寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨も原位置を保ち、1号人骨右上腕・前腕骨の上にはのるものの、1号人骨の上半身を避けるように東にずらして置かれている。右の股関節・膝関節・脛距関節には乱れがなく、左の大腿骨・脛骨も膝関節に乱れがなく原位置のままといえる。しかし、仙骨は原位置を動いており、左寛骨も完全に反転している。1号人骨上に原位置を保つ上腕骨や下肢骨がのることから、1号人骨よりも後に埋葬されたことがうかがえる。副葬品としては鉄鏃がある。

2号人骨の東に平行して埋葬された被葬者を3号人骨とした。恥骨下角から女性と推定され、歯牙咬耗度（Brocaの1～2度）から成年後半から熟年前半にかけてと推定される。頭骨は、顔面を東に向けているが、上・下顎は関節した状態であり、原位置を保っていると考えられる。右の肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨は関節が外れた状態であるが、軟部組織の腐朽によっ

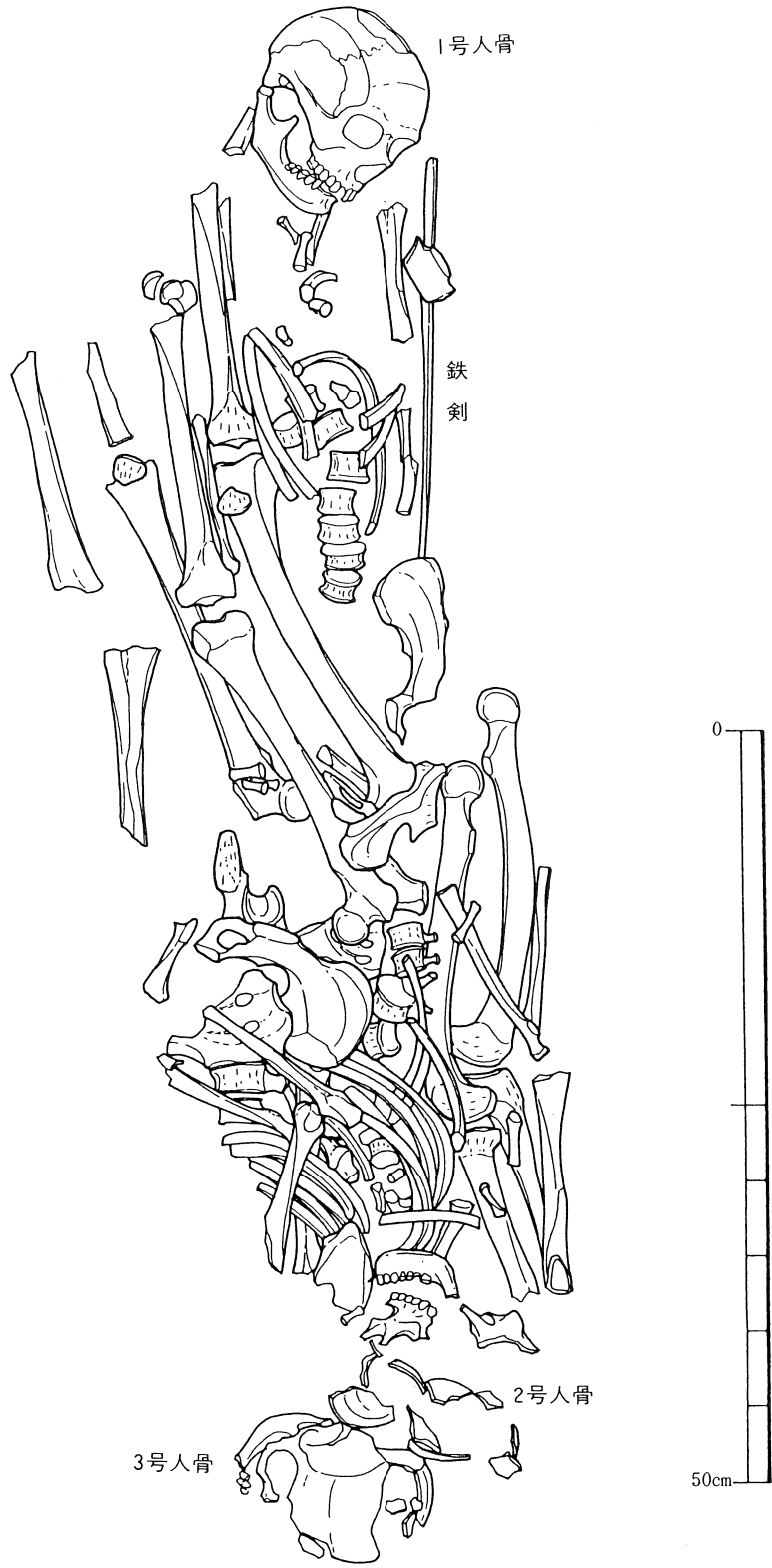
はじめに

出土状態

1号人骨

2号人骨

3号人骨



第73图 岩塚古墳人骨出土状况

て東側へ崩落したものである。右肋骨・骨盤・左右下肢骨は関節状態を乱していない、やや東へずらしながらも、ほぼ全身が2号人骨の上のっており、2号人骨の後に葬られたことは明らかである。副葬品はない。

このように、石棺内の3体の被葬者は、1号・2号人骨の一部が二次的に動かされていたことからみて、同時埋葬ではなく順次追葬されたものである。そして、3体の重なりから、1号人骨→2号人骨→3号人骨の順に埋葬されていたことは明らかである。

世代構成の復元

石棺内の3体の被葬者は、1号人骨（熟年男性）、2号人骨（成年男性）、3号人骨（熟年女性）という構成であった。しかし、これらは同時に埋葬されたものではなく、ある間隔をおいて順次埋葬されていったものである。したがって、3体の被葬者の生前における世代構成は、死亡推定年齢そのものによるのではなく、埋葬間隔を考慮して復元しなければならない。

3体の被葬者の副葬品は、1号人骨の鉄剣・鉄鏃・刀子、2号人骨の鉄鏃であり、これらから初葬の時期はおおむね5世紀後半と推定するものの、最終埋葬については考古学的には時期を推定できない。しかし、人骨の出土状態からある程度の埋葬間隔を推定することができる。すなわち、1号人骨は2号人骨の、2号人骨は3号人骨の追葬時に、それぞれ一部が動かされており、その状態の観察結果から埋葬から追葬されるまでの時間幅の推定がある程度可能である。そこで、1号人骨からみると、右の肩関節が外されて下半身側へと動かされ、左股関節とおそらくは右仙腸関節が外されて、石棺の北西の方へと動かされている。そして、これだけをみると、仙腸関節までが外れるほどの靭帯・軟骨等の軟部組織の腐朽が進行し、その後に片付けが行われたと解されよう。ところが、下肢全体が動かされたにもかかわらず、膝関節は左右とも乱れておらず、右肘関節も外れていなかった可能性があることは前記の通りである。このようなあり方は、軟部組織の腐朽がかなり進行した後に片付けが行われたというよりは、膝関節や肘関節が靭帯等で固定されていた段階に片付けられたと考えるべきであろう。軟骨や靭帯によって強固に固定された仙腸関節と異なり、股関節や膝関節等の可動関節は、片付けの際に容易に外れるようになるまでにそれほどの時間を要しないと考えられる。したがって、1号人骨の埋葬後数年とたたないうち2号人骨が追葬され、その際2号人骨の上半身のために1号人骨の下肢が、2号の下肢のために1号の上肢が、それぞれ動かされたものと推定される。なお、1号人骨の右寛骨は大腿骨とともに関節したまま動かされているが、この段階での仙腸関節は強く固着していたはずであり、仙骨が保存されていないため詳細は不明であるものの、一部を破壊してでも取り外したと思われる。2号人骨は、左上肢が動かされ、胸椎から仙骨にかけてと、左寛骨が二次的に動いていた。脊椎骨は、片付けられたというよりは、3号人骨の上半身を2号人骨に葬った際に相互の位置関係が乱れたというべきであろう。また、仙腸関節は左右とも外れており、左の寛骨は完全に反転していた。これらの所見からみて、3号人骨は2号人骨軟部組織の腐朽がほぼ完了した後に追葬されたと考えられる。現代の改葬の事例（伊東1974）からみて軟部組織の腐朽には10年ほどの時間が必要と考えられることから、2号人骨と3号人骨の埋葬の間にも10年それ以上の間隔を見込む必要がある。そこで、これから3体の生前における世代構成を復元すると、まず1号人骨－2号人骨間は数年とたっていないと考えられるので、この2体の生前の年齢差は死亡時のそれと大差ないといえる。次に、2号人骨－3号人骨間は、上記のように10年かそれ以上の間隔が見込まれるため、3号人骨の1号人骨死亡時における年齢は成年の半ばくらいになる。

したがって、3体の生前における世代構成は、1号人骨（熟年）、2号人骨（成年前半）、3号人骨（成年）という二世代の構成となる。そして、このような世代構成からは、父（1号

世代構成の復元

人骨)と息子夫婦あるいは娘夫婦(2号・3号人骨)というモデルか、父(1号人骨)と二人の子(2号・3号)というモデルが想起されよう。

検証

検証

歯冠計測値を用いたQモード相関係数の計算結果は表1のとおりである。歯の保存の関係で、3体とも併せて計算しえたのは二つの組み合わせにとどまったが、いずれも高い値が得られている。また、1号-2号人骨間では五つの組み合わせ全てにおいて高い値が得られた。したがって、これから、この3体がいずれも血縁関係にあったと推定される。

この結果は、さきあげた被葬者の考うる親族関係モデルのうち、「父と息子夫婦(娘夫婦)」を棄却し、「父と二人の子」を支持するものである。

	1号-2号	1号-3号	2号-3号
$P^1 P^2 M^1 M^2$	0.830	0.870	0.809
$P^1 P^2 M^1$	0.798	0.864	0.881
$CP^1 P^2 M^2 M^2$	0.792	—	—
$CP^1 P^2 M^1 M^2 I_1 I_2 CP_1 P_2$	0.532	—	—
$P^1 P^2 M^1 M^2 I_1 I_2 P_1 P_2$	0.545	—	—

第3表 岩塚古墳被葬者の歯冠計測値を用いたQ相関係数

おわりに

おわりに

以上の結果は、岩塚古墳の被葬者が、父とその子、すなわち父系の血縁者であるというものであった。ところが、2号人骨と3号人骨が夫婦であったというモデルは、この二人が近親婚を行っていた場合にはなお成立しえないわけではない。近親婚が大王とその周辺のみならず本古墳の被葬者クラスにおいても行われていたかどうかは疑わしいが、その問題においても、第一世代被葬と第二世代被葬者の相違が問題となろう。第一世代と第二世代とでは、前者が男性のみであるのに対して、後者は男女二人というように構成も異なっている。また、副葬品においても、1号人骨には鉄剣・鉄鏃・刀子が伴うのに対し、2号人骨は鉄鏃のみ、3号人骨には何も副葬されていない。このように、第一世代と第二世代では明瞭な差が認められ、副葬品からみて、第一世代の男性が家長であっても、第二世代の被葬者はそれよりもランクの落ちる人物であるといえよう。したがって、第一世代の男性(1号人骨)の配偶者が葬られていないことを考えると、第二世代の男女が夫婦である可能性は低いと考えられる。

このような埋葬原理は、大分県三光村上ノ原横穴墓群において知られるものである(田中他1985; 田中1991)。上ノ原横穴墓群においては、家長を継がなかった子たちが葬られるという埋葬システムが明らかとなっているが、本古墳の時期が上ノ原の開始期と同じ5世紀後半であることは、内部主体こそ箱式石棺と横穴墓と異なるものの、この時期に同じ埋葬原理が存在し実践されていたことを示している。この事実は、古墳時代の親族構造とその時期的変化を知るうえできわめて重用であると考えられる。

註

土肥直美・田中良之・船越公威、1986：歯冠計測値を用いた血縁者推定法と古人骨への応用。人類学雑誌。94(2)

伊東宏、1974：人骨改葬を伴う愛知県渥美町(高木)と旭町(浅谷)の両墓制。葬送墓制研究集成1。名著出版、東京

田中良之、1991：上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係。上ノ原遺跡群。大分県教育委員会、大分
田中良之・土肥直美、1989：出土人骨から親族構造を決定する。新しい研究法は考古学になにをもたらしたか。

クバプロ、東京

田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文、1985：上ノ原横穴墓被葬者の親族関係。上ノ原遺跡群IV。大分県教育委員会、大分

3) 玖珠S A地区遺跡群

玖珠S A地区遺跡群は玖珠盆地北西部の舌状丘陵上に位置する。遺跡群は標高330~370m程の五つの尾根筋からなり、表土除去後に石棺1基、溝状遺構1条、炭焼き窯2基を確認した。石棺は遺跡群南端の尾根筋上平坦部で表土直下から確認されたが、石蓋の大半を消失、破損していた。棺内は土圧により側石が内側に湾曲し、土砂で満たされていた。石棺の墓壇平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.3m、深さ0.6mを測る。棺内の内法は長軸1.7m、短軸0.35m、深さ0.4mである。棺材は調整加工を施した厚手の安山岩板石を8枚を使用し、東西小口石は両側石に挟み込まれている。小口石及び側石の掘り込みは狭く、棺内は暗灰褐色の粘土を屍床とし、蓋、側石、小口石にはベンガラが施されていた。石蓋の周囲からは、蓋の固定及び安定を図るための小板石、粘土塊を検出した。遺物は棺内東側から鉄剣が1点出土したが、他に時期を特定できる遺物は出土しなかった。

溝状遺構は石棺北側約20m付近で、尾根を東西に断ち切るかたちで確認された。出土遺物はなかったが、石棺に関係する施設と推定される。

炭焼き窯は遺跡群北西側の丘陵斜面上にある。遺物は出土していない。

調査区より続く尾根筋上には、今回検出された遺構のほかに石棺1基を確認している。以上の調査結果から、調査区を含む舌状丘陵は、今回確認された溝状遺構を境に一つの墓域を形成していると考えられる。

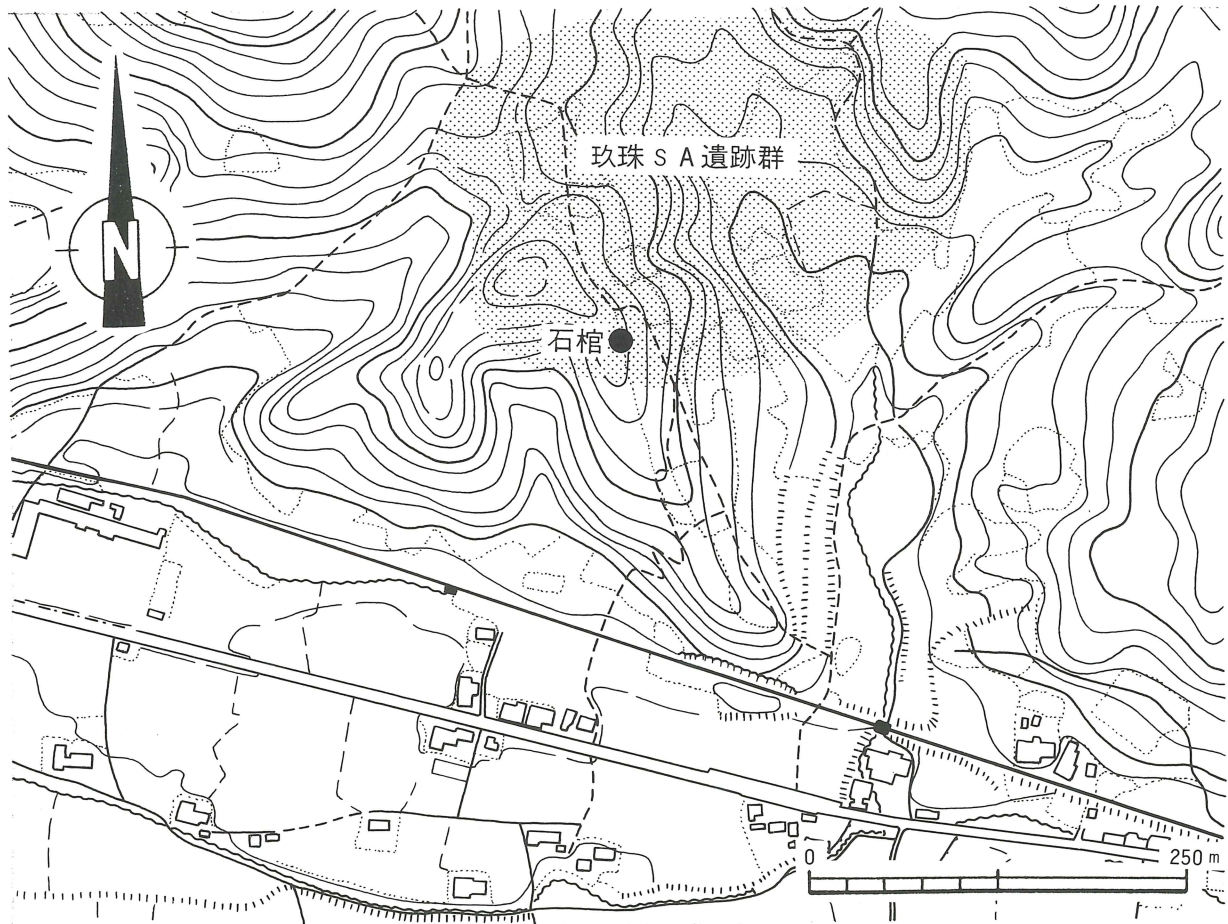
遺跡の立地

石棺

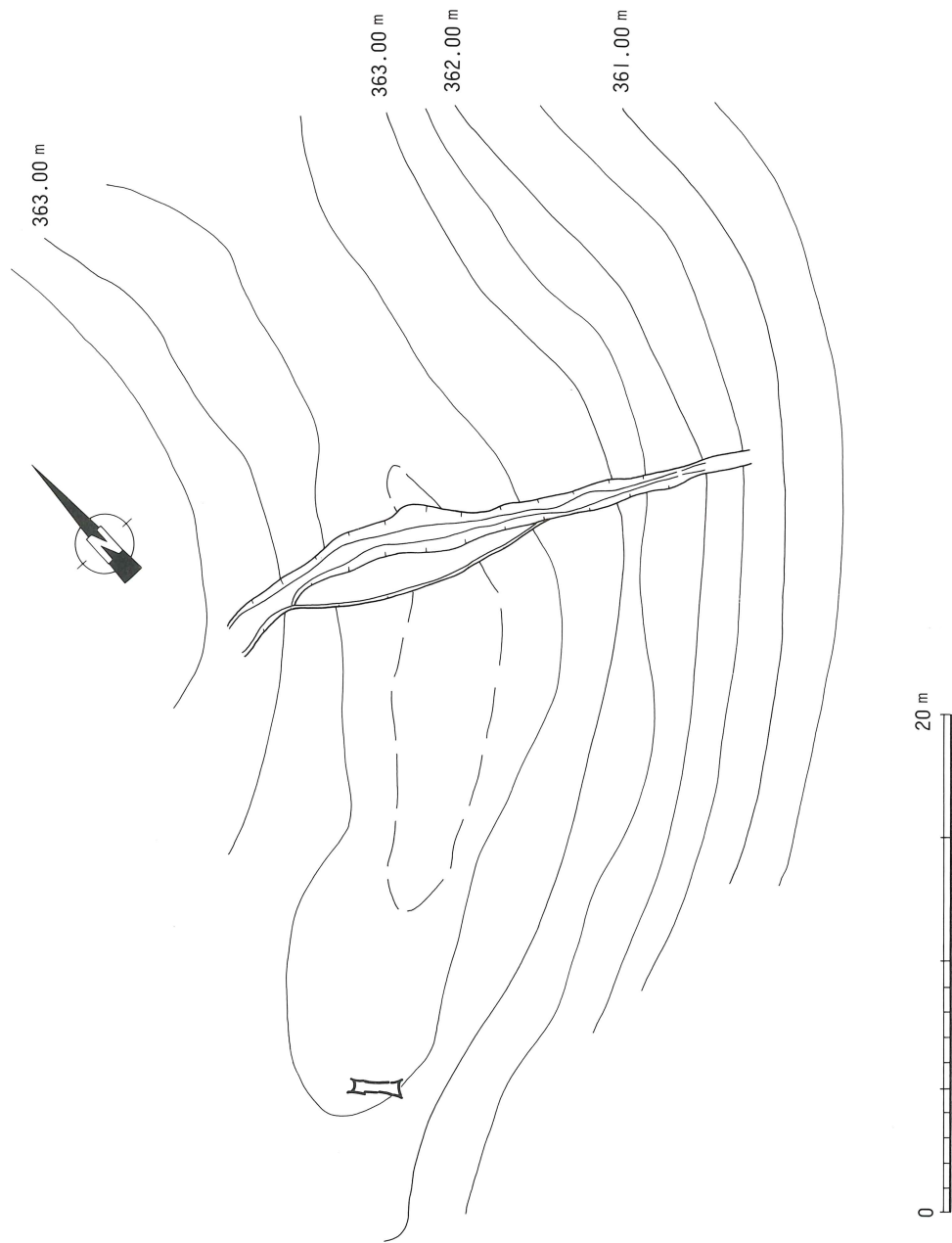
溝状遺構

炭焼き窯

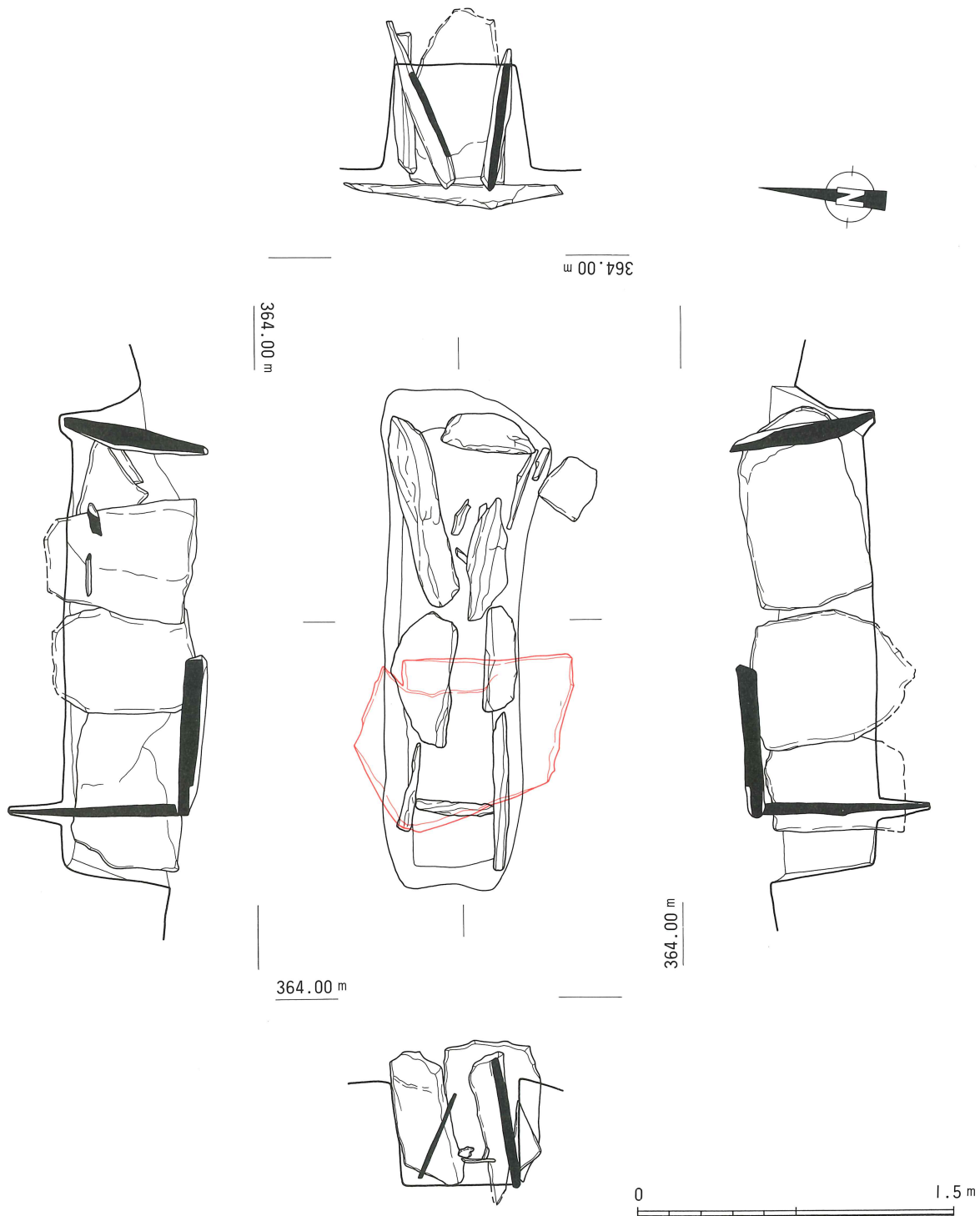
遺跡の広がり



第74図 玖珠S A地区遺跡群周辺地形図



第75图 玖珠S A地区遗迹群1号石棺周边地形图

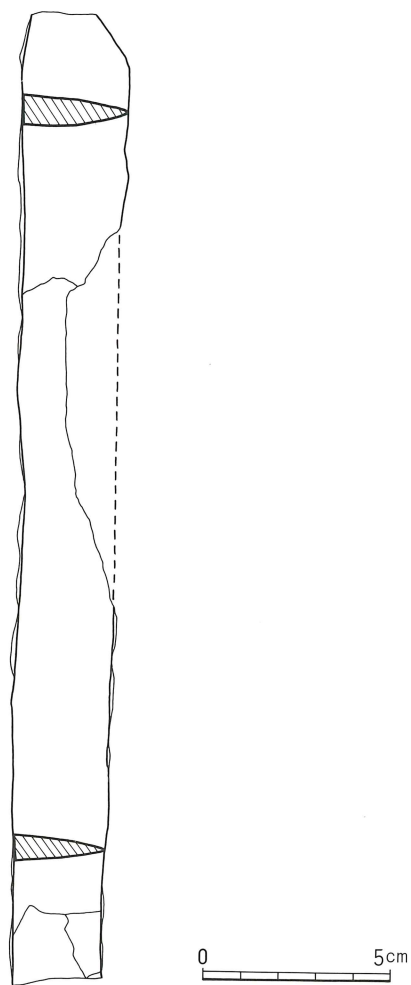


第76图 玖珠SA地区遗迹群1号石棺实测图

出土遺物

1号石棺出土遺物

遺物は1号石棺内から出土した直刀1点のみである。1は直刀である。石棺内東側の屍床より12cmほど浮いた状態で出土した。直刀の両端及び刃部中央を欠如しており、全長25.6cm、身幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。



第77図 玖珠S A地区遺跡群1号石棺出土遺物実測図

4) 谷ノ瀬遺跡

調査の立地 谷ノ瀬遺跡は玖珠郡玖珠町大字戸畑字谷ノ瀬に所在する。遺跡は玖珠盆地西部の谷部に位置し、浅い谷を挟んで南北にある。遺跡の南に隣接する野田山丘陵には、山頂に中世の山城が、中腹には古墳時代の円墳・石棺群が存在する。

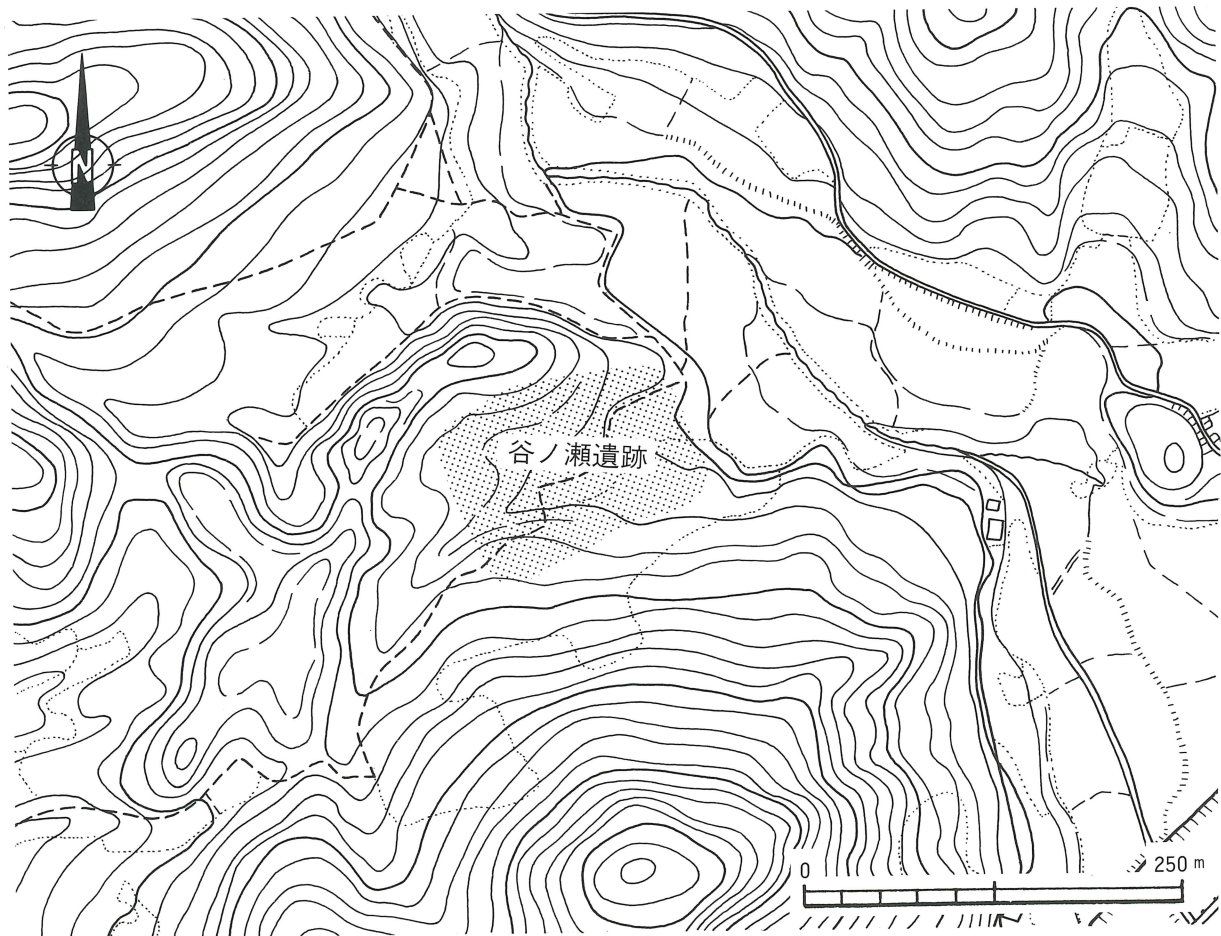
調査の立地

調査区北側は南向き斜面となり、丘陵頂部で約350m、裾部で約330mの標高を測る。一部中腹ではなだらかな傾斜をもつ平坦地となっている。南側は東西に延びる低丘陵の斜面部であり、標高は335m前後を測る。

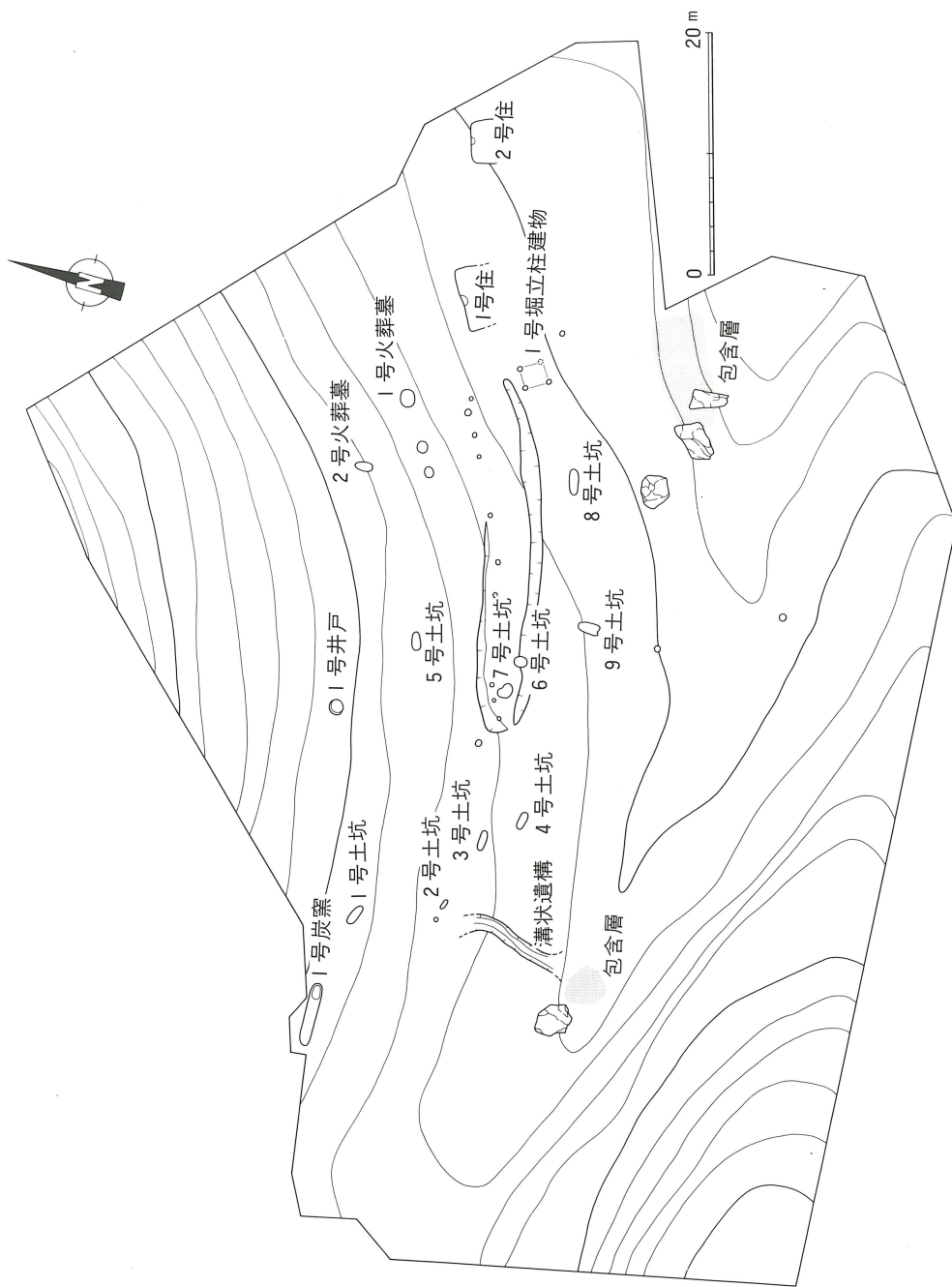
遺跡の概要 調査は平成2年度に試掘調査を行い、住居跡、土坑等を確認した。平成3年度は、昨年度調査区の精査及び、南側の未調査区の調査を行った。その結果、調査区西側の斜面下部で弥生時代中期中葉のピット及び包含層を、上部で奈良末～平安初頭の炭窯を検出した。さらに東側の斜面下部で古墳時代後期（6世紀後半）の竪穴住居跡2軒、1×1間の掘立柱建物跡1棟を、上部で時期不明の火葬墓2基、井戸状遺構、土坑をそれぞれ確認した。その他、斜面下部で、時期不明の東西方向に走る溝状遺構と柵列群も検出した。

遺跡の概要

本遺跡で検出した遺構の内、もっとも注目されるものは古墳時代後期の遺構群で、竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟がセットで、この時期の集落の最小単位となるものであろうか。



第78図 谷ノ瀬遺跡周辺地形図



第79図 谷ノ瀬遺跡遺構配置図

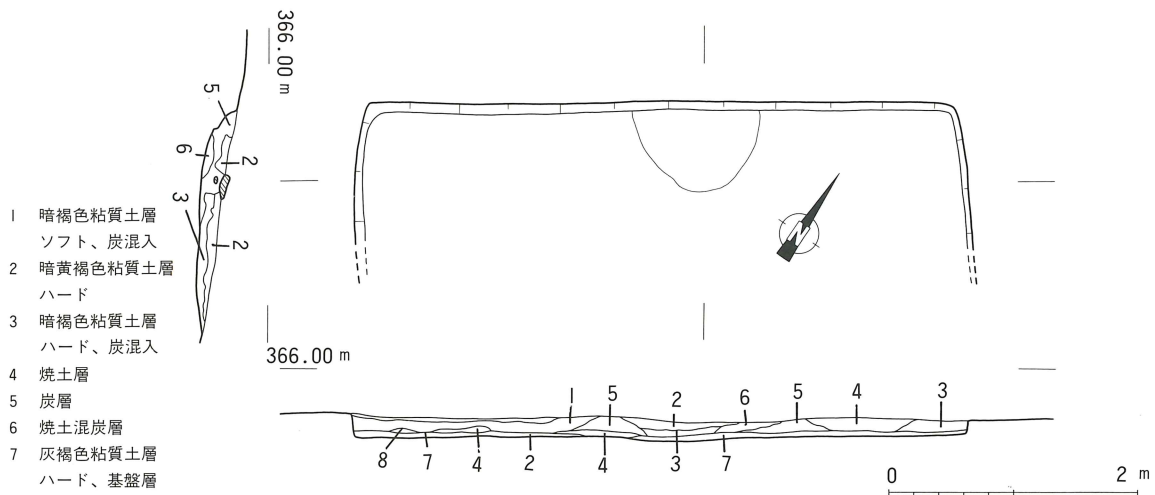
1号竪穴住居跡（第80図）

調査区の北東側の緩斜面に位置する。標高は333.5m前後を測る。南壁は斜面のため、消失している。東西4.96×南北1.6+αmの方形住居跡で、北壁にカマドを造り付けている。カマドの残存状態は悪い。支柱穴は4本柱である。住居内の埋土には焼土・炭層が多量に含まれているところから、この住居跡は焼失住居跡であり、土層の状況は南から北へ倒れたことを示している。遺物の出土量は少ない。

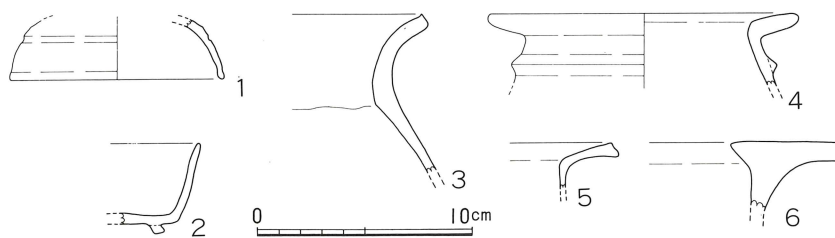
出土遺物（第81図-1・3） 1は須恵器坏蓋で、復元口径10cmを測る。体部と口縁部との間は沈線を巡らす。口縁端部は外反し、丸くおさめている。頂部は連続回転ヘラ削りを施しており、その他の部分は全て回転横ナデである。色調は内外断面とも青灰色を呈す。胎土は精微で、焼成良好な硬質の土器である。3は土師器甕片で、口径は復元できない。頸部から口縁部は緩く外方に延び、口縁端部は若干つまみあげている。端部は方形をなす。頸部と胴部の境の内面は粘土紐痕が認められる。胎土には角閃石や白色砂粒を多量に含んでいる。色調は内外断面とも淡褐色を呈し、焼成は不良で軟質な土器である。その他の遺物は、台風19号で収納プレハブが倒壊したため、紛失した。

1号竪穴住居跡

出土遺物



第80図 谷ノ瀬遺跡 1号竪穴住居跡実測図



（1・3は1号住出土、2は1号炭窯出土、4～6は1号弥生ピット出土）

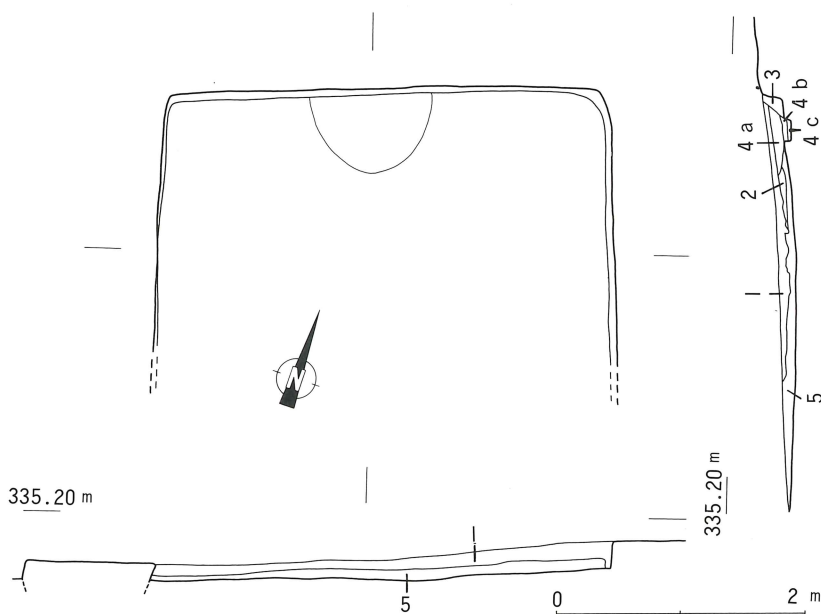
第81図 谷ノ瀬遺跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡 (第82図)

1号竪穴住居跡の東南8m、標高335.0mに位置する。南壁は1号竪穴住居跡同様斜面のため、消失している。東西3.68×2.1+αmの方形住居跡で、北壁にカマドを造り付けている。カマドの残存状態は悪い。支柱穴は2本柱の可能性が高い。住居内の埋土には焼土・炭層が大量に含まれているところから、1号竪穴住居跡同様焼失住居である。遺物の出土量は少ない。

- | | | | |
|-----|---------|------------------|--------|
| 1 | 暗褐色粘質土 | ややハード、炭含む | |
| 2 | 暗黄褐色粘質土 | ややハード | |
| 3 | 黄褐色粘質土 | 地山の二次堆積 | |
| 4 a | 暗赤褐色粘質土 | ややソフト、炭・焼土ブロック含む | } カマド壁 |
| 4 b | 赤褐色粘質土 | ハード、焼土層 | |
| 4 c | 暗赤褐色粘質土 | ハード、炭・焼土含む | |
| 5 | 暗茶褐色粘質土 | ややハード、炭・焼土ブロック含む | |

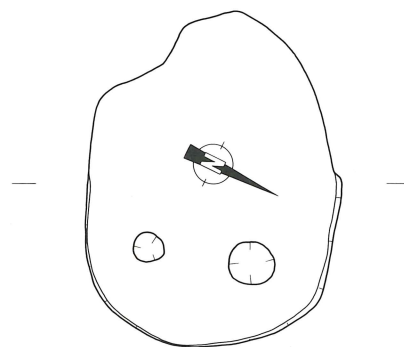


第82図 谷ノ瀬遺跡 2号竪穴住居跡実測図

1号掘立柱建物

1号掘立柱建物跡

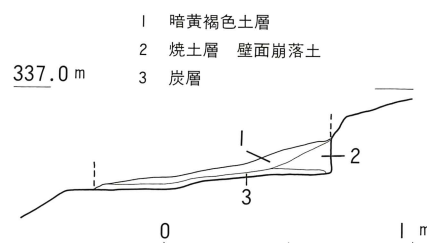
1号竪穴住居跡の南西4m、標高335.5mに位置する。1×1間のものであるが、南東の柱は検出できなかった。柱間距離は東西180×南北200cmである。出土遺物はないが、埋土の色調から、1・2号竪穴住居跡と同時期の可能性が高い。



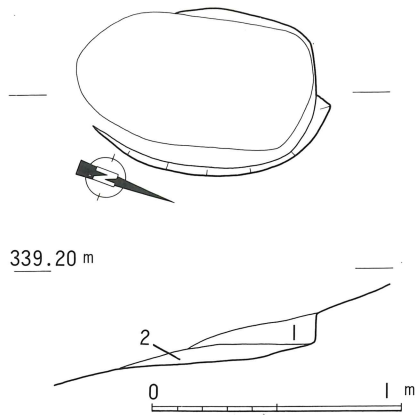
1号火葬墓

1号火葬墓 (第83図)

調査区の北東側、標高337.4mの位置で1号火葬墓は検出された。東西133×南北102cm、深さは北側が最も残りが良く、23cmを測る。平面形は楕円を呈す。南壁は斜面のため、大部分が消滅している。壁面は北東部・南部分の一部・北西部分に堅く焼けた焼土壁が確認された。床面は試掘調査時に掘りすぎたため、炭層を失っている。西側床



第83図 谷ノ瀬遺跡 1号火葬墓実測図



第84図 谷ノ瀬遺跡2号火葬墓実測図

面には厚さ約4cm平均の炭層が認められ、そのなかより人骨の微小片が検出された。炭層の主要原料は茅である。土器などの出土遺物はなく、時期不明である。

2号火葬墓 (第84図)

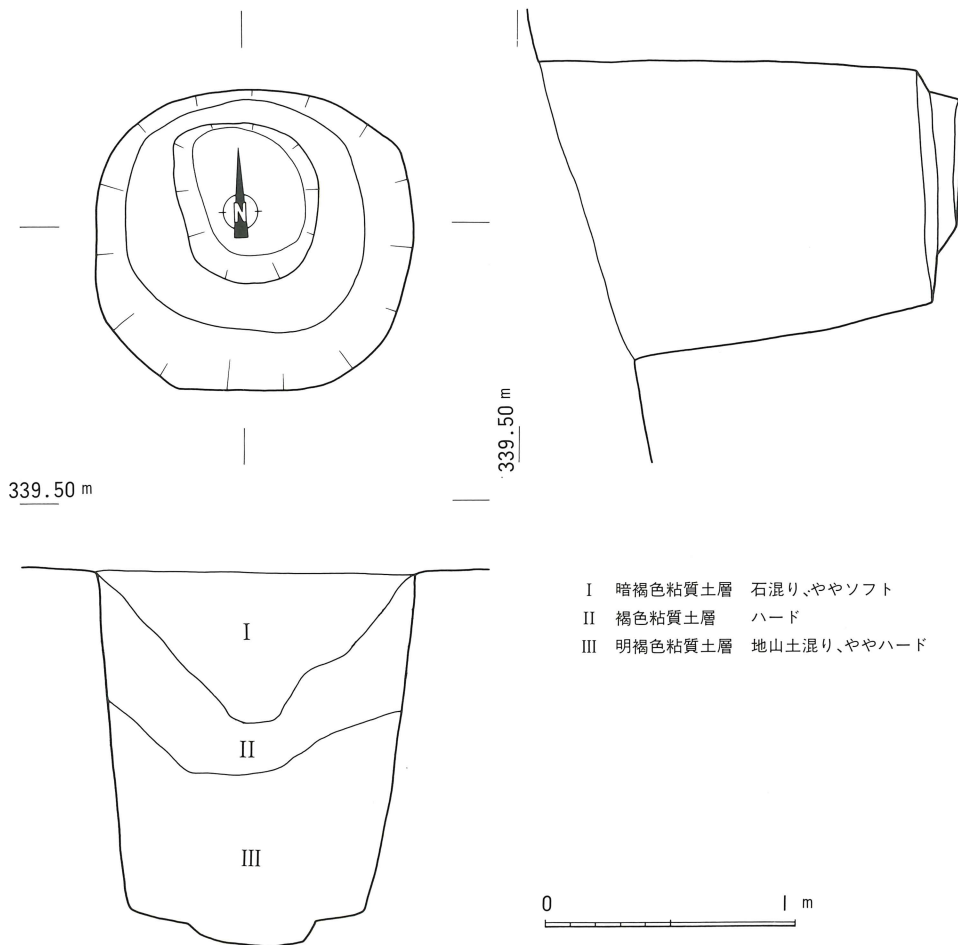
1号火葬墓の北西側、標高338.7mに位置する。2号火葬墓の規模は東西69×南北103cm、北壁での深さは10cmを測る。平面形は楕円形を呈す。南壁は斜面下位にあたるため、消滅している。西壁は試掘調査時に掘りすぎたため、残りは良くない。床面は堅く焼き締まっており、赤褐色を呈している。炭層は部分的に認められ、その主要原料は茅である。人骨片は床面直上と、床面より約10cm程浮いた位置で検出した。上層より検出した人骨片はその形状から下肢骨の可能性が高い。土器などの出土遺物はなく、時期不明である。

2号火葬墓

1号井戸状遺構 (第85図)

調査区のほぼ中央北側、標高339.5mに位置する。上面径120cm前後、底面径90cm前後、中央での深さ150cmの円柱状を呈す素掘り井戸である。底面には長辺64×短辺56cm、深さ10cmの隅丸長方形を呈す土坑を掘り、段状になっている。出土遺物はなく、その形状から天水溜めの機能を持つ井戸と考えたが、確証はなく陥穴の可能性もある。土器などの出土遺物はなく、時期不明である。

1号井戸状遺構



第85図 谷ノ瀬遺跡1号井戸状遺構実測図

- I 暗褐色粘質土層 石混り、ややソフト
- II 褐色粘質土層 ハード
- III 明褐色粘質土層 地山土混り、ややハード

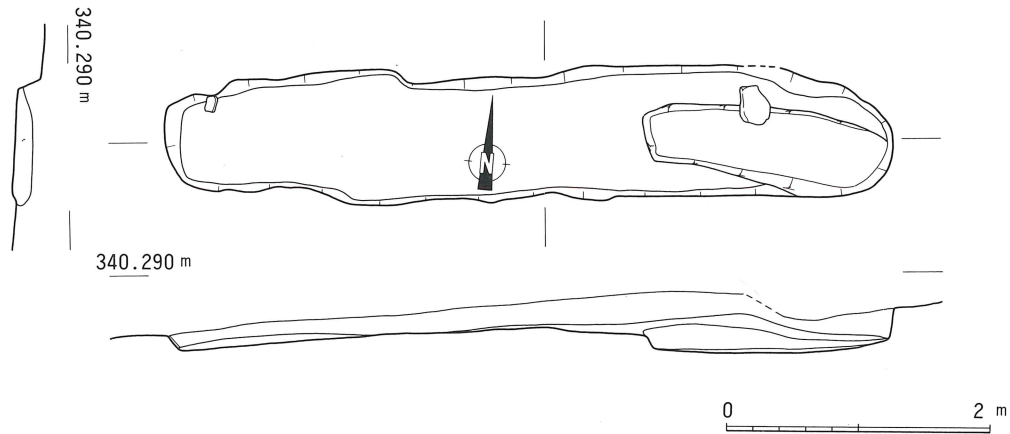
1号炭窯跡

1号炭窯跡 (第86図)

調査区の北東標高339.90m前後に位置する。丘陵斜面に並行して作られている。東西長550cm、南北幅88cm、深さ約20cmの隅丸長方形を呈している。東側隅は長さ190cm、幅56cm、深さ約20cmの隅丸長方形の攪乱土坑によって部分的にカットされている。北壁中央付近は青褐色を呈した還元壁となっている。中央より西側床面には炭土と炭の混じった層が認められた。焚口等の施設は不明である。

出土遺物

出土遺物 (第81図-2) 遺物は窯周辺より須恵器高台付壺片が出土した。



第86図 谷ノ瀬遺跡1号炭窯跡実測図

1号土坑

1号土坑 (第87図)

調査区の北西側、1号炭窯の東6m、標高339.5m前後に位置する。長軸はほぼ東西で、長軸長212cm、幅48cm、深さは北壁で30cmを測る。長辺の斜面下位は(南壁)部分的に消失している。出土遺物はなく、時期不明である。

2号土坑

2号土坑 (第88図)

1号土坑の南6m、標高337.5mに位置する。長軸はほぼ東西で、長軸長100cm、幅65cm、深さは北壁で15cmを測る。平面形態は長楕円形で、長辺の斜面下位(南壁)は大部分消失している。出土遺物はない。

3号土坑

3号土坑 (第89図)

2号土坑の北東5m、標高337.9mに位置する。長軸はほぼ東西で、中央部分での長軸長は181cm、幅82cm、深さは北壁で12cmを測る。平面形態は、ややいびつな隅丸長方形を呈している。出土遺物は西側隅の床面直上で拳大の河原石とともに、土師器壺片が出土した。時期は土師器壺が小片で決め難いが、6世紀後半前後と推定される。

4号土坑

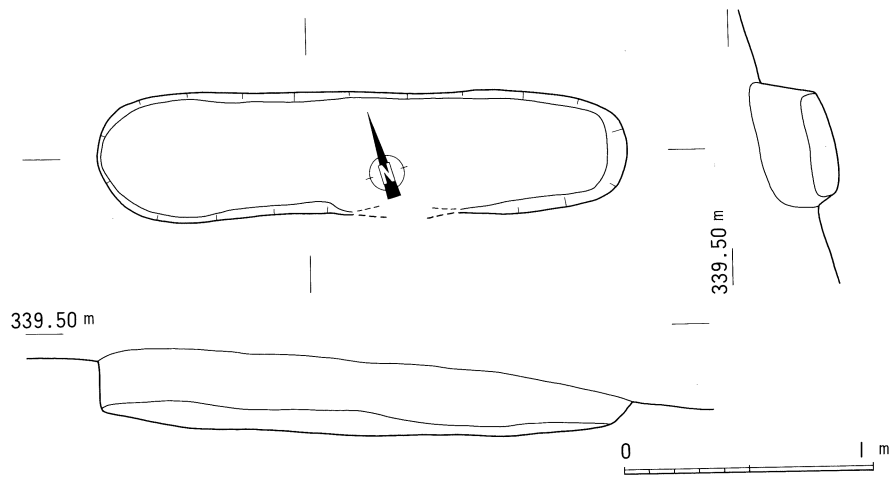
4号土坑 (第90図)

3号土坑の南東3m、標高336.8m付近に位置する。長軸はほぼ東西で、長軸長111cm、幅51cm、深さ10cm前後を測る。平面形態はややいびつな隅丸長方形を呈している。出土遺物はなく、時期は不明である。

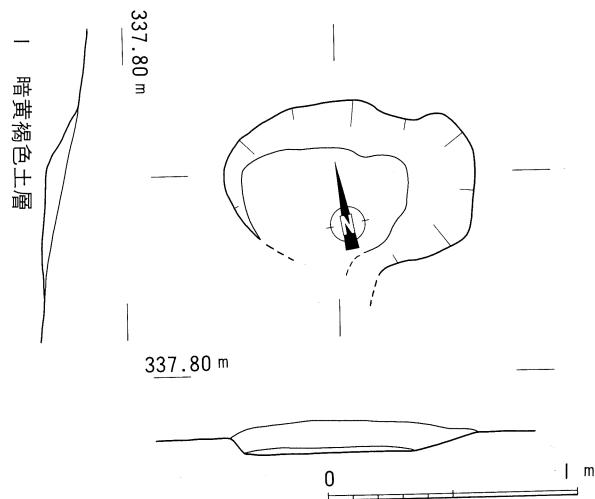
5号土坑

5号土坑 (第91図)

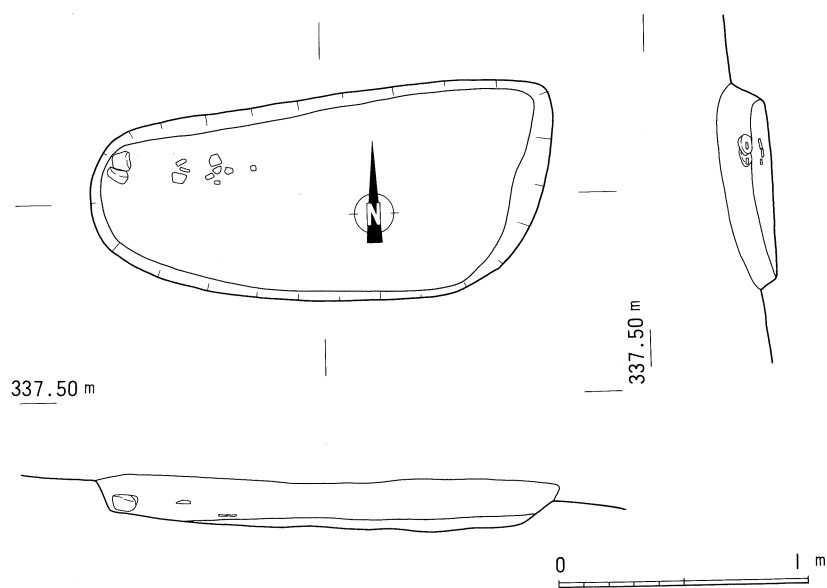
1号井戸状遺構の東南7.5m、標高339.2mに位置する。長軸はほぼ東西で長軸長155cm、幅56cm、深さは北壁で26cmを測る。平面形態は隅丸長方形を呈している。出土遺物はなく、時期は不明である。



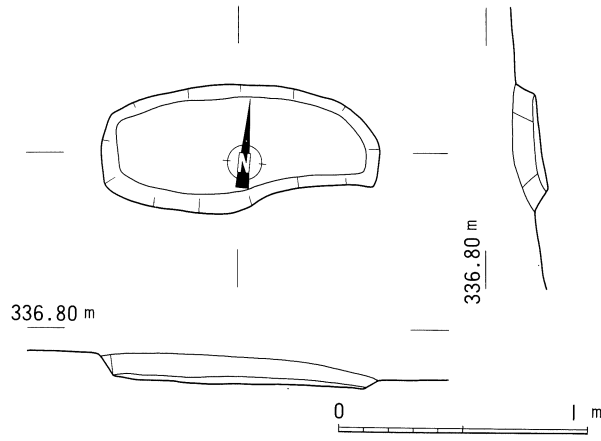
第87图 谷ノ瀬遺跡1号土坑实测图



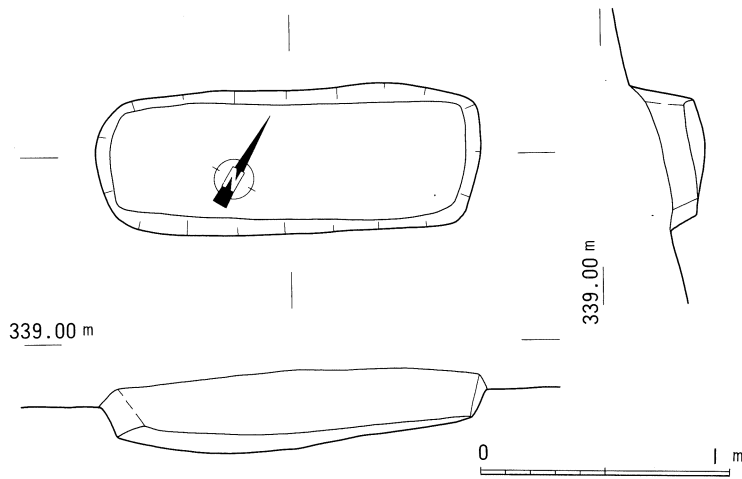
第88图 谷ノ瀬遺跡2号土坑实测图



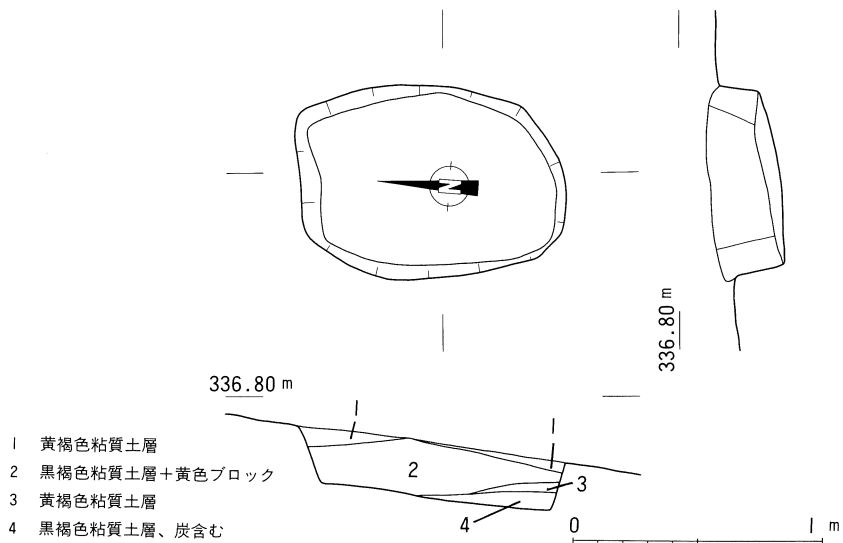
第89图 谷ノ瀬遺跡3号土坑实测图



第90図 谷ノ瀬遺跡 4号土坑実測図



第91図 谷ノ瀬遺跡 5号土坑実測図



第92図 谷ノ瀬遺跡 6号土坑実測図

6号土坑 (第92図)

5号土坑の南8m、標高336.6m前後に位置する。長軸はほぼ南北方向で、長軸長106cm、幅76cm、深さは16~20cmを測る。平面形態は胴膨れの隅丸長方形を呈している。1号溝をカットして作っているが、出土遺物はなく、時期は不明である。

6号土坑

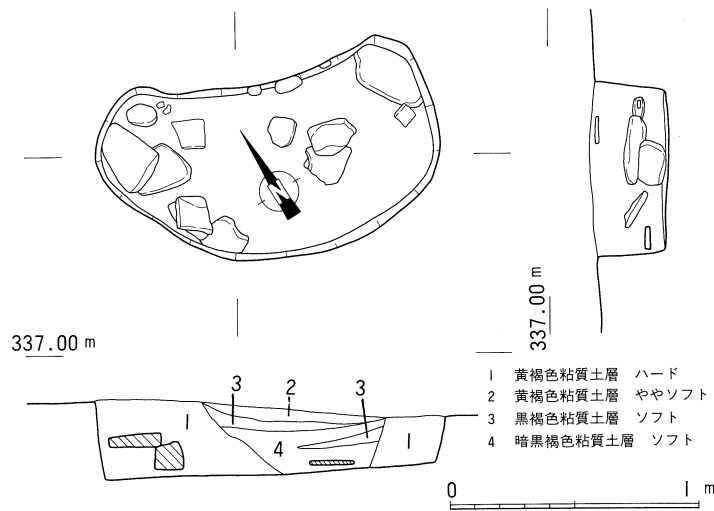
7号土坑 (第93図)

6号土坑の北西2m、標高337m前後に位置する。長軸は北西方向で、長軸139cm、幅70cm、深さ30cm前後を測る。平面形態は小判形を呈している。1号溝の埋土上面より検出できた。遺物は人頭大の河原石と埋土上面より瓦質火鉢片が出土した。

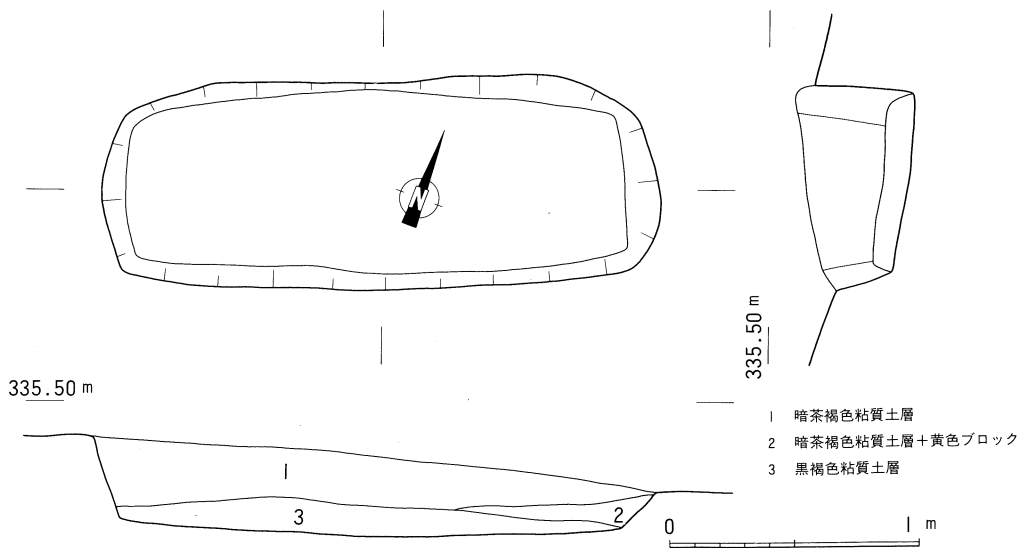
7号土坑

出土遺物 瓦質火鉢の口縁部片である。口縁下に2条の細い突帯を巡らし、その間に菊花スタンプ文を施している。色調は外面灰黒色、内断面淡橙色の、やや軟質の瓦質土器である。

出土遺物



第93図 谷ノ瀬遺跡7号土坑実測図



第94図 谷ノ瀬遺跡8号土坑実測図

8号土坑

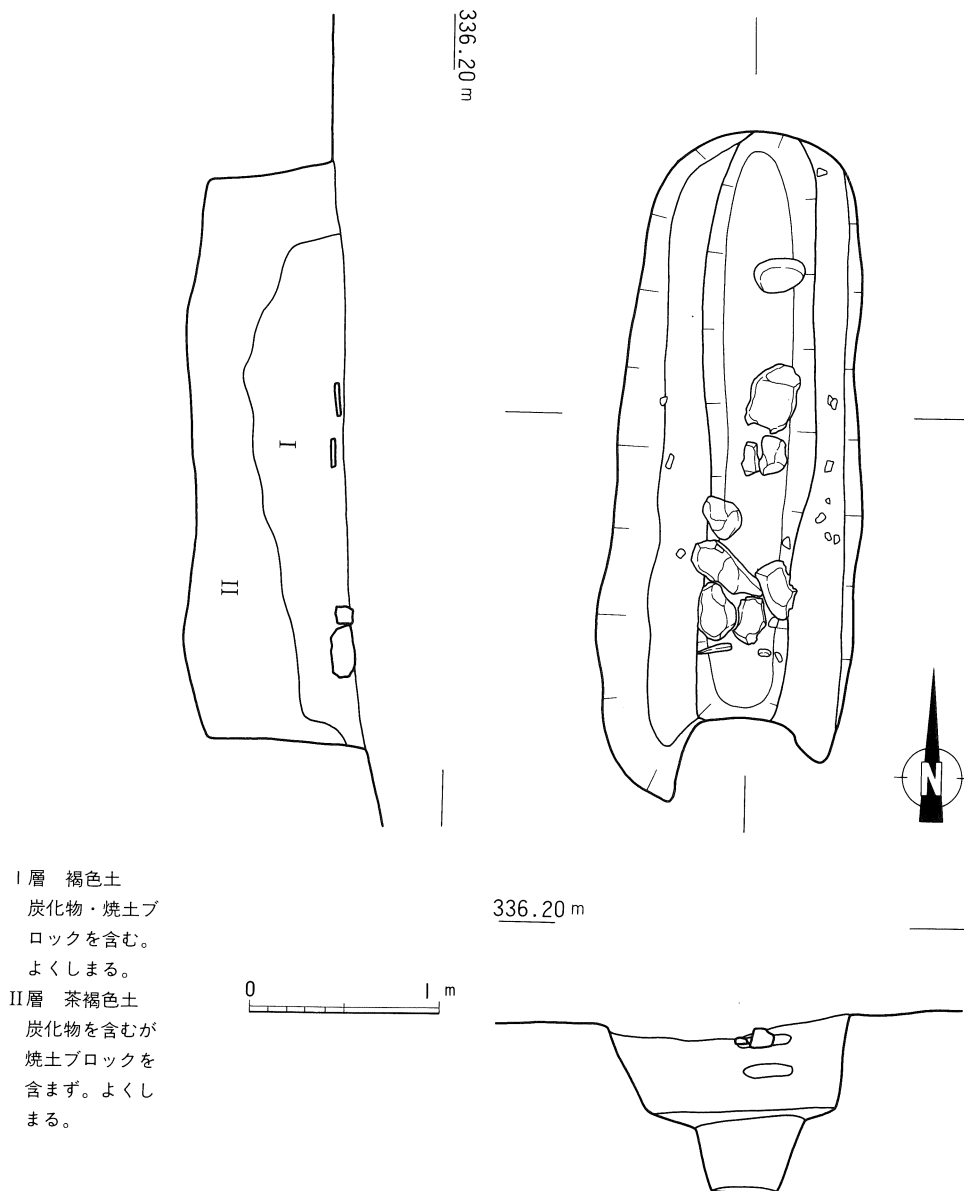
8号土坑 (第95図)

1号掘立柱建物跡の南西8m、標高335.8m前後に位置する。長軸はほぼ東西方向で、長軸長224cm、幅83cm、深さは北壁で40cm、南壁で22cmを測る。平面形態は隅丸長方形である。出土遺物はなく、時期は不明である。

9号土坑

9号土坑 (第96図)

6号土坑の南西5m、標高336m前後に位置する。形態は南側に地山の突出部を持つ隅丸長方形を呈し、地山を一段掘り下げ、そこに土坑を設けている。確認された遺構の最大値は、上段で南北約3.6m、東西約1.35m、深さ約0.9mを測る。遺物は埋土上面から人頭大の河原石を確認したほか、土器片が若干出土したが、細片のため時期・器種は特定できなかった。土坑は遺構の形態・出土遺物からみて、木棺墓であった可能性が高い。

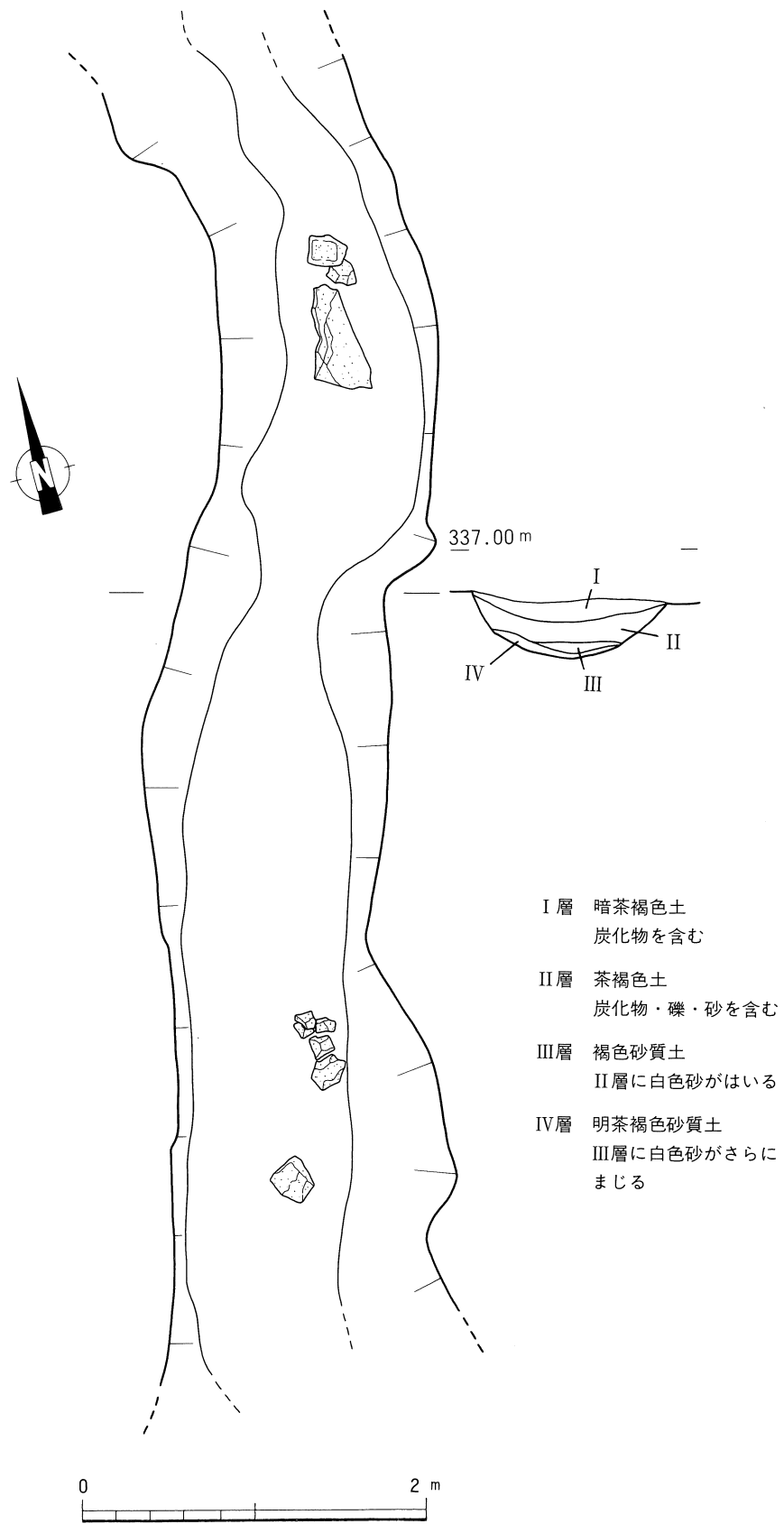


第95図 谷ノ瀬遺跡9号土坑実測図

溝状遺構 (第97図)

溝状遺構

調査区中央やや西よりで検出された。標高は336~337.5mを測る。遺構の規模は全長約8m、最大幅約1.6m、深さ約0.6mである。遺物は出土しなかった。



第96図 谷ノ瀬遺跡溝状遺構実測図

1号ピット

1号ピット (第98図)

2号土坑の西1m、標高337.5m前後に位置する。上面径56~62cm、底面径50cm、深さ44cmの円柱状を呈する。出土遺物は埋土中央から上面へかけて弥生土器片が出土した。

出土遺物

出土遺物 (第81図-4~6)

溝状遺構

溝状遺構 (第97図)

調査区中央やや西よりで検出された。標高は336~337.5mを測る。遺構の規模は全長約8m、最大幅約1.6m、深さ約0.6mである。遺物は出土しなかった。

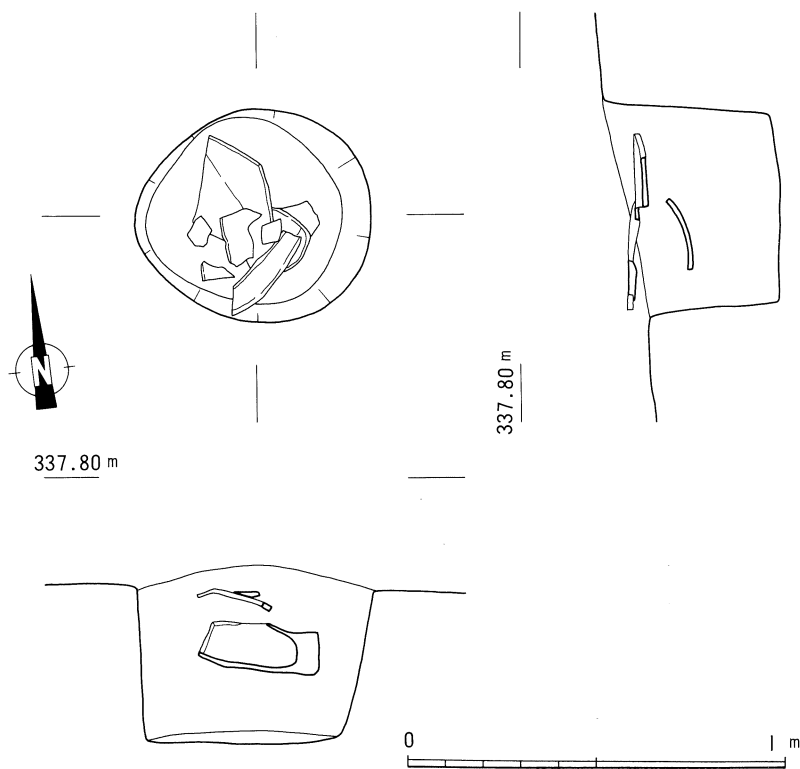
遺物包含層

遺物包含層

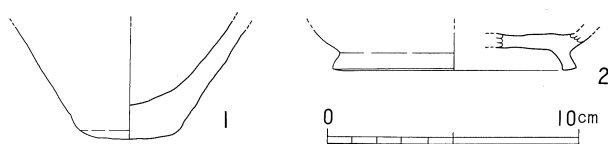
包含層は溝状遺構南側と竪穴住居跡の谷底部2ヶ所に展開している。遺物は劣化が激しく、時期・器種を判別できるものは少ない。

出土遺物

出土遺物 (第99図) 1は西側の包含層から出土した甕の底部で、調整は不明である。時期は弥生時代中期後葉~後期前葉と考えられる。2は東側の包含層から出土した須恵器坏身の底部である。全面に回転ナデを施している。時期は8世紀後葉とする。



第97図 谷ノ瀬遺跡1号ピット実測図



第98図 谷ノ瀬遺跡包含層出土遺物実測図

小 結

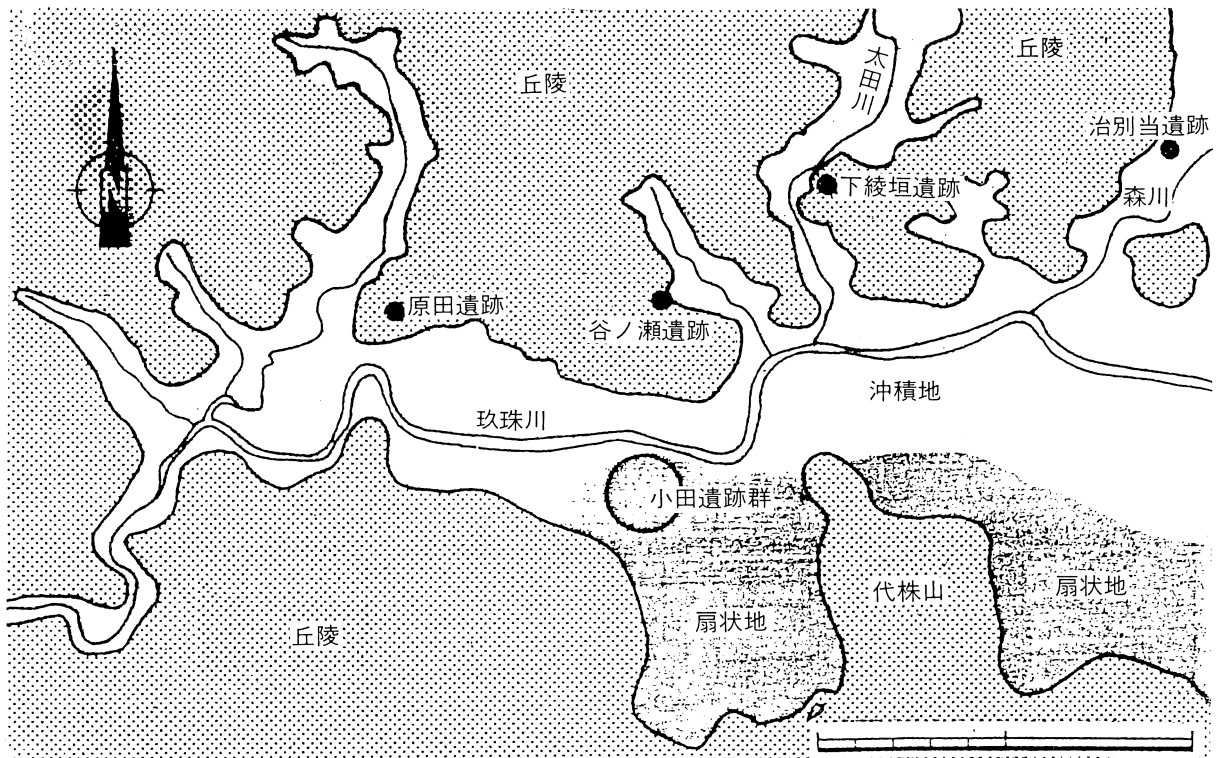
谷ノ瀬遺跡は玖珠盆地西部の尾根と尾根に挟まれた標高約335m～350mの谷部緩斜面上に位置している。谷部と遺跡の東側を流れる河川との比高差は15m程で氾濫を受けておらず、斜面に添って土砂が流れ落ちていき、薄い土砂堆積を示している。東を氾濫源、北、南、西を急峻な尾根筋に囲まれた当遺跡は谷底の限られた空間にのみ遺構、遺物が集中しているのである。

今回の調査で弥生時代中期中葉のピット及び包含層、6世紀後半の竪穴住居跡2軒、堆積状況から6世紀後半と推定される掘立柱建物跡1棟、奈良末から平安初頭の炭焼窯、時期不明の火葬墓2基、井戸状遺構1基等を確認した。このように当遺跡は単発的に人々の活動が行なわれていた事がわかるが、特に注目されるのは6世紀後半の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟のセットである。

玖珠盆地西部の6世紀後半の集落跡が確認されているのは小田遺跡群（中西遺跡、西田遺跡、冷石庵遺跡）、原田遺跡、下綾垣遺跡、治別当遺跡があげられる。各遺跡ともに竪穴住居3～4軒を一単位として生活が営まれていたようであるが、原田、下綾垣遺跡は6世紀後半を中心とした時期に丘陵や谷部に集落を形成し短時間で消滅していくことが確認されたほか、扇状地に立地する小田遺跡群は6世紀末から7世紀後葉、沖積地上の治別当遺跡は3世紀末前後から8世紀前半に断続的に生活が営まれることが知られている。当遺跡は時間的及び立地的条件から原田、下綾垣遺跡のグループに含まれるものであろうが、竪穴住居2軒と掘立柱建物1棟という最も小さな集落単位を持つもので、一時期にのみ使用された集落か、単独で存在する集落なのか、規模の大きな集落の末端に位置するのか、三方に臨む山地に生業を持つもののベースキャンプ的な集落であるのか、さらに、河川の氾濫源に臨み水田を営めたのか等、今後、6世紀後半を中心にも営まれた原田、下綾垣遺跡と共にこれらの集落が寄って立つ生産基盤と社会的位置の分析が問題となる。

参考文献

- 『小田遺跡群』 玖珠町教育委員会 1983
- 『九州横断自動車関係埋蔵文化財発掘調査概報第1集』 大分県教育委員会 1991
- 『九州横断自動車関係埋蔵文化財発掘調査概報第2集』 大分県教育委員会 1992
- 『九州横断自動車関係埋蔵文化財発掘調査概報第3集』 大分県教育委員会 1993



第99図 玖珠盆地西部の古墳時代集落跡分布図